
出会いは六つの星の下で

維緒理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出会いは六つの星の下で

【Nコード】

N5260C

【作者名】

維緒理

【あらすじ】

ルキウスは全身黒ずくめの男に出会い頭無理やり『魔封じ』をかけられてしまう。「魔封じを解いて欲しければ俺に協力しろ」。背景には世界を滅ぼすと恐れられている『六つ星』が絡んでいた。初めは威圧的な男に反発するルキウスだったが、魔術師が活躍する異世界ファンタジー。

第1話（前書き）

ようこそお越しいただきましてありがとうございます。
気軽に読んで楽しんでいただければ幸いです。
これからよろしくお願い申し上げます。

第1話

「オヤスミ。いい夢をね」

ルキウスは掴まれていた二の腕から相手の手の力が抜けていくのを感じ取ると、目の前の巨漢の男の胸元を軽く押した。

南にある都市では最大の港町エールグランデ。大小色形様々な船が数多く行きかう。港から見て北の方角にある神殿へ真っすぐ伸びる大通りから一本入った安宿街、何の装飾もない硬いマットを持つベッドに仰向けに倒れこんだ巨漢男は、純真無垢な赤ん坊のように寝息を立て始めた。顔には女神像のような笑みまでたたえている。

ルキウスは先程掴まれた腕をまるで汚れを落すかのように軽く払う。そして親指と人差し指を器用に使っていつもの手順で男の腰にくくりつけられた錢袋に手を伸ばそうとした瞬間、突然鳴った大きな物音に華奢な体をすくませた。

「…なんだ、隣りか」

状況を把握し、ルキウスはほっと胸をなでおろす。他人の金に手をつけるので、やはり、少しは、後ろめたい気持ちがあるのだ。

壁の薄い安宿だけに隣の話し声が丸聞こえで、何やら魔術師による施術が始まったらしい。金切り声をあげ、良く分からない呪文を唱えている。が、この安宿の一室で行われる呪術など低級の魔術師か詐欺と相場は決まっている。魔術師は魔力が強ければ強いほど地位も高いが規制も厳しく、軽々しく魔術は見せないし魔力のない一般庶民とそうそう交りあうことはない。よく会えて役人の中級魔術

師くらいだ。

気を取り直し、ルキウスは男の錢袋に再び手を伸ばして指をつっこむ。指先の伝える感触にルキウスは肩から力が抜けるのを感じざるを得なかった。

「夜はこれからだって言うのに、これっぽちの端金はしたがねで何するつもりだったの？」

落胆から男に向かって思わず問いかけてしまった程だ。もちろん答える筈はない。

手のひらには沢山の人の手を渡ってきたのだろう、彫られた歴史上の大魔術師の横顔が所々磨り減っている１リユキ硬貨。ルキウスに言わせれば、たったの３枚。

「これでは今日の宿代にもならないな」

といっても海の見える広い窓と、朝日を柔らかな光に変える上質のカーテン、そしてこことは比べ物にならないふかふかのベッドを備えた部屋のことである。

しかし、よく考えればこの宿へ連れてこられた時点で大金は望めない。と割り切るべきだったのだ。いや、むしろこの宿屋に泊る客にしては金を持っていた方だと言ってもいい。

「仕方がない、もう一仕事しますか」

ルキウスは手にしていた硬貨の一枚を相変わらず気持ち良さそうに眠る男へ投げた。彼にも一応良心というものがあり、全ての有り

金を取り上げるのは気が引けるのだ。1リユキあればここの宿ならおつりもくる。

投げた硬貨は窓から差し込む夕日を受けて朱色に染まった男の顔に当たったが、起きる気配は全くない。たとえ目が覚めても彼にはルキウスが何故ここにいるか分からないだろう。そして宿屋まで一緒に来た、彼の『思い出の人』を探すのは目に見えている。

ルキウスには相手の心に住む『思い出の人』に自らの姿を変える力がある。そう気づいたのはかれこれ六年位前であった。

初めは知らない人が知らない名前で自分を呼ぶことが理解できなかった。自分が何者なのか思い悩む日々が続き、人前に出るのが嫌になった。知らない相手が自分をみて目を見開いた瞬間、心臓が跳ね上がり、考える間もなく走って逃げたことも一度や二度ではない。

（かわいかったよね、あこのころの俺）

今ではその能力を『幻覚』と呼び、自分の望む時だけ相手に見せられるようになった。

これが世に言う『魔力』ではないかと初めは思った。両親のどちらかが魔術師であれば、子供のうち一人だけ魔力を持つ者が生まれるのだが、親はふたりとも普通の人間だったので魔力ではない。それ故、ルキウスは『幻覚』を両親と死に別れ、一人で生きていく事を選んだ自分を神が哀れんで与え給うた『特技』だと考えた。

（ありがたく使わないとバチがあたるってもんだよね）

ただ、この『特技』にも問題点がある。自分では何者になってい

るか全く分らないのだ。鏡を見ても自分は自分としか映らない。だから、相手の会話から今の自分が相手にどう見えているのか推測しなければならぬという面倒さはついてまわる。

ルキウスは街角に立つて心に思い出をもつ人を探し、言葉巧みに連れ出しては都合の良いところで相手に薬を盛り眠らせて生活費をかせぐ、という毎日を送っている。人の錢袋から金を抜き取るのはいい事とは思わないが、相手も会いたい人に、形だけでも、会えるのだからお互い様だ、と早い段階から割り切った。

（さっきの巨漢男は思いが伝えられなかった初恋の人らしいことを言っていたな。立派な体格の割にはロマンチックな事だ）

そして世の中にはそういう『思い出の人』に会いたい願望を持つ人間が結構多くいるらしく生活に困ったことはなかった。此処が港町という人々の出入りの激しい土地柄も関係があるかもしれない。

今やルキウスは十六という歳には似つかわしくない豪勢な宿屋で泊まり、遙か離れた首都エルクスンドラから取り寄せた有名な仕立て屋の、絹でしつらえた目の細かい柔らかな肌触りの服を身にまということが当たり前になっている。

選ぶ色は髪の色と同じ黒が多い。好きな色を聞かれれば迷わず『黒色』と答えている。そこから伸びる細い手足は対照的に透けるように白い。『幻覚』のおかげでルキウスは外での労働を必要としなかったからだ。そして深いエメラルドグリーンの瞳は、昔泊まった宿屋の女将に『神話に出てくる、水深い神秘的な湖みたいね』と言われる程翠色が濃く透明感がある。ルキウスもこの瞳の色は気に入っていた。

安宿街から抜けだし、歩いて程なく大通りへ出た。途端に往来の人々の熱気と様々な香りに包まれる。夕暮れ時という時間帯のせいもあってスパイシーな香辛料の香りや焼きたてのパンのこっぴい香りが空腹感を覚えさせる。

海辺の街らしく道の両端には新鮮な魚が所狭しと売られており、まだ跳ねているものさえある。店主の客の呼び込みにも熱が入っている。最近夏の先走りのような暑い毎日が続いており、魚が痛む前に売りさばいてしまいたい気持ちかどの店でも前面に出ていた。

「ルキちゃん、今日も来てくれるんだろうね？」

いつも夕食を世話になっている食堂の女将が忙しそうに野菜を刻みながらも窓越しからにこやかに話しかけてきた。本人曰く、昔は何人も男を夢中にさせてきたそうなのだが、今ではその面影をかくすに残すのみだ。女将は毎回『綺麗な子には特別』とおかずを愛嬌のあるウインクと共に他の人より一品多く付けてくれるのでルキウスは彼女が好きだった。

「今は先にやらなきゃいけないことがあるから。でも後から絶対いくよ」

この店の蒸した魚料理は絶品でこの街一だが、資金源ターゲットが他の店で金を使ってしまう前に捕まえなくては落ち着いて食事もできない。

女将に最大限の笑顔を見せてから、ルキウスは大通りの雑踏をしなやかなバネを使って切り抜けていく。

日暮れとはいえ軽く汗をかきながら目的の場所へ着いた。そこはこの街で一番高級な売春宿だ。この街も港町の例にもれず売春宿の

需要は高く、ピンからキリまで揃っている。

（てっとりばやく稼ぐのはここが一番いい）

高級売春宿なら客の懐もかなり暖かいはずだ。治安がいいとはお世辞にも言えないのでいつもは避けるが、例え何かあったとしてもこの街の構造は頭にしっかり入っており、逃げ切れる自信はあった。

店を物色しては歩く男達を尻目に『幻覚』を見せる態勢をとる。

気を集中するため深呼吸をしてルキウスは後悔した。満開の花束と熟れ過ぎた果物が混ざったような甘ったるい香水の香りとアルコールの鼻につく匂いが空腹も手伝って胃をむかつかせる。

（はやく幻覚を見せて、とっとこの場から立ち去ろう）

ルキウスは瞳を閉じると、途切れた集中をもう一度はじめた。

「見つけた」

街角に立ってから程なくそう声をかけられた。ただ、ルキウスが手を伸ばせば届きそうなほどその男が近づいていたことに気づかなかったので、驚きのあまり弾けるように顔を上げた。

そこには背の高い全身黒に包まれた男が一人、周りの喧騒とは対照的に静かに立っていた。

第2話

ルキウスは近くに立つ男を見上げた。

正確に言うと、顔を全て見ることは出来なかった。ドミノと呼ばれる黒い布を頭からすっぽりかぶっているからだ。かろうじて口元が見えるが、片端が上がっており、たぶん笑っているのだろう。首筋から足首までかくれる長いケープの裾が海へと吹く生暖かい風に軽く揺らめいている。そのたびにケープから見え隠れするチュニツクに似た法衣のダルマティカも黒色で、ルキウスに負けず劣らず黒ずくめだ。首からさげている石のみが黒ではなく、すみれいろ堇色だった。

そして、こんな服装を着用する職業は一つしかない。

「僧侶がこんな場所にいていいわけ？」

ここは高級売春宿のまん前、仮にも性欲の吐き捨て場だ。神殿で死者の為に祝詞をあげる人種が来るべき所ではない。

「ここで出会えるとは思わなかった」

僧侶はルキウスの問いには答えず、更に距離を縮めてきた。

心の奥で警報が鳴り始める。

手にじんわりと汗が滲んで、どうにも落ちつかない。とりあえず相手にルキウスが何者に見えているかを知る事が先決だ。それによって対処法がわかるだろう。

「その、どこかで会ったかな？」

「いや、会ったのは初めてだ。つややかな黒髪に深い緑の瞳の組み合わせも悪くないな」

「『幻覚』が効いてない……」

相手が全てを言い終わらないうちにルキウスはそう呟くと、身を翻し細い路地へと駆け出した。

（あいつは幻ではなく俺自身を見ている）

そうなるとルキウスに近づいてきた理由が分からない。この町に来て半年程経つので『幻覚』に騙された誰かがルキウスに気づいたのかもしれないが、役人に追われても僧侶に追われる筋合いはない。

こういう時は本能に従って逃げるに限る。

いくつもの路地を駆け抜け、大通りも人にぶつかりつつ何本か横断して、街を見下ろせるちょっとした丘に出た。そこは朽ち果てた神殿跡だ。一応撒いたつもりだが、万が一追いつかれたとしても神殿跡に残っている柱の陰に潜めば簡単には見つからないだろう。

治まらない息切れと共にルキウスは寝転んだ。夜の始まりと共に冷えていく石畳が火照った肌に気持ちいい。

落ち着いてくると膝から痛みがあがってきた。途中、馬車の為に設けられている車輪用の轍の溝につまずいて転んだのだが、多分その時のものだろう。結構ひどく肌がめくれ上がっているが逃げるの

に夢中で今の今まで気づかなかった。

「あいつ、何者だったんだろう？」

独り言のつもりだった。

「そこまで興味を持ってもらえるなんて、追いかけてきた甲斐があったな」

上から降ってくる男の声にルキウスは全身の細胞という細胞が逆立つのを感じた。

（もう見つかったのか！ でも、どうして？）

やつのことで上半身は起こせたものの、黒ずくめの僧侶の手から発せられる、目が眩むほどのまぶしい緑の光の玉を見た途端に体が岩のように固まってしまった。

嫌な汗が幾筋も滴り落ちる。頭は混乱してまともに物が考えられない。緑の光がゆっくりと此方に近づくたび力が抜け、体の中に空洞感が広がっていく。心もとなない気持ちさがさらに不安を掻き立てた。

（ぶつかる！）

瞳さえ閉じることが出来ないの、なす術もなく緑の光を体に受け入れるしかなかった。痛くはないが、腹部にじんわりと熱を感じた。

光が納まると身体が動くことに気づき、すぐさま違和感がある腹部を襟首から覗き込んだ。

臍を中心に先程の光と同じ色で円形の図形が描かれており、その円に沿って文字らしきものが取り囲んでいる。

（呪印だ！ でも何の？）

ルキウスは困惑の表情のまま固まる。

「魔封じ。自己紹介がわりに」

黒僧侶は静かに近づきながらドミノを取った。図ったかのように雲間から月の光が優しいベールのように降り注ぐ。長身な男の銀色の髪が絹糸と見まごうばかりに輝いた。その髪の煌きには気持ちを麻痺させる魔法でも施されているのだろうか、ルキウスはただただその輝きを眺めていた。ぼんやりした頭にそれはとても奇麗なものとして映った。少し視線を落とせば月影に照らされた細身の男はその体に神が許す限りの端整な顔を乗せている。しかしそれを隠したいのか、飄々とした雰囲気を書き加えてもいた。

暫く経って、ようやくルキウスの頭が動き出した。

（この男が『魔封じ』なのか…）

物話では何度か聞いたことがあるが、実際見たのは初めてだった。

魔法使いは大まかに4種類に分かれている。

簡単な魔法しか使えない低級魔術師『マッソ』、地方の役人に多い中級魔術師『ルドディカ』、官僚や医師の地位に就く『リジャー』、政治、祭事を中心に深く関わり魔力が著しく高い『クワント』

。

『魔封じ』はこの世の全ての最終決定を下し、世の中に多大な影響力を持つ最上級魔術師のクワント達が唯一恐れる相手といわれている。

（それがなぜ俺の目の前にいるのか？　そしてなぜ俺が…）

ここまで考えて、ルキウスには彼を恐れる必要がないことに気づいた。

「残念だけど俺は魔道士じゃないから魔封じしても意味がないよ」

男は目を見開き、そして笑った。あまりにずっと笑い続けるので、だんだん腹が立ってくる。笑うのはむしろルキウスの方だ。

「なんだよ」

男はやつと笑いをおさめると器用に片眉を上げた。

「街に下りて得意の『幻覚』とやらを誰かにみせてみるよ。ちなみに俺には通用しないから」

ルキウスは相手を斜に睨^{はす}んでから丘を大またで降りていった。男も後ろからついてくる。

（ほんんとうつに、いろいろムカツク。死ぬほど走って撒いたつもりだったのにあっさり見つかったやうし、あいつは理由もなく魔封じをしてけろつとしている。そして一番むかつくのは、あいつの髪が一瞬でも綺麗だと思った事だ！　いや、ぜんんぜんっキレイ

なんかじゃねー！！ 破壊僧め、今にみてるよ）

絶対男の鼻を明かしてやる、そう意気込んでルキウスは一番近い通りに出た。集中するために深呼吸をしたが、その時点でいつもと違う事に気づかざるを得なかった。

腹の底から湧いてくる、蒼い波動にも似た力が全く感じられない。

背中に一筋の汗が流れ落ちるのが分かった。もう一度、もう一度と何度となく試してみるが上手くいかない。終いには、どうやって今まで『幻覚』を見せていたのかさえ分からなくなってきた。

（俺は魔封じされたのか…）

そう思うと体が揺らいた。男が手を差し伸べてルキウスを支える。

（よけいなお世話だ）

ルキウスは手を振り払ったが、払い方があまりにも弱々しかった事が自分でも分かった。

「俺が魔道士のはずはないんだ」

勝手にルキウスの口から呟きが漏れた。

「いや、『魔封じ』はその名の通り『魔』を『封じ』るものだから、封じられたお前の力は立派な魔力だ。喜べ」

男の言葉が胸に突き刺さる。ぜんぜん嬉しくなんか無い。むしろ不規則な音が耳元で激しく鳴り響いているかのように不愉快だ。

そんなルキウスに構わず男はさらに続けた。

「どんな程度でも魔力のあるものは神殿へ届けるのが決まりになっているのは知っているよな？」

男は右手の甲を見せた。そこには月を模った紋章が描かれている。
歴れっきとした僧侶の紋章だ。そして神殿へ届け出た魔術師の右手の甲には太陽を模った紋章がなくてはならない。

もちろんルキウスにはそんなものはなかった。

「神殿へ届け出ない者の摘発も仕事の一つだが、魔力を使って悪事を働く者を取り締まるのが俺の本業でね」

「知らなかったんだからしかたないだろ」

はき捨てるように言ったが勢いはなかった。今のルキウスにとって男に捕まるか否かなどはどうでもいい。自分の『幻覚』が魔力であつた事で、もっと根本的な問題が生じたのだ。

「普通は気づくだろう。よっぽどの間抜けでない限りな。それとも魔力でないと裏付ける何か根拠でもあるのか？」

「俺の両親は二人とも普通の人間だったからだよ」

といつても、父親は今までの歴史上重職をクワント、リジャールが占めてきた中、初めて魔力のない人間で首都エルクサンドラの都長となった話題の人物クレル・クリスハルドだった。あまり会えなかったが、淡いブルーの澄んだ瞳は清潔さを、筋が通った高い鼻は

誠実さを代弁しており、尊敬と憧れの念を持って見たものだ。

母サラ・クリスハルドも魔力は持っていなかった。ルキウスと同じ美しく柔らかな黒髪をもち、こよなく花を愛する人で、薔薇の香りを嗅ぐと今でも優しく慈愛に満ちた立ち振る舞いが目に浮かぶ。

思い出の中の両親はルキウスにとってこれ以上ない人達であり、その二人以外の親などいないのだ。

「では、おまえはその両親の子供ではないかもしれないな」

「黙れ！」

気づけばルキウスは男の胸倉を掴んでいた。

（今までそれを認めるのが怖くて考えないようにしてきたのに、この男はいとも簡単に言っただけ。他人事だと思いやがって！）

『幻覚』の能力を『特技』^{ちから}と思い込もうとしたのもそれ故だ。

「自分が何者か知りたくないか？」

男は掴まれた胸倉を外そうともせず静かに言った。

鋼色の瞳に深みが加わる。

「俺に協力してくれるなら、俺もお前に協力してやる。それに、そうだな、お咎めなしに魔術師として届出ができるように計らってやるわ」

「断つたら？」

「おまえは魔力で人様から金をうばっていたのだから十分俺の制裁をつける余地がある、ということだ」

魔封じされたままになるのだ。腹の呪印は罪人の焼印と同じ意味を持つ。これがある限り普通の仕事にはありつけない。ただでさえ今までまともな仕事に就いたことがないルキウスとなると、なおさら難しい。

「わかった」

少しの間後、ルキウスは言った。

今の状態ではこの男に敵わない。ただルキウスを必要としていることは分かる。

（そこがこの男の弱点かもしれない）

ルキウスは男の胸元から手を放すと、右手の人差し指を一本男の顔の前に突き出した。

「協力するよ。そのかわり、約束は守れよ」

男は一瞬意外そうな顔をしたが、片方の口角をあげると頷いた。

ルキウスはそつと人差し指に中指を付け加えた。

「実は、二つお願いがあるんだけど」

「多いな。まあ言ってみろ」

「魔封じ、解いてくれない？　これから行動を共にするのなら、信頼関係が必要だろ？　俺を信用してくれる証として解いてよ。そして俺もお前を信用する」

「よく回る口をもっているな」

そう言いながらも男は片手をルキウスの額に当てた。一瞬鳥肌が立つほどの悪寒が体を通り抜けたが、すぐに腹の奥から暖かい気が全身にじんわりと満たされていくのが分かった。今ではもう体に空洞感はない。元にもどったのだ。

「ありがとう」

思い通りの展開とあまりの開放感に、にっこり笑って素直に礼を言つと、男は少しだけ居心地が悪そうに瞳を彷徨わせた。

この男が初めて見せた戸惑いかもしれない。

「二つ目は何だ？」

調子を狂わされたのが嫌なのか、少しぶっきらぼうに言った。今まで飄々としていて、淡々と語る彼の言葉に少しでも感情を滲ます事が出来た事にルキウスは満足感を覚える。

（魔封じだか何だか知らないけど、案外扱いやすい男なのかも）

再びルキウスの顔から自然と笑みがこぼれた。

「俺、夕飯を食べに行きたいところがあるんだ」

先ほど女将と約束したのだ。それに、きつとしばらくこの町には戻れなくなるだろうから、是非とも食べておきたかった。

（ただこの街を出るときは俺一人で、だろうけど）

ルキウスは心内でこっそり呟いた。

第3話

ルキウスは無言でラウドを連れて女将との約束通り馴染みの食堂に入る。人気の店だが、夕食時を少し過ぎていたのですぐ席に着くことができた。

「お前の名前、ルキウスというのか」

店に入ると女将に名前を呼ばれ、名前がばれてしまった。思わぬ誤算だ。実はこの店に着くまでいくつか偽名を考えていたのだが、全くの無駄となってしまう。このようにばれるのであれば今思うと嘘の名前を名乗らなくて良かったのだが、本名を知られると精神的に縛られた様で落ち着かない気持ちになるのは何故だろう。

「ルキウス…、姓は何だ？」

「ただのルキウスだよ。庶民に苗字なんてないだろう」

これ以上居心地の悪い思いをしたくないので嘘をついた。本当は姓を持っているが、そこまで教えてやる義理はない。それにルキウス・クリスハルドという本名はもう使うことはないだろう。クリスハルドという名前は珍しい上に父のお陰で有名で、突っ込まれることこの上ない名前なのだ。

嘘をつく時、言葉は少なめに限る。

「じゃあ、あんたの名前は？」

話題転換で尋ねた。相手は何も隠すことがないのでさらりと答え

る。

「俺か？ 俺はラウド・ダニング」

「やっぱりクワントなんだよね？ こんな間近で初めて見た」

まじまじと眺めるルキウスにラウドは苦笑する。

「クワント出身だが、『魔封じ』の身分は魔術師でなく僧侶だ」

「ダニングっていえば、確か政界のナンバー2だよな。息子なの？」

「まあな…よく知っているな」

ルキウスは声色の違いを聞き逃さなかった。微かだが今までと違い歯切れが悪い気がする。しかし時を同じくして食欲をそそるスパイシーな香りと共に料理がやってきたので追及してやろうかと思っただが、やめた。今のルキウスには腹ごしらえの方が重要だった。

注文した蒸し魚の他に、頼んでない料理が三品並べられる。理由の一つ、女将がラウドのことを気に入ったからだ。

鋼のような艶やかな銀色の髪は絹のようにしなやかに背中の中ほどまで流れている。瞳も同じシルバーで、ここでは常に人当たりの良い笑みを浮かべていた。端正な顔立ちが女好きするものであり、女将もその例に漏れなかったらしい。

ルキウスの時より二品も多く出た事に気分を悪くしたが、それでもここに食べに来て良かったと思った。

（絶品の蒸し魚も当分は食べられなくなっちゃうからな）

味を覚えこむようにルキウスはもくもくと食べた。ラウドもうまいな、と言い、女将からさらに麦芽酒を引き出すことに成功した。

「ここでまってよ」

ルキウスは自分が泊まっている宿の部屋の前で一緒に入ろうとしたラウドを制止した。これからは一緒に行動するということで、宿屋もラウドが泊まっている部屋に移ることになり荷物を取りに来たのだ。

「俺も十六年生きてると、人に見られたくない物の一つや二つはあるんだよ」

そういつて部屋に一人入り、ドアを閉めた。

ドアに背を預け、がらんとした広い部屋を眺める。見られて困るものなど一つもない。

引き出しからあらかじめ入れておいたロープを取り出し、引つ張って強度を確かめる。そしてあらかじめめられた荷物を掴む。それもといた量ではない。今までに貯めたお金と母が縫ってくれた服。もちろん成長してとつくの昔に着ることはできない。しかもそれには血の黒くなったシミが至る所についていて、その上、所々に焼け焦げた跡がある。まだ軽く焦げ臭い香りもするが、母の唯一の形見として捨てることができない。必要最低限これだけあれば十分だ。後のものはまた買えば済む。こんな日もあるうかと準備して

おいて良かった。さすがに『魔封じ』されるとまでは想定していなかったが。

ルキウスはそれらが入った布袋を肩にかけると窓へ向かった。

ここは三階で真下は海である。だからラウドも安心して自分を一人にしたのかもしれないが、下ではなく上の屋根へ行けば脱出が可能なことは下調べ済みなのだ。いろいろな宿を転々とし、住居をここに決めた一番の要因は今思えば「逃げやすさ」からだった。

海から吹きあげる潮風に髪を煽られつつもしなやかな肢体を使って軽々と屋根の天辺に立った。月明かりのおかげで歩きやすい。

「訳のわからない魔封じなんかについて行く訳ないだろ」

なるべく音を立てないように隣接する建物に飛び移り、適当な場所にロープを引っ掛けると、するすると裏路地に着地することが出来た。計画通りだ。

丘から海へと吹きぬける風が満足したルキウスの頬をなでていく。

（身を隠すためには他の町に行った方が安全だ。でも…結構好きな街だったな、ここは）

ふいに沸きあがる寂しさを感じつつ風の行く先を目で追う。その先で真つ黒な人影が目に入った。

心臓がひとつ、トクン、と大きな音を立てる。

それが誰か分かるのに時間はかからなかった。ともすれば固まっ

てしまう体を叱咤して後ずさりする。瞳は人影から離せない。汗が次から次へと流れ出し、鼓動はこれ以上ないくらいに脈打ちだした。
(またあっさり見つかった。これが魔封じの能力なのか?)

二度同じ目にあえばそうとは思えない。

ラウドは何も言わず近づいてくる。石畳の継ぎ目に足を取られ、ルキウスは転んでしまった。それでも何か一矢報いたくて、近くにあった小石をラウドにむけて投げつけた。

「正しい攻撃法だ。ただ、それくらいでは効かないがな」

小石を軽く避けたラウドの声は低く、あきらかに怒っている。当然これから魔封じが施されるに違いない。

(今度魔封じを受けたら、先ほどの様にもう簡単には外してもらえない)
しかし何故かルキウスはそれ以上にラウドの瞳に浮かんだ怒りの中に混じる失望の色の方が耐えがたかった。このような瞳で見られたことは今まで一度もなかった。

予想通り、先程受けた緑の光を浴びてルキウスは再び腹に呪印を持つ身となる。

(これからどうなるのだろう? 俺はどうやって生きていけばいいのだろう!)

一気に不安が心の中に押し寄せてきて、瞳から知らず知らず涙が

溢れ出す。

「おまえの信用とはこんなものか」

ラウドは容赦なくルキウスの腕を掴むと無理やり立たせた。

「これが最後だ」

ラウドの声はさらにルキウスの心臓を締め上げらせる。ルキウスは目をぎゅっと瞑った。

（そう、もう人生の最後に等しい）

しかし、続いたラウドの言葉にルキウスは目を見開いた。

「魔封じはする。だが、俺の言うとおりにすれば、最終的に魔封じを解いてやる。それか、魔封じをされたまま俺の前からいなくなるのもいいぞ。最後の二者択一だ」

こんなもの二者選択にならない。呪印の施された身で、一人で生きていくことなど到底できはしない。世の中はそれほど甘くはないのだ。

「わかったよ、あんたの言うとおりにすればいいんだろ」

強がって言うことが最後のプライドだったのだが、かえって心の弱さを露呈してしまった気がした。

ラウドはルキウスを掴んだ手の力を緩めたが、放そうとは思わなかった。まだ逃げると思っているのだろうか。

（そんな元氣、もうないんだけど）

ルキウスはラウドに引きずられるように歩きながら、夜道でも歩きやすいようにと道に等間隔にはめ込まれた白い大理石を見た。

それは月明かりを反射させて淡い光を放っている。

現実離れたした幻想的な風景に、ルキウスは今起こっている事も夢ならいいのと思った。

第4話

太陽はとつくに昇り、もうすぐ昼と呼ばれる時間になる。

ラウドは弾みの悪いベッドにそつと腰をかけ、傍らに眠るルキウスを見た。昨日の疲れがそうさせるのか、いつも昼まで寝ているのか分からないが、まだまだ起きる気配はなさそうだ。

ルキウスは両耳の前の髪の毛が鎖骨に届くくらい長いが、他はそれより短く感じよく跳ねている。漆黒の髪がかかる顔は目鼻立ちがこれ以上なく絶妙に配置されており、人目を引かずにはいられないだろう。今は閉じられているが、特にあの深い緑色の瞳は悪魔に魂を売っても手に入れたいと願う若い娘たち、いや、老若男女問わずそう思わせるのに十分な逸品である。ケットを抱いて丸くなって寝る様は昔飼っていた黒猫を思い出させた。今は寝ているせいか、十六という歳の割には幼く見える。薄く開かれた唇からは規則正しい寝息が聞かれた。

しかし昨晚はその口から不平しか出てこなかった。

初めのうちは落ち込んでいるのか大人しかったが、だんだん時間が経つにつれて調子が戻ってきたようだ。部屋が狭いだの、ベッドが硬いだの、隣がうるさいだの全てが気に入らないらしい。

今までこの街で一、二を争う高級宿に泊まっていたのだから余計にそう見えるかもしれない。ラウドも泊まろうと思えば何泊でも豪華な宿に泊まれる。しかし格式ばった宿よりも気取らない雑多な場所の方が好きなのだ。

「高貴な生まれのおかげで高級宿は珍しくないからな、こういう所の方が興味深いんだ」

あまりにうるさいからこう言ってやった。

「生まれが悪くて悪かったな」

ルキウスはむくれてそう言い返した。だが、ラウドはルキウスの出生は悪くないと見ている。本人は全く気付いていないが、立ち振る舞いや食べ方の端々に良家の品を感じさせるのだ。こういうものは一朝一夕で身に付くものではない。

どう文句を言おうがこの状態が変わることはないと思ひあきらめて寝る気になったのか、ルキウスはふいと横を向いて頭からケツトをかぶった。が、すぐにケツトをめくり、上半身を起き上がらせてこちらを見た。

「そつえばさ、あんたに協力することって、何？」

ラウドは軽く目を見開いた。そして次にはこみ上げる笑いが止められなかった。

「なにがおかしいんだよ。よく笑うヤツだな」

まだ出会って短期間だが、確かにルキウスといると飽きない。最近そう言えば笑っていなかったな、とラウドは笑いながらそう思った。一方、ルキウスは眉間に皺をよせて、もういい、寝る、と再びケツトを頭からかぶり、今度はそのまま眠りに入った。

これが笑わずにいられようか。魔封じをされている今、『協力す

る』ではなく『命令にしたがう』立場なのに、ルキウスはちゃっかり『協力』という言葉を使っている。どうしても対等という立場を確保したいのだろう。

それにもう一つ、そういう質問は普通もつと前にするものだ。

（そう、初めて魔封じをした神殿跡の丘ですべき質問だ）

その時にしなかったという事は、もうその時点で逃げるつもりでいたに違いない。頭の回転が速く、行動力もあるようだ。

（頼もしいのか、厄介なのか。…多分にして後者だな）

これからの事を思うと笑うどころでは無く、ため息がでる。

知らない間にラウドは左の首筋に手を当てていた。

これはラウドの秘密。

手の下にあるもののせいでどんな時でも首が隠れる服を着ていなくてはならない。髪を伸ばしているのも少しでも首筋が隠れるようにする為だ。

どうしてそうなってしまったのか理由が知りたい。物心ついた頃からそう思っていた。このものがある為に幼き日の多くの時間を一人で過ごさねばならなかった。物質的には不自由なく暮らしてきたが、心の空洞感は何をもつてしても埋められなかった。

自分一人でその謎を解くつもりだったが、仕事で訪れたエールグランドでルキウスをみた途端に彼から目が離せなくなった。

魔力が強い魔術師。しかも神殿に届け出ていない人物。ラウドが真に求める相手。

この世にそんな都合のいい人材がいるとは思っていなかった。魔術師は一般人より地位が高く待遇もいい。魔術師と認めてもらうために喜んで神殿へ赴くのが普通である。そんな中、まさにルキウスは天からの恵み以外の何者でもなかった。

ルキウスを観察し、絶好の機会^{とき}を待った。ただ、逃がしたくないばかりにいきなり魔封じをして見せたのは少々方法が手荒かったかもしれない。その後悔してルキウスに言われるまま一度かけた魔封じを解いた。それで二人の関係が良くなれば、と本気で思った。が、結果はまた魔封じを施さざるを得なくなってしまった。

今のルキウスは魔封じがあるために仕方なくラウドについてきているだけである。魔封じを外したらまたどこかへ行ってしまうのだろう。彼が居なくなっても探し出すのは簡単だが、欲しいのは協力者であって今の関係では意味がない。また同時に、ルキウスを相手にすると自分のペースがつかめなくなるような気分になるのも困る。

（初めの予定通り見切りをつけて一人でやるか、それとももう少し様子を見るか…）

ジレンマがラウドの心を蝕みはじめる。

ラウドは心のなかの重苦しい霧をはらうように首を振った。

（決めるのはルキウスをあいっに見せてからにしよう。…もうそろ

そろ来てもいい頃なのだが)

そう心で呟いた時、1階にある食堂の辺りから感嘆とどよめきが聞こえてきた。

「やっと、おでした」

ラウドは立ち上がると、部屋のドアを開ける。程なく不機嫌な顔丸出しで待ち人が階段を上がってきた。

「私を呼び出すのなら、もっといい宿とりなさいって何回いったら分かるわけ？」

ヴェルマ・サレイドはゆるくカールのかかった真つ白な長い髪をうるさげに後ろへ払った。

第5話

ラウドの待ち人、ヴェルマ・サレイドは全身頭からつま先まで白色である。羽が生えていれば天使が舞い降りてきたと皆思うだろう。

彫刻のように均整の取れたヴェルマの美貌を見たものは見とれて声が上げられない。そして、しばらくしてからやっと感嘆の声のみを出すことができるのだ。

ヴェルマを女性だと思っている人は沢山いるに違いない。顔立ちが中性的でどちらの性別ともとれるが、言葉は女性のように話す。服もレースをたっぷりあしらったものを好んで着る。しかしその下には締まった男性の肢体があることをラウドは知っていた。同時に魔術師の中で最高位のクワントの中でも強い魔力を持つことも。

「あの子が例の子？」

ラウドから大体の経緯を聞いたヴェルマは眠るルキウスに近づくと躊躇いなく頬をつねった。

「起きないわね」

そう言って軽く肩を竦めてみせる。別に何処へ行くわけでもない。あまりにルキウスが気持ち良さそうに寝ているので、ラウドは無理に起こすのが可愛そうになった。

「寝ているんだからほっとけよ。それにそんな起こし方はないだろう」

ラウドの言葉で途端にヴェルマの唇が尖る。

「なによ、優しいじゃない」

「寝ている方が静かでいいんだ。ただそれだけだ」

機嫌の悪いヴェルマは手に負えない。ここで彼以外の人物を誉めたりかばったりする発言は避けるに限る。

につこり笑ったヴェルマだったが、再度ルキウスの頬をつねり、更にひねりを加えた。相変わらず性格が悪い。しかしヴェルマとの付き合いの長いラウドにしてみれば、むしろそれはヴェルマらしい行動だと言わざるを得ない。

「つたいなあ」

眠りを邪魔されて不満声のルキウスはもがくように手を伸ばしヴェルマの手を払う。そして驚いたようにそれを引っ込めた。ぱつちり開いた緑の瞳は辺りをさまよい、程なく落ち着く。自分の置かれている状況が昨日と変わったことを思い出したのだろう。

「あんたが二回も魔封じを受けた、可愛いそうなおバカさんね」

ヴェルマは喉の奥で忍ぶように笑った。

いつもながら他に言い方があるだろうとラウドは思わずにはいられない。ルキウスも癪に障ったのかヴェルマを睨み上げる。が、すぐさま表情を変えた。

ヴェルマを見てうつとりとした顔つきに変わる人は大勢見てきた。

しかし今ラウドが見たルキウスの表情は感嘆ではなく単純な驚きが前面に出ているものである。ラウドは新たなルキウスの一面に興味を持った。ヴェルマもいつもと違う反応に気づいたらしい。

「私、あんとどこかで会ったかしら？」

慌てたようにルキウスは思いきり首をふる。

「ないない、初めて、初めてだよ。ただ、その、…あまりに綺麗だったからさ」

あきらかに動揺を隠していることが分かるのだが、『綺麗』といわれてヴェルマも悪い気がしないのだろう、当然と言わんばかりに頷いた。

「で、この子をどうしたいんだっけ？」

ヴェルマは腰に手をあてながらラウドへ振り向く。漸く本題に入れそうだ。ラウドは顔を引き締めた。

「ルキウスの魔力がどの方面に向いているかが知りたい」

「そう。じゃあお腹の呪印外してくれる？」

ヴェルマの言葉に、顔には出さないがルキウスが色めきたったのが分かった。ヴェルマはわざと声に出して大きな溜息をついた。

「あんたさ、クワントの中のクワントと言われる私と、魔封じのラウドから逃げられると思っているの？ おめでたいわね」

すぐに釘をさされ、ルキウスもわざとため息をつき、両手を軽く挙げた。

「好きにすれば？」

魔封じを外したルキウスをヴェルマは不躰に眺める。ルキウスも居心地が悪そうにはしているものの、どの系列の魔道士か知りたいのか大人しく黙っている。

「どちらかという戦闘には向いていないわね。出来ないことはないでしょうけれど」

「何に秀でているんだ？」

ラウドにはその点が重要だ。

「ちょうどいいわ、あんたその膝の怪我、自分で治してみなさいよ」

ヴェルマはルキウスの膝の怪我を指差した。

昨日転んでつくったものらしい。ラウドが追ってきたせいで転んだんだ、と散々文句を言われながらも手当てはしたが、一日で治るものではない。

「どうやるか分かんないよ」

ルキウスは本気で困っている。今までそのように能力ちからを使ったことが無いのだろう。

「だから、手のひらに力を集中するイメージを描くのよ。言っとくけど『治す』がここでの目標だからね、その力に変換するの」

「なんか呪文とか無いの？」

ルキウスの問いをヴェルマは鼻であしらった。

「言いたければどうぞ」

「なんて言つの？」

「それは自分で決めなさいよ。呪文なんて『きっかけ』に過ぎないんだから。高い魔力を持つ魔術師程呪文なんて唱えないわね。相手にこれから何か魔法を使います、って教えるようなものだから。まあ、何か唱えた方が庶民受けはいいわよ、実際」

馬鹿にされたような気がしたらしく、ルキウスは少しムツとして眉間に皺をよせながらも手を傷口にあて始めた。黙っているところを見ると呪文を唱えるスタイルはとらないと決めたようだ。

ラウドはその様子に自然と笑みがこぼれるのを感じ、慌てて顔を引き締めた。見られたらヴェルマの機嫌をそこねる。そしてそのとばっちりを受けるのはラウドではなく残念ながら無実のルキウスの方なのだ。

程なくルキウスの手から淡いブルーの光が出始め、完治まではいかないものの、捲れていた皮膚はほぼ元通りとなった。

「すっい…」

ルキウスはため息に似た呟きを発した。自分の魔力の新たな使い道に感動を隠しきれない様子だ。

「教える人がいいから、当たり前よ」

ヴェルマはすべてを自分の手柄とする。

（ルキウスの得意分野はヒーリングか）

悪くは無いが、できれば少しは攻撃のできる魔力も備えて欲しい。そう思ったラウドの気持ちを察したのか、ヴェルマはラウドの肩を軽く叩いた。

「そんな事だけで満足してもらったら困るわ。次は基本の四つのエレメントね」

水、雷、風、火の四つの基本となる攻撃魔法をルキウスに見せるのだ。

（いつもなんだかんだ言いながら最終的には協力してくれるのがありがたい）

ラウドはヴェルマに感謝した。

「初めは水ね」

ヴェルマはさつと優雅に片手の手のひらを上向きに翳し、その上で綺麗な水の円を作って見せた。宿の部屋の中ということで、規模も威力も抑えている。自由自在に規模を操れるのも魔力の強い証拠だ。

ルキウスもまねをして手のひらを広げた。

先程のヒーリングで力の変換のコツを得たのか、形は整っていないものの、水を出すことに成功している。

（初めてにしては筋がいい）

驚きをもってラウドはルキウスを眺めた。

「できた！」

よほど嬉しかったのか、ルキウスはラウドに満面の笑みを向けた。

ラウドは平然と頷いてみせたが、ルキウスの笑顔に二度目の戸惑いを感じた。神殿跡で魔封じを解いた時に見せたルキウスの笑顔を見たときと同じ感覚だ。

（本当にこの子はやつかいだ）

ラウドは心の中で軽く舌打ちをした。ヴェルマも驚いたように片眉を上げたが、何も言わず続けて雷、風と出していた。

今やルキウスは食い入るようにヴェルマを見ている。

（いい傾向だな）

ヴェルマの繰り出す魔術は美しくて乱れがない。魔術師への憧れを持たすには十分だ。しかしラウドは真剣なルキウスの瞳に恐れが浮かぶのを見た。それはヴェルマが最後の火を出したときだ。

（火が恐いのか？）

ヴェルマはそれに気づかない。ルキウスも気づかれないように振舞ってはいるが、歯を食いしばって体が震えないようにするのに精一杯のようだ。

咄嗟にラウドはヴェルマの肩を掴んでいた。

「ありがとうヴェルマ。いきなり沢山みせてもルキウスが混乱するだけだから」

「こんなの沢山の内に入らないわよ」

そういいながらもヴェルマは火を納めた。ルキウスも細いため息を吐き出す。

「俺もそれが出来るようになるのかな？」

ルキウスは先程の恐怖感を隠すように明るく言った。

「ラウドに頼んでいい師匠に就けてもらうことね。別にあんたのこゝと褒めたいわけじゃないんだけど、がんばればそれなりの魔道士になれるわよ。私程じゃなくてもね」

ルキウスに言っているようだが、それがラウドに対するヴェルマの『ルキウスの見立て』の報告だった。今回は主にこのために来てもらったのだ。「私程じゃなくてもね」というのは自画自賛も多少は、いや多大に含まれているだろうが、ルキウスの力はクワントになれる程の能力持ちだということを暗に言っている。

(やはり間違いなかった)

ラウドは喜びに心が沸き立った。協力者はルキウス以外に考えられない。ラウドはヴェルマを振り返った。

「では…」

「駄目。私は弟子を取らない主義なの。それにオコサマは私の好みじゃないわ。こういうナマイキなガキは特にね」

ヴェルマはラウドの願いを先読みし、且つ、にべもなく断った。

「ねえ、それより…」

ヴェルマは膨れ面のルキウスに目を移す。

「この子、誰の子？」

第6話

ルキウスの両親は誰か。

丁度ヴェルマの問いをラウドも考えていた所だった。ルキウスは両親を魔力のない一般人だと言っていたが、本当だろうか。クワント並みの魔力を持つ者は実はクワント以外の魔術師からも生まれるのだが、ルキウスのような『幻覚』など、特殊な能力を持つのはやはりクワントからしか生まれないとされている。実際前例もない『魔封じ』や、ルキウスを二度も見つけ出した『魔力追跡』もクワント出身故のラウドの特殊能力で、それは魔力の強いヴェルマにもない力だ。彼は彼でラウドにはない特殊能力を持っている。

ヴェルマの言葉でルキウスの体が強張るのが見て取れたが、ヴェルマはお構いなしに続けた。

「クワントは今、十二人いるわよね、その内ジョコフ家の三人とガレッド家の二人、クラフ家の二人は家系がしっかりしているから除外。のこりは五人ね。その内の一人、ステイーヴェル家は魔力のある子供を亡くして以来魔力を持つ子供が生まれたって聞いたことがないし、モイア・ダニングはラウドの父親よね。私のママも除くでしょ。後は…」

「フオゴル・リルツェン」

「そうそう、彼はもう結構いい歳なのに魔力をもつ子供がなかなか生まれなくて慌てているらしいわ。最近また新しい妻を貰ったっていう話よ。こう改めて見てみると、クワントの存続も大変ね」

ヴェルマは喉を鳴らして笑った。

何人子供が出来ようと、魔力を持つ子供は一人しか生まれない。だが、魔力のある子を亡くすと再び魔力のある子を一人授かる事ができる。何故かは分らないが、それが神の決めた魔術師と一般人のバランスなのだろう。早い時期に魔力のある子供が生まれなければかりに子沢山の魔術師は世の中に結構いるのだ。

「リルツェン家は１リユキ硬貨に彫られている大魔術師の家系だから絶やしたくないんだろ。では、クワントの中でルキウスの親になりそうな人は…」

そこまで言い、ラウドはにやりと笑った。

「ヴェルマしかいないな」

「悪いけど私の子供ならもっと可愛いわ。可能性をいうなら、クワント出身のあんただって入るんじゃない？」

「もしそうなら、十歳の時の子だぞ？ 流石にその歳では身に覚えがないな」

「だーからー、おれの親は普通の人間だっていつているだろ」

ルキウスは黙っていれば果てしなく続きそうな会話に割って入った。ヴェルマはルキウスの言葉に軽い驚きを美貌ににじませた。

「じゃあ、あんたはすごく珍しい例だね。八百年位前の文献に一人、一般人から魔力の強い人間が生まれたって書かれているものがあるの。古すぎるし、それ以後そんな例がなかったから信憑性がないと

思われていたんだけど、本物なら二例目ね」

ヴェルマの言葉にルキウスの顔が途端に明るくなる。

「きつと、俺はそれだよ。例外ってちよつとかつこいいかも」

ルキウスはうんうんと頷いた。ヴェルマは瞳を閉じ軽く肩を竦める。

「はいはい、それは良かったわね。もう魔力を試さないのならさつさとこの『珍種』を魔封じした方がいいわよ。逃げるといふ愚行を再び実行する前にね」

「嫌なこと思い出させるな」

ルキウスはヴェルマを睨んで、次に哀れっぽくラウドを見上げた。

「そんな顔しても駄目だ。努力して俺への信頼を回復してくれ」

ラウドは湧き出る笑みを片方の口端に押しとどめて再び魔封じを施した。

「ヴェルマはさ、得意な魔法はなんなの？」

魔封じが気持ち悪いのか、腹を気にしながらルキウスは聞いた。声色からかなり『魔術師』に興味を持ったようだ。

「私を誰だと思っているの？ クワントの中のクワントといわれて

いる私に不得意なものなんてないわ」

「彼の特技の一つは『記憶の消去』だ」

二人の仲がまた険悪にならないうちにラウドが何気を装い代わりに答えた。何故自分がこんな気苦労をしなくてはならないのか、と考えながら。

「相手が魔法の使い方を忘れちゃうって事かな？」

ルキウスは首をひねる。

「魔法だけじゃないわよ。自分が誰なのかのみならず、『縁』^{えにし}まで消してやるの。つまり、私に記憶を消された奴は同時にその家系の血の流れから外れちゃうわけ」

わかる？　と言うヴェルマにルキウスは曖昧に頷いた。感覚的には分かるのだが、実は今一つピンときていないという様子だ。

「俺が魔封じとしてちゃんとやっていけるまで彼が変わりに違法魔術師をとりしまっていたんだ。相手が魔力を使えなくなるのだから俺の魔封じと同じという訳だ。…いや、彼のは記憶を一度消すと元に戻せないから、魔封じよりも酷かもしれないな」

ラウドの言葉にヴェルマは軽く片眉をあげた。

「そうかしら？　昔魔術を使えた頃の思い出を引きずりながらも只^{ただ}人^{ひと}として暮らさなければならぬ事に比べたら、全てを忘れて何も知らずに一から生きていける方が遙かにマシだと思うけど。そういえば……」

ヴェルマはくすくす笑いながらラウドの頬を両手で挟んだ。

「初めて会った時のあんたはまだ十二歳で、可愛かったわよね。いつも一人で人恋しかつたのか私にすぐ懐いたし。私の行くところ、どこへでも付いてきたわね」

心の中でラウドは苦い表情をした。だが、反論は出来ない。

幼き日に一人で過ごす時間は果てしなくつまらなく、永遠に続くかと思われた。そんな中、『魔封じ』の職務を滞りなく遂行するためとして魔封じ不在の間に違法魔術師を取り締まっていた魔術師がラウドの元に送り込まれた。それがヴェルマだった。彼は気分屋で口も悪いが、ラウドは嫌いではなかった。彼に初めて会った時、長い長い黎明からようやく眩しいほどの太陽の光を得た気がした。それを逃してはいけないと幼心に思ったのかもしれない、ヴェルマが言うように、ラウドはすぐヴェルマに心を開いた。良いことも悪いことも全て教えてくれた彼のお陰で急速に世界が広がり、物や書籍では決して埋められなかったラウドの心の隙間も知らない間に狭まっていた。偶に彼の突飛な行動に付き合わされる自分に不安を覚える時もあったが、常識に囚われない彼だからこそ人に明かせぬ闇を持つラウドの傍に今までずっといてくれたのだろう。

「ヴェルマ」

ラウドはヴェルマには感謝しているものの、今は自分の頬から首に手を移動させ絡めるヴェルマを軽く引き離しつつたしなめた。放っておけばルキウスに見せたくない展開がまっている。ヴェルマは器用に片眉を上げた。

「なによ、恥ずかしがることないじゃない。あんたはいわば私の初めて弟子といつてもいいかもしれない。違法魔術師の取り締まり方だけでなく、いろいろんなことを教えてあげたわよね。しかもそれにすべてちゃんと答えてくれたし」

二人の間に流れる異質な空気を嗅ぎ取ってルキウスは目を見開いた。思惑通りの表情を浮かべるルキウスに、ヴェルマが満足げにほほ笑むのをラウドは見逃さず、内心重いため息をついた。

興に乗ったヴェルマはルキウスに見せ付けるようにさらにラウドに体を密着させる。同時に胸元から手紙を取り出すとラウドの体にすべりこませた。

「はい、これであんたの頼まれごとはすべて完了よ。今度はこっちの願いを聞いてもらう番ね」

ラウドの精悍な顎のラインを指先で撫でる様に辿り、にっこり微笑んだ。

「とりあえず、もっといい宿に移りましょう」

その言葉にはルキウスも嬉々として頷いた。が、それはぬか喜びだった。ヴェルマに連れられるまま移動した宿に入った途端、ルキウスは豪華に設えられたメインの部屋に隣接する使用人が控える質素な小部屋へとヴェルマに追いやられてしまった。

「オコサマはここで寝てなさい。これからは大人の時間だから」

ヴェルマは意味ありげに笑うと扉を閉じた。

「この扱いはなんだよー」

この使用人部屋もさっきまでいた宿よりはかなり上等なのだが、期待していただけに落胆が激しい。

「ヴェルマのバカ。俺の初恋を返せ」

ルキウスは隣に聞こえないようそつと毒づいた。

第7話

面と向かって会ったことはないが、実はヴェルマを見たのは初めてではない。父のクレル・クリスハルドが都長に就任した日の夜、自宅で就任祝いの宴が催された時にルキウスは初めてヴェルマを見たのだ。

「ねえ、なんで僕は行っちゃいけないの？」

当時十歳だったルキウスは両手でシーツの皺を伸ばす侍女のナラに聞いた。二つ上の兄は就任の宴に参加しているのに、ルキウスにはお呼びの声が掛からなかった。それどころか、今日までそのような催し事があることさえ知らなかった。

「僕もおとうさんの就任のお祝いにいたいよ。ねえ、いいでしょ、ナラ？　今からでも連れてって。ちゃんと大人しくするから」

ルキウスは甘えるしぐさでナラにすり寄る。その愛らしい様子にならは目じりを下げながらも首を縦には振らなかった。

「ルキウス坊ちゃんはまだお小さいから。行っても大人の人ばかりで楽しくありませんよ。それに、まあ、大変。もう寝る時間でございますしょう？」

ナラはさあさあ、と何か言いたげなルキウスを有無を言わずベツドへ追い立てる。

（もう小さくなんかないよ。それに兄さんだってまだ子どもじゃないか！）

しかし不満を声にはしなかった。ナラとは殆どの時間を一緒に過ごしており、泣いた顔も恥ずかしい思い出もみんな知られている。彼女に頭が上がらないことを幼いなりに感じていたのだ。だからベツドに入れられ、寝たふりをし、ナラが傍に居なくなるのを見計らってから部屋を抜け出した。

（ちょっと見るだけなら怒られないよね）

ドアから出るとナラにすぐ見つかってしまうので、ルキウスは窓から外へ出た。

ルキウスの部屋は本宅とは庭を挟んで離れたところにあり、そこで多くの時間を侍女のナラと二人で過ごしている。

裸足であることも気にせず、母が大切に世話をしている幾種類ものバラが咲き乱れる中を一気に走りぬけた。母屋に近づくにつれ、華やかな音楽と食べ物のいい香りがしてくる。

（大人ばかりずるい）

中を覗こうと思ったが背が低いので何度か飛びついてはみたものの窓に届かない。辺りを見回し、踏み台となる丁度よい木の箱を見つけたと音を立てないよう注意しながら引きずり運び、ようやく窓から中を眺めることが出来た。

明るいうそくの灯りの中、着飾った大勢の人々が泡立つお酒を片手に会話を楽しんでいる。その中心に父と母と兄もいた。周りの人々と満遍なく話し、時に笑う。三人とも笑顔でとても嬉しそうだ。

（僕もあの輪の中に入りたかったな…）

ルキウスは長い睫毛を伏せ俯いた。そしてここに来た事を後悔した。美味しい食べ物と明るい光に包まれて楽しむ家族、対照的に誰に話しかけられることも気づかれる事もなく暗がりからこっそりと覗くだけの自分。こんなに寂しい思いをするなんて全く思ってもみなかった。

（もう帰ろ）

これ以上は辛くてここにはいられない。そう思って木の箱から降りかけた時、室内のざわめきが一瞬のうちに途絶え静寂が広がった。思わぬ異変にルキウスは再び窓から中を覗くと、皆の視線が一点に集中している。入口のある方だ。ルキウスも何が起こったのか知りたくて同じように視線を追い、皆と同じように息を呑んだ。

（わあ、めっちゃめっちゃ綺麗な女性…）

それが、今思えばヴェルマだった。

微笑み一つで人の輪を切り裂いていく。

ろうそくの柔らかな光に照らされた全身純白の姿が輝き、光を自ら放っているかのようだ。さらにその輝きに混じって妖艶ともいえる色香も同時に感じさせ、大人の匂いを目の当たりにした幼いルキウスは落着かない、それでいていつまでも感じていたい不思議なときめきを初めて体感した。

一言でいえばヴェルマは全てにおいて印象的だった。

さつきまで胸にあった虚しさはすっかり忘れ、ヴェルマから目が離せず窓にしがみついていた。結局ナラに発見され、彼女の小脇に抱えられて部屋に連れ戻されるまですっと見ていた。

絶対天使だ。今までそう思っていた。

「男だったし、それに性格悪いし！」

思い出から帰ってきたルキウスは現実を振り払うかのように叫んだ。

暫くはヴェルマへの怒りで時間を潰せたが、冷静になると急に暇になる。本など時間を潰せる物はすべてラウドから逃げる際に宿屋へ置いてきてしまい、手元に何も無い。

（魔封じの呪印がなかったら魔法の練習ができるのにな）

試しに魔力を使ってみようと部屋の中心に立ち昼間の様に手を差し出してみたが、何度やっても何の変化も起きない。やはり魔封じが効いている限り駄目らしい。諦めたルキウスはベッドに寝転んで腹に両手を当てた。

（こんなことなら初めから素直にラウドに従えばよかった）

いくら珍しかろうと魔力のない一般の人からでも魔術師が生まれる可能性があると思つた今、自分の力が魔力であることが嬉しかった。はじめて傷を治したあの心躍る感覚はきつと一生忘れないだろう。ルキウスは今では少しの怪我の跡しか残さない自分の膝に触れた。

（ラウドがいなかったら一生この力を知らずにいたかもしれない。それに、一回目はすぐに魔封じをはずしてくれたから、そんなにヒドイ奴じゃないんだよな、きっと）

ルキウスは後悔し始めていた。

彼の信頼を取り戻すにはどうしたらいいだろう。壊すのはあんなに簡単なのに、取り戻すのは至難の業だ。

（今まで一人だったから苦手なんだよ、こういう『人間関係』ってやつ）

今は『魔封じ』があるせいで仕方なくラウドについていく形を取っているが、魔封じがなくてもラウドについて行ってもいいかな、と思い始めている。

（言葉にしては絶対言わないけどね）

彼と一緒にいればもっと自分の魔力の可能性が開花し、磨かれるのではないか。性格は果てしなく悪いが、ヴェルマの魔術は本当に美しく見事だった。ルキウスも練習すればあれくらいのレベルまで魔力を扱えるようになるのではないだろうか。自分が魔力を完璧に操る姿を想像し、ルキウスは胸が高鳴った。

暫くどうやってラウドにもう一度魔封じを解かせるか考えていたが、どうにもいい考えが思いつかない。疲れが出たのか、知らない間にうとうとと眠りに入りかけていた。が、聞きなれない音で浅い眠りから引き戻される。

（何？）

ルキウスは身構え耳をそばだてる。そして愕然とした。

（音じゃなくて、声だよ。それもヴェルマの…）

その声がどのような時に発せられるかはルキウスも知識で知っている。聞かないように努力しなければ聞き耳を立ててしまう自分に腹が立った。

（隣に俺がいるのに、よろしくやってんじゃねーよ）

ヴェルマのことだからルキウスに聞かせるようにわざと声を上げているのかもしれない。彼のつややかで艶かしい嬌声は激しくなる一方だ。

（いや、ヴェルマだけが悪いわけじゃない。ラウドも同罪だ。あー、さっき真面目に信頼関係を取り戻そうと考えて損した！）

憤慨しつつ頭からケットをかぶり、さらに手で耳をふさいだ。しかしルキウスの頭の中でのヴェルマとラウド、二人のからみあう陰影を一晚中追ひ払うはめになった。

第8話

ラウドが手綱を取る馬車に揺られながらルキウスはあくびをかみ殺した。

（せっかくな宿に移ったのに全く寝れやしなかった）

ルキウスはもう一度あくびをかみ殺す。馬車の心地よい揺れとりズミカルな足音が眠気を誘うが、ルキウスは眠気と果敢に闘っていた。昨晚寝られなかったことをラウドに知られたくない。聞き耳を立てていたと誤解されるのは論外だ。

今朝、何事もなかったかのように二人の部屋へ行ってみればもうヴェルマはいなかった。そしてすぐに町を出ると言われたのだ。

半分閉じかけた瞳でラウドをみた。特に眠たい様子も見せず、軽妙に手綱を捌いている。ルキウスが彼らの昨夜を知っているせいか、ラウドが昨日よりすっきりして見える気がするのも憎らしく思える。

「これから行くエスカトって町、どれくらいかかるの？」

気分的にラウドとは話したくないのだが、彼しか話し相手がいなのだから仕方がない。昼御飯も済ませて胃が満足し、ただただ見渡す限り平原の広がるまったりとした風景の中を走っている今、何か話していないと本当に寝てしまいそうだ。

「馬車で二日だ。だから途中でリドの町に泊まることになるな。夕方にならないと着かないから、寝たかったら寝てろ」

今日ずっとルキウスとあまり目を合わせないところをみると、ラウドも彼なりに気まずい思いをしているのかもしれない。ルキウスは自分を睡眠不足にさせたのだから、もっと彼が気まずい気持ちになればいいと思った。

「別に眠たくなんかない」

強がってそう答えたのにも関わらず、次に目を開けたときは空一面が夕闇の赤に包まれていた。

（あれっ）

知らない間に寝ていたらしい。ルキウスは驚いて上半身を起こす。その拍子に肩から何かがずり落ちた。

（黒いケープ、掛けてくれたんだ）

ラウドが身につけているケープ。掛けられても気づかないほど熟睡していたようだ。

「あと少しで着くぞ」

ルキウスが起きたのに気づいたラウドの横顔がそう告げた。頭部を覆うドミノから洩れたラウドの銀の髪が夕陽に照らされ、風に揺られて一本一本競うようにきらめきを放つ。

（やっぱり綺麗…だよな）

そう思うのは二度目だ。鋼色の髪はそう滅多にいないし、その人成りを知的に見せる効果がある。ラウドの髪はその中でも特別上質

の部類に入り、いつも真っ黒な布で覆ってしまうのはもったいないと思う。

ルキウスはふと触れてみたいと思った。

ルキウスの視線に気づいたのか、ふいにラウドがこちらを向いた。目が合い、焦ってルキウスは思いきり不自然に顔を背けた。

（急にこっちを見るな、バカ）

自分の頬が熱るのが分かる。今が夕暮れ時でよかった。顔が赤いのに気づかれないだろう。見惚れていたなんて、しかも一瞬とはいえラウドに触れたいと思ったと知られたらもう生きていけない気がする。

（誤解されたら迷惑だ。なんで、俺が）

理性がルキウスを正当化させる理由をいくつも用意したが、どれもルキウスを納得させることに失敗し、鼓動は収まらなかった。

ルキウスは黒のケープを不躰にラウドの膝へ押しつけると正面を向き、きゅっと両手で両膝を抱き締めた。ラウドは肩を竦めたが特に何も言わず、お互い無言のまま馬車を進めた。

今晚の宿泊地であるリドの町の城壁が遠くに確認できる所まで来た。あと半刻もすれば城内に入れるであろう。それに気をとられて、ルキウスは手前の大きな落葉樹の木陰で座り込んでいる女性に全く気が付かなかった。

「大丈夫ですか？」

馬車が止まり、ラウドの声で女性の顔があがる。

「ちょっと疲れて休んでいただけなの」

汗を拭きながら答える女性は二十代前半ぐらいだろうか。両手の下のお腹は大きく膨らんでいる。妊婦だ。

「よかったら乗っていけば？ 俺たちリドの町で泊まるんだけど」

ルキウスはあまり妊婦を間近で見たことがなかったので好奇心も手伝ってこう提案した。だが一番の理由は、誰でもいい、第三者に傍にいて欲しかったからだろう。今現在ラウドと二人きりなのがルキウスにはとても気詰まりなのだ。

「いつ頃生まれそうなの？」

馬車に揺られながら、名前をニダと名乗る女性はルキウスの問いにえくぼのできる気さくな笑みで答えた。

「もうすぐだよ。でもなかなか出てきてくれなくてさ」

「ふーん。もう十分大きいと思うんだけど」

「居心地がいいんでしょう。困ったことに」

ニダは言葉とは裏腹に幸せそうに笑った。

彼女の快活な口調にルキウスも自然と会話が弾む。時にラウドを交え、町へ付くまで途切れることなく話続けた。

「馬車に乗せてくれたお礼に是非御馳走したいわ」

彼女の家はリドで食堂を営んでおり、リド名物の鹿肉のシチューが自慢の店らしい。ラウドとルキウスはその言葉に甘えることにした。

「人助けはしておくものだね」

ニダの食堂の席に着きながらルキウスは微笑んだ。もうシチューのいい香りがここまで漂ってくる。

「お前といると美味しいものにたどり着ける。ありがたいな」

エールグランデの蒸し魚の事を言っているのだろう。ラウドはルキウスに軽く一つ頭を優雅に下げた。ルキウスも同じように頭を下げる。

「どういたしまして。感謝ついでに魔封じも解いてくださると、こちらもありがたいんだけど」

「俺もそうできる日が来ると嬉しいよ」

ラウドは演技掛かった声で答えた。

(…まったく解く気がないな)

ルキウスは軽く睨んだが、当のラウドはルキウスにいつもの人当

たりの良い笑みを見せた。同時に先程から横目でちらちらとラウドを見ていた隣のテーブルの若い女性達から軽い歓声が起こる。

（ラウドはあんた達なんて相手にしないよ）

隣のざわめきがルキウスの神経を逆なでる。なぜか無性にイライラした。だが軽く皿の割れる音ですぐさまその自分でも戸惑う気持ちから引き戻された。

「ニダが産気づいた」

突然の叫びに声の方へ目をやると、厨房の入り口付近で痛みをこらえたニダがしゃがみこんでいた。

すぐさまニダは夫と思われる男に抱きかかえられて二階へと運び込まれる。すぐに老齡の産婆もやってきた。先程の不愉快な気持ちはすっかり忘れ、ルキウスは無意識に立ち上がると落ち着きなくニダのいる二階を見つめた。

「お前がおろおろしてどうする？ 出産は病気じゃないんだから心配するな」

ラウドはルキウスの様子を苦笑まじりの笑みで眺めた。

「そうだけどさ」

さつきまで一緒に馬車に乗っていた女性が目の前で産気づくなんてなかったことだと思ふ。ルキウスにはもう他人事とは思えなくなっていた。ラウドは出産を病気ではないといったが、出産で命を落とす女性も少なからずいると聞いたことがあり、大丈夫だとは

思うが心配は拭えない。

そんなルキウスの様子を察したのか、ラウドも無理にルキウスを宿につれて帰ろうとはしなかった。ニダを知る客は食事が終わっても帰らず、誰かが産気づいたのを知らせたのか人が続々とやってきて、気づけば一階の食堂は人で溢れかえっていた。

（ニダは気さくでさっぱりとした性格の女性ひとだから、やっぱり町の人にも愛されているんだな）

ここまで多くの人が集まるとは思ってもみなかった。ルキウスはどちらかといえば人見知りな性質たちだが、ニダとは気構えず自然に話せた。彼女は人に安心感を与える。ニダは馬車の中で魔力を持っていないと話していたが、彼女が人々に与える安心感も一つの立派な『魔力』なのではないだろうか。ルキウスはニダから見習う点は多いと思った。

（魔封じを外してもらったためにも必要だよな）

しかし苦手な分野であることも確かだ。事にラウドが相手となるとルキウスは素直に振舞えなくなる。

（魔封じされた相手だからな）

そう結論付けたが、心のどこかでそれだけではないと囁く声が聞こえる。ルキウスは振り払うように頭を振った。

（今はラウドの事はどうでもいい。ニダのことだけ考えよう）

そうしてルキウスは新たに生まれてくる命を皆と共に祝福する時

を待った。ようやく赤ん坊の泣き声が響き渡ると食堂にいる全ての
人々から安堵のため息と拍手が沸き起こる。ルキウスも周りと同じ
ように立ち上がって喜びの声をあげた。

「良かったな」

ラウドの言葉にもルキウスは珍しく素直に頷けた。厨房からは祝
いの振る舞い酒が登場し、その場に居合わせた人の歡喜をさらに高
めた。

だが産婆の叫びと共にその幸せは一瞬の内にかき消されることと
なる。

「六つ星の子だ。殺さねばならん」

第9話

産婆の悲鳴に似た声に一階でニダの出産を祝っていた人々の顔に戦慄がはしる。

六つ星、それは体に六つの痣を持つ者。

世の中を滅ぼす大きな災いをもたらすとして、いつ頃からか六つ星の痣を持つ子供を殺すのが慣習となっている。今では少しの痣でも念のためにと命を取られる赤ん坊がいるくらいだ。

周りが急に静まりかえったので二階からのニダの激しい泣き声がルキウスの耳に届いた。それを旦那が懸命に慰めている。

ドアの軋む音がして、産婆が赤ん坊を抱いて一階へ降りてきた。その後ろからニダの夫が力なくついて来る。二人とも陰気な顔だ。これから起こることを何も知らない赤子だけが老婆の腕の中で元気に泣いており、対照的な風景だった。

六つ星の赤子の登場に階段下で二階の様子を伺っていた人々は一斉に後ずさる。そんな中、ラウドだけは人ごみを掻き分け赤ん坊に近づく。ルキウスもそれに続いた。

「これは六つ星ではない。殺すな！」

ラウドは赤ん坊の痣を見て叫んだ。ルキウスは今まで見たことのないラウドの強い口調に驚きつつも、生まれたての赤子の痣を覗き見る。小ささまざまな痣が六つ、確かに腕にある。しかし六つ星の子供の末路は知っていても実際に六つ星を見たことがないので本当

に違うのかルキウスには判らない。

「村に災いがおきても良いのか！」

産婆は半狂乱で子供を外へ連れ出そうとする。それをラウドが必死に止めていた。

今や食堂内は産婆に従う者や避けるように逃げる者、どこから聞きつけたのか一目騒ぎを見ようと駆けつけた者で混乱をきたしていた。

（俺も、ニダの子供に死んで欲しくない）

ルキウスも一緒に産婆を止めようとラウドに近づこうとした。が、慌てふためく人波に揉まれ、なかなか思うように進まない。

「どいて、どいてよっ！」

ルキウスは声の限り叫んだが、大騒ぎの室内で声はかき消されてしまう。そんな中、ルキウスの目の端に恐れ逃げ惑う人の肘が蝋燭にぶつかるのが映った。それはとてもゆっくりとした速度で床に落ちていくように見えた。

倒れた蝋燭の火が近くのカートンに移り、勢いよく一気に赤い火柱を立てる。

「火事だ！」

それに気づいた周りの人はさらなる混乱に陥る。おかげで消火活動も儘ならない。

（火事…火！）

人々をあざ笑うかのように広がっていく炎に、ルキウスは自分の体が恐怖で動かなくなるのが分かった。

その火は厨房の油に燃え移り、俄かにその範囲を広げていく。

「それみたことか、やはりこの子は災いの子じゃ」

産婆は勝ち誇ったかのように高らかに言うと、火事から逃れようと逃げる人ごみに紛れて外へ出て行った。ラウドもその後を追って行く。

（俺もいかなきゃ。でも…足が動かない！）

早くしなければ、と思えば思うほどルキウスは動けなくなっていた。目は火から離せない。

不意に耳元で女性の声が聞こえた。

「あなたは逃げて…生きて」

最後に母さんは俺を抱きしめ、崩れるように倒れていった。その時の声だ。

六年前に住んでいた自宅は火事にあい、ここの食堂と同じように火の海と化していた。

「いやだよ、一緒に早くにげよう」

侍女のナラが無理やり引き離すまでの間、母の体に何回も叫び、体を揺らしたが、母からの反応はなかった。

ナラに引つ張られながらも振り向いて見た母は、巻き上げる炎の中に包まれていた。手入れが行き届いた艶やかな黒髪といつも好んで着ていた黒い服が赤い炎と相まって際立ち、こんな時であってもやはり母はとても美しかった。

命からがら逃げ出したルキウスは、ナラに連れられるまま彼女の実家へ行き、しばらくそこで過ごした。その火事が放火で、母と共に父も兄も亡くなったこと、まだ犯人が分からないということをナラに告げられたのはしばらくたってからだった。

（狙われたのは俺の家族だ。その犯人はまだ捕まっではない。ここに俺が生きていることが知れたら、俺を殺しに来るかもしれない。俺のせいでナラにもナラの家族にも迷惑がかかったら嫌だ）

ルキウスは大好きなナラから離れることを決意し、内緒で家を飛び出した。丁度悲しみを堪えて気丈にふるまうのに疲れた時期でもあった。

それ以来一人で生きてきた。

（あの火事のせいで俺の大切なものからすべて引き離された。家族も家もナラも！そして俺にできることは逃げることだけなんだ）

時を経て、火はルキウスにとって死と破滅の象徴となっていた。柱が倒れる音でルキウスは思い出から引き戻される。先程とは比

べ物にならないほど辺りは火に包まれていた。

（怖い…。もう、立っていられない）

熱気による熱さと圧迫感から息苦しいのにも関わらず、恐怖心から足が震えてその場にしゃがみ込んでしまった。

ぼやけていく視界の中に黒い人影が際立って見えた。それはこちらを見ると急いで駆けつけてきた。

「死にたいのか、はやく外へ出る」

「ラウド…」

ただただラウドを見つめるルキウスの腕を掴み引き上げようとするが、ルキウスは立ちあがることができなかった。

「しっかりしろ」

そう言っただけでラウドはルキウスを抱き上げた。ルキウスを抱えているのにもかかわらず、ラウドは軽い身のこなしで炎から脱出する。

ルキウスは両手をラウドの首に回してしがみついた。彼から伝わる心臓の鼓動が、だんだんルキウスを落ち着かせていくのが不思議だった。

（こんなに人に触れるのって久しぶりだ）

あまりの心地よさに、ルキウスは暫くラウドの首筋に顔を埋めた。同時に安心感も湧き上がってくる。

（火事のせいで、俺、変なんだ）

ルキウスはそう結論付けた。そうでなければ、困る。

ラウドも無理に引き離すことはせず、火事から離れた今もそのままでいてくれた。落ち着かせようとしてくれるのか、髪を撫でてくれる。その手つきがたどたどしいのが少し意外だった。

「そうだ、ニダは？」

暫くすると普段の思考能力が戻ってきて、ルキウスは慌ててラウドから身を放し、照れ隠しに少しぶっきらぼうに言った。なぜもと早く思いつかなかったのだろう。そんな自分に苛立った。

「そういえば、見ていないな」

「じゃあ、もしかしたらまだ中かも」

急に焦燥感にさいなまれた。子供を奪われた上、火に巻き込まれるなんてかわいそう過ぎる。

「俺、助けなきゃ」

ルキウスは威勢よく言い、燃え盛る食堂へ向かったが、やはり足がすくんでしまう。

（しっかりしろ、俺）

そう叱咤するが、体は動かない。

不意に髪をくしゃりとされ、振り向くとラウドが隣に立っていた。

「お前はそこにいろ」

ラウドはルキウスに脱いだケープを渡すと、近くにあった水をかぶり、火の中へ消えていった。

それを見ていた群集からはどよめきが上がる。しかしルキウスにはなぜか確信があった。

（大丈夫、ラウドはちゃんとニダを連れてきてくれる）

程なくしてルキウスの思ったとおり、背中にニダを乗せてラウドは戻ってきた。周りからは歓声と喝采の拍手が湧く。しかしニダはぐったりとして動く気配がない。

「ニダ、しっかりしてよ、ニダ！」

母の時と重なる。あの時は幼く何もできなかったけれど、今ならできることがある。

「ラウド、はやく宿まで運んで」

混乱したこの場所では何もできない。

「医者へ連れていくべきだ」

ラウドの意見にルキウスはいきまいた。

「こんな知らない街で、この混乱の中医者なんて探せないよ。いいから宿へ連れてって!」

あまりのルキウスの剣幕にラウドは驚きを見せたものの、食堂の近くにとっていた宿へ彼女を連れて行ってくれた。

宿内は外の喧騒とは打って変わって物静かだ。ベッドにニダを横たえさせ、ルキウスはラウドをふりかえる。

「はやく魔封じを外して。俺には治す力があるってヴェルマが言ってただろ」

ラウドは複雑な表情を浮かべ、迷っている。ルキウスはラウドに詰め寄り、叫んだ。

「絶対あんたから逃げないから。逃げたら一生魔封じされてもいい。だから早く!」

ここまで言わないと信じて貰えなくなった今までの自分の行動が嫌になったが、今は一刻を争う時だ。

ラウドはルキウスの瞳を見つめていたが、頷くと魔封じを外してくれた。

「ありがとう」

絶対ニダを助けたい。気持ちを集中させてルキウスはニダに向かった。

第10話

数時間の治療の成果が出たのか、ニダの呼吸が楽におこなわれる様になったのを見てルキウスは安堵のため息をもらした。しかし一度開いた彼女の瞳はうつろで、何の感情も映してはいなかった。すぐにその瞳は閉じられたが、ルキウスの心を締め付けつけるのに十分だった。

ラウドはルキウスの魔封じをはずした直後、ルキウスのどこにも行かないという言葉を感じた様で、再び町の様子を見に出て行った。暫くして帰って来たが、彼は終始無言で隣の続き部屋へ入っていく。

ちらりと見た彼の横顔でその子供がどうなったのか分かってしまった。ラウドに声をかけることがルキウスには出来なかった。

「そうだ、ニダが助かった事を伝えよう」

少しは元気になるかもしれない。ラウドに話しかけるきっかけを掴んだルキウスは、もう一度ニダを見て様子に変わらないことを確かめてから隣の部屋へ向かった。

ノックもせずドアを開けたルキウスをラウドは驚いた顔で振り返る。彼はとつさに左首筋を手で隠した。

ラウドは油断していた。ルキウスはニダの治療で手一杯だろうと思ひ、自分の火傷の具合を見ようと上半身を完全に脱ぎ捨ててしまっていた。

「ニダの意識が戻ったんだけど……ってひどい火傷じゃん、見せて」

ルキウスはラウドに走り寄った。ニダの事で頭が一杯だったので気づかなかったが、ラウドもあの火事の中に飛び込んでいったのだから火傷して当然だ。

「大丈夫だ、俺よりニダを診てやれ」

「もうニダは大丈夫だよ。あんたも怪我をしているなら怪我してるって早くいいなよ」

ラウドの鍛えられた肢体に付いた赤いただれを良く見ようとルキウスは腕を掴んだ。ラウドはルキウスを離そうと咄嗟に首筋から手を離してしまった。

ルキウスの視線が一点に集中する。そして大きな緑の瞳がさらに開かれた。

銀の髪の間から覗く首筋の赤い印。綺麗な一つの円を中心に、それと同じ大きさの五つの円が同じ距離を保って囲んでいる。整然と並んだそれは痣と言うより呪印に近い。

「これが本物の『六つ星』だ」

ラウドは何も言わず見つめるルキウスに告げた。緊張して凍ったような声色だ。

一方、ルキウスはラウドがすぐニダの子が六つ星でないと分かったことに妙に納得していた。本物を目の前にしているのにもかかわらず怖いという感情は起きなかった。

「なせ、あんたは殺されなかったの？ クワントの息子だから？」

「いや、クワントの息子でも殺されただろう。俺の場合は久しぶりに生まれた魔封じだったから…」

ギツ、と突如後ろからの板のきしむ音にラウドは口を噤んだ。二人が息を飲んで振り向くと、ニダが入り口にもたれかかりこちらを心もとない顔で覗いた。

ルキウスは咄嗟にニダの視線からラウドを隠すように前に立つ。

「ニダ、まだ動いちゃだめだよ」

力なくうなずくニダにルキウスは安堵のため息をついた。

（よかった、さっきの話は聞かれていないみたいだ）

もし、聞かれていたらこの一連の事件を六つ星持ちのラウドのせいにして彼を責め立てるであろう。しかし今回、誰よりもニダの子供の命を助けたがっていたのは他ならぬラウドなのだ。

ルキウスはニダの手を取ると再びベッドへ横たえさせ、手を握った。

「あのね、ニダ。その…」

子供を亡くした事、そして火事。どう慰めていいか分からず、ルキウスは結局口籠ってしまう。そんなルキウスを見てニダは力なく首を振った。

「六つ星だったのだからしかたがないわ。禍わざわいの子ですもの」

ルキウスに言ったものだが、ニダ自身に言い聞かせるような声だった。ニダはルキウスの背後に立ったラウドを見つけると上半身を起き上がらせた。ルキウスも同じく振り返ったが、今ではすっかり服を着込んだラウドが辛そうに端正な顔をゆがめていた。

「炎の中から助けてくれてありがとう」

ニダの礼にラウドは軽く首を横に振り、傍らに跪いて真摯な瞳をニダに向ける。

「もうこのような悲しみのない世に必ずする」

ラウドの力強い物言いにニダは驚いたように目を見開いた。六つ星の子を殺すのは、感情は別として、もう習慣として人々に受け入れられている。簡単に変えられるものではないが、ラウドの真剣な様子に彼の言葉を笑わずニダは少し微笑んで頷いた。

ニダの命の恩人としきりに頭を下げる夫に彼女を託すとラウドはすぐに宿屋の馬屋へ向かった。

「この町を出るの？」

ルキウスの問いに馬車を引き出すラウドの手が止まる。

「ニダは彼女の夫に託したし、今の俺がここでニダに出来ることはもうない」

苦しげに縛りだすラウドの声は、いつもの彼からは想像できない

程思いつめたものだった。真の六つ星持ちのラウドにとって罪のない子供を助けられなかった町にいるのは辛い事なのかもしれない。

「もうすぐ夜明けだし、早めの出発だと思えばいいか」

ルキウスはそう明るく言って馬車に乗り込む。ラウドはそれを驚きをもって見上げた。

「はやく乗れよ」

いつまでも見つめるラウドに照れを感じ、ルキウスの口調は荒くなる。逆にラウドは口端に笑みを見せた。

「本当にこの子にはかなわないな」

「え、何？」

小声で聞こえない。聞きなおすルキウスにラウドは何も答えずただ軽く首を振ると、馬車に乗り込み、白々と明ける空の下、リドの城壁を外へ抜けていった。

暫くは無言で馬車を進める。馬が進むことに焦げくさい匂いもだんだん薄らぎ、無くなっていく。

「ここで止めて」

突然ルキウスがラウドの握る手綱を隣から引いた。馬は嘶きをあげ急に止まったので、反動で二人の体は大きく揺れる。ラウドは急に止められ不満そうに首をふる馬をなだめ、道の脇へ馬車を止めた。

「どうしたんだ？」

尋ねるラウドを制して、ルキウスは立ち上がり、後ろを振り返った。遥かに広がる草原の中、リドの町は小さく点のように見える。そして周りに誰もいない事を確認した。

「ここまでくれば大丈夫。その上着、全部脱いで」

ルキウスは手を伸ばし、俄かに脱がしはじめた。ラウドは一瞬たじろいだ、が、されるがまま動かない。

焼け爛れていても綺麗な体に違いなかった。

ルキウスは静かに手をあてて治療をはじめ。青い淡い光がラウドの肌を巡るたび、ささくれた肌が元に戻っていく。

地平線から顔を出した黄金色の光に、ラウドの身体のラインがくつきり浮かび上がる。そこには火傷以外の古傷がいくつもあった。

（六つ星のせいでひどい仕打ちを受けてきたのかもしれない。だからこそ本当の六つ星でない子供が殺されるのを見ていられなかったんだよね）

ニダの子を守る必死さも合点がいった。

そこでようやくルキウスは思い当たった。

「もしかして俺に協力して欲しいことって、六つ星に関係ある？」

ラウドは少しの間を置いて静に切り出した。

「ああ。六つ星がある俺が生きているのにもかかわらず、地震や、災害は起きるものの、世の中のすべてを破壊するような災いは起きていない。となると『六つ星』とは何なのかということになる」

いままで閉じていた瞳を開けると、ラウドは太陽の光で徐々に色を変えていく地平線を睨みながら続けた。

「この『六つ星』は明らかに呪印だ。こんな高度な魔術を使えるのはクワントしかない。もしそうであるなら六つ星について調べていることを知られると呪を施したクワントにどんな妨害を受けるかわからない。どうしても秘密裏に調べる必要があった」

すべての魔術師はクワントの元で統括されており、下手に協力を求めると情報が漏れてしまうかもしれない。情報が漏れた後、ラウドの末路は想像に難くない。

（だから俺なんだ）

ルキウスは心の中で呟いた。

一般人では戦力にならない。魔力はあるが、神殿へ届けていない人物、ルキウスがラウドには必要なのだ。

「はやく呪印の根源を断ち切らないと罪の無い子供が沢山殺されてしまう。殺される方も殺す方も誰一人として幸せになれないのに。しかし、調べた上で六つ星が本当に世の中に害をもたらす存在であると裏付けられたのなら、俺は…」

ラウドは再び瞳を閉じた。

飄々として、何事もそつなくこなすラウドが実は六つ星のせいで一人苦しんでいたと思うと、ルキウスは急に親近感が湧いた。ルキウスも一人でいなければならぬ辛さは十分知っている。

（初めからこの話をしてくれればよかったのに。でも、そうすると自分が『六つ星』であることを明かさなくてはならないか。俺は誰にも言うつもりはないけど、初対面でどんな人かわからないうちにそう打ち明けるのはどれほどの勇気が要るだろう。っていうか無謀だ。六つ星と知れた途端に自分の身に危害が及ぶことの方が多いかもしれない）

そう考えると、自分の身に置き換えた時、求める人物がみつかったらやはりラウドのように力に物を言わせてしまっただろうとルキウスは思った。

（俺もそうだけど、ラウドも人との距離をつかむのが苦手なんだ）

ルキウスは自然にラウドを背中から抱きしめていた。

「ルキ…」

ラウドの戸惑った表情が背中を介して聞こえる。

「背中が面積が広いから、こうした方がはやく治るんだよ」

そう答えたが、実際早く治るかは分からない。ただそうしたかったのだ。この気持ちは同情ではない。

（世の中で俺の存在を認めてくれて、頼ってくれる事がうれしかった）

たのかも。きつとそうだ。だってまだラウドと会ってから日にちが浅い。だから…)

ルキウスは心に湧きはじめた感情を押さえつけた。

(そんなに早く人を好きになれる訳が無い。俺の性格上ありえない。だから違う)

恋心を否定した時点で認識したことにルキウスはまだ気づいていなかった。

第11話

ルキウスはラウドから渡された手紙に目を通していた。

これはヴェルマがラウドにエールグランデの宿屋で渡したものだ。『六つ星』についての情報が書かれているということだが、走り書きで尚且つ要点しか書かれていないため、知らない人には何のことだか全くわからないだろう。

「わざわざ手紙にしなくても、口で言えればいいじゃん」

エスカトへ向かう馬車上で、ルキウスは思ったことを素直に口に出した。

「俺が六つ星持ちだってことは本当にごく限られた人しか知らないんだ。俺としても極力伏せておきたい。動きづらくなるからな。ヴェルマも彼なりに気を使っただろう。誰がどこで聞いているかわからないしな」

そう言われて、ルキウスは初めて気が付いた。

（そうか。俺だけじゃなくって、ヴェルマもラウドが六つ星だって事、知っているんだよな…）

勝手に自分だけがラウドの秘密を共有していると思い込んでいたのが急に恥ずかしくなる。

（っていうか、ラウドとヴェルマ、この二人は…）

エールグランデの一夜を思い出して、ルキウスは不機嫌になった。あんなことをするぐらいだから、ラウドはヴェルマが好きなのだろう。ルキウスは目的の為だけの協力者にすぎない。

「ルキウス、悪いが魔封じはさせてもらう」

ラウドの怪我を治し終えた時、すまなそうではあったが彼はルキウスにしっかりと魔封じを施したのだ。

（俺はまだ信頼もされてない）

そう考えると、やるせない気持ちで心が埋まった。

「どうした？」

急に黙ってしまったルキウスをラウドは心配したのか声をかけて来た。ラウドは六つ星であることを告げてから威圧的な所がとれてきたとルキウスは思った。今の声も低音で優しい。

「別に」

そっけない自分の声に、ルキウスは齒がゆい思いをした。

（あー、もっと気の利いたことを言えればいいのに、なんでこんなかな）

最近いつもそう思う。後から考えるといくらでも相手を気遣う言葉が出てくるのに、いざとなると、いや、ラウドを目の前に出ると出来ない。しかしまた黙ってしまうとラウドが気にするだろうと思いい、手紙の中から質問を探し出した。

「ここに書いてあるマリー・ジョコフって何者？」

「彼女はクワントの一人だ」

「…じゃあ、この人がラウドに六つ星の呪印を施したってこと？」

ルキウスの声色に緊張感が走る。ラウドは軽くほほ笑むと綺麗な銀の髪を横に揺らした。

「彼女は訳あって六つ星には同情的な立場をとっているんだ。今回会いに行くのは彼女がフォーチュンテラーだからだ」

「占い師？ 彼女に『六つ星』について見てもらうのか。彼女には知られてもいいの？」

「物事を見通す能力で彼女にかなうものはいない。だから俺を一目見れば『六つ星』であることはすぐにお分かりにはなるだろう。今はこれしか手がかりがないからマリーが協力してくれることを祈るばかりだ。一応彼女に探りを入れてみたが、感触はいい。多分大丈夫だと思う」

ラウドは一つ馬に鞭を入れた。

「ついでに言えば今年で確か百六十五歳になる。クワント程の魔力の持ち主だと普通の人間の約二倍は長生きだっていうのは知っているだろう？」

「知っているけど、それにしても長生き過ぎない？」

人の平均的な寿命は七十くらいだ。単純に二倍にしても百四十である。

「彼女はこの二十年間眠りについていたんだ。玄孫やじやまの結婚式が見た
いという理由でね。近々その結婚式が行われることになり、ふた月
前に目覚めたそうだ」

「そっか、彼女がようやく目覚めた今が見てもらおう絶好の機会とい
う訳だね。でも、そんなに年をとると、人間ってどうなっているん
だろう？」

ルキウスの問いにラウドは笑って答えなかった。しかし当のルキ
ウスは気にせず、心はすでにエスカトの町へ飛んでいた。

明るい光に照らされた中庭を眺めつつ、案内されるままにラウド
とルキウスは磨き上げられた大理石の廊下を歩いている。エスカト
の町のほぼ中心地にあるマリー・ジョコフの屋敷はクワントの身分
にふさわしい大きさ、広さはあるものの、テラコッタの壁は暖かい
落ち着いた茶色で統一されており、威圧感は全くなく、彼女の優し
い人柄を想像させるのに十分だった。庭もよく手入れがされており、
季節の花が咲き乱れている。ルキウスは少しだけだが緊張を緩めた。

「こちらでお待ちです」

ルキウス達の先に行く若い女性は一っこり笑うと一番奥の部屋の
中へ二人を案内した。

部屋の奥の長椅子にはゆったり腰掛けた女性がおり、手招きをす
る。

「よくいらつしゃいましたね。真摯なお手紙拝見いたしました」

「お会いできて光栄です」

ラウドは無駄のない優雅な動きで挨拶をした。隣に立つルキウスは挨拶をする事も忘れ、目の前の女性をまじまじと見つめた。

茶色の髪は軽やかにカールされ、緩やかに肩へと流れている。肌は陶器のようにつややかで白く、皺どころかしみ一つない。見た目は十代後半くらいの可愛い女性だった。

「わたしが、マリー・ジヨコフです」

ルキウスが戸惑う中、自己紹介をされ、ルキウスも慌てて頭を下げた。隣ではラウドが声を殺して笑っているようだ。

（ちゃんと教えてくれたらこんなに驚かなくてもよかったのに）

クワントが長生きだということは知っていた。しかし、百六十五歳、と聞いていたのでしわしわの老婆を勝手に想像していたのだ。ルキウスは腹いせにラウドを足でこっさり蹴りつつも、以前にクワントは歳をとらないと聞いたことがあったのを思い出した。

（その時はまさかと思ったけど、本当だったんだ）

よく見ると先程案内してくれた女性の顔となんとなく似ている。

（もしかしたらさっきの女性むすめが今度結婚するという玄孫かもしれない）

ルキウスはドアの近くに立つ女性とマリーをこっそり見比べた。だがどう見ても曾祖母のマリーの方が年下に見える。

「近くへお座り。後は私達だけにして」

マリー・ジヨコフは鈴のような麗しい声で人払いをした。その合図と共に部屋から人が出て行き、鳥のさえずり以外の物音はしなくなった。

口を開こうとするラウドを片手で制すると近くの水晶玉を優しく撫でた。

（やっぱり、水晶使うんだ）

ルキウスは興味深げに水晶の中を眺めた。ルキウスにはマリーとラウドと自分の影がぼんやり水晶の球にそって歪んで見えただけだが、マリーには違うものが見えるのだろう。暫く水晶を撫ぜながら彼女は水晶の一点を見つめていたが、急に眉間に皺を寄せると熱いものに触ったかのように水晶から手を離れた。同時にバチバチッと火花の散る様な音も聞こえた。

「あっ」

同じように水晶を集中して見ていたルキウスは思わず声を上げてしまった。あまり思わしくない事態が起きたようだ。

マリーは軽い息を一つ吐くと、ゆったりとこちらに目を向けた。

「ごめんなさい。どうしても見えてこないの。かなりきつい呪印が

かけられているみたいで、深く見ようとするとこちらの水晶がやられてしまいそうなの」

「いえ、ご無理をなさらないでください」

そうラウドは答えたが、落胆の色を隠すのに精一杯のようだ。

「でもがっかりなさないで。『六つ星』そのものについては分らなかったけれど、それについて知っているだろう人物が一人、水晶にかろうじて映ったの。その方を訪ねてみてはいかがかしら？」

マリーの提案にラウドから微かだが安堵のため息が聞かれた。

（よかった、まだ繋がっている）

ルキウスは思わずマリーに微笑んだ。その様子にマリーも首を傾けにっこり微笑み返す。

「少しでもお役に立ててよかったわ。これからお茶にしますから、是非とも一緒にしてくださいませんか？」

ご迷惑でなければ、と頷く二人を見て、マリーは再び呼び鈴をならす。程なく先程の玄孫らしき女性が二人を室外へ誘った。^{いざな}天気がいいので中庭で行われるらしい。

ラウドの後に続いてルキウスも廊下へ出ようとした。が、腕を捕まれ、振り向くと、マリーの淡い茶色の瞳にぶつかった。

（すっごく可愛いけど、…ばあちゃんなんだよな）

ルキウスは不思議な心持がした。クワントに会うのはもうすでにマリーで三人目だ。ラウドと会わなければ、クワントという最上級魔術師になんて一生会わなかったと思う。

マリーは自分を見つめ返すルキウスの手を取った。

「私は、ラウドに期待しているの。魔封じの力と六つ星の両方を持ち合わせた運命をもつ彼なら、きっと六つ星の呪縛をといってくれると信じています。でも一人では無理。あなたがラウドを助けてあげて」

マリーの強い視線にルキウスは息を呑んだ。ルキウスの驚きを見た彼女は、表情を和らげる。

「昔、私の元にもラウドが持っているものと全く同じ『六つ星』を持つ子が生まれたの。その時の私は何も出来ず、泣く泣く子供を手放したわ。その子のためにも是非頑張ってほしい」

マリーの瞳に影が宿る。その当時を思い出したのだろう。ルキウスの瞳にもそれは移った。ラウドやニダの他にも六つ星のせいで苦しんでいる人はたくさんいるのだ。

「絶対、解いて見せます」

マリーの手を握り返し、ルキウスは力強く答えた。その様子にマリーは目を細める。

「あなたがいてくれて、ラウドは幸せね。いい組み合わせだわ。『六つ星』の事は詳しく分からなくて申し訳なかったけれど、それは分かる。言いきれるわ」

思わぬマリーの言葉にルキウスは自分でも驚くほど戸惑うのが分かった。

「そんなことはぜんぜんぜんつないです。あいつは俺のありがたみなんてちつとも分かっていないんです」

思い切り首を振り、焦ってルキウスは否定した。が、ぴたりと止まると、上目づかいでマリーを見た。

「本当にそう思います？」

自信なさげなその表情にマリーは声を上げて笑った。

「本人に直接聞いてみたら？」

「それだけは死んでもイヤです」

それができたら苦労しないのだ。マリーは知らず知らずため息をつくルキウスの肩をそっと抱いた。

「ルキウス、あなたにこれからいろいろな事が起こるでしょう。でも自分は自分だということを忘れないで。それと、もっと自分に素直に、ね」

軽くウインクをしてマリーはルキウスを部屋に残し廊下へ出て行った。見た目通りの軽やかな足取りだ。

（どついうことだろう）

ルキウスは一人佇んだ。当代切つての占い師に言われると、気にしない方が無理だ。詳しく聞きたかったが、そんな機会は最後まで訪れず、出された良い香りのするお茶も、バターと乾燥した果物がたっぷり入ったお菓子も全く味がしなかった。

第12話

燃えさかる炎、轟音と共に崩れおちる天井。

（また、あの夢だ。いつも見る、あの時の…）

そう思いながらも目覚めることは叶わず、夢の中で幼い頃に逆戻りしたルキウスは大きな柱の物陰に隠れていた。

「力に物を言わせれば何でも思い通りになると思っていたらっしやるのね。でも、それは違うわ」

母のサラの声だ。いつもの優しい母ではなく、凜とした声で気高ささえ感じる。誰かと話をしているらしい。ルキウスは柱から顔を覗かせた。

「あなたに二度も屈辱を受けるくらいなら、私は死を選びます」

母はそう叫ぶと自らの胸に躊躇なくナイフをつきたてた。ルキウスは驚きのあまり炎の中で熱いのに関わらず全身に鳥肌が立った。

（母さん！）

叫んでいるつもりだが、声が全くでない。

母に対峙していた人物は驚いて母に駆け寄ったが、慌ただしくこちらへやってくる人の足音に入口を振り返り、人目を避けるように急いで部屋から出ていく。

（誰なんだ？）

目を良く凝らしてみるが、炎が明るすぎて逆光になり、シルエットしか見えない。しかし背が高く、体つきががっちりしていたので男だということは分かった。

（それより母さんを助けなきゃ）

ルキウスは急いで物陰から駆け寄ると浅い息の母にしがみついた。母はルキウスの姿を見ると顔をしかめながらも上半身を起こす。

（母さん、早くここから逃げよう）

必死に訴えるが母は首を振りルキウスを抱き寄せた。

「あなたは逃げて…生きて」

耳元でそう囁くとルキウスを抱きしめる母の手からゆっくり力が抜けていく。

（やだよ、かあさん！ かあさん！）

「…キウス、ルキウス」

軽く揺すられ、ルキウスは心配そうに覗き込むラウドをぼんやりとした視界で捉えた。ルキウスはすぐには夢から醒めた現実についていけなかった。

「うなされていたぞ」

親指の腹でルキウスの涙をぬぐうと、ラウドは再び馬車を走らせた。

（又、泣いてたんだ、俺）

この夢を見る時はいつも泣いて目覚める。

一人の時は最後まで見てしまう悲しい夢。でも今はそこから助け出してくれる人がいる。

（誰かが側にいるって、すごいな）

泣き顔を見られたとしても、その事がすごく嬉しい。ルキウスは気づかれないようにラウドのケープの端をこっそり掴んだ。それだけで満たされる心をいつもは否定するが、今日だけは許すことにした。

今向かっている先はマリー・ジョコフの水晶に映った人物、リゲ・ガレットの屋敷だ。彼はクワントの一人であり、首都エルクサンドラに程近いリガルドの町に住んでいるということだった。マリーの住むエスカトの町から馬車でも軽く一ヶ月半はかかるらしい。

エスカトの町を出て早一ヶ月経つ。途中、町に泊まったり、野宿したりと日によってまちまちだ。昔では考えられないが、ルキウスは野宿の方が好きだった。人目が無い所だと、ラウドは魔封じを外して魔法の練習をさせてくれるのだ。ヴェルマの様に綺麗で洗練された魔道士になりたいという願望はもちろんあるが、いつかラウドに六つ星の呪印を施した魔術師と戦う時、少なくとも足手まといにならない程にはなっておきたかった。

「かなり上手くなったな」

最近ではラウドも誉めてくれる。その言葉にルキウスは心が躍った。誰よりも彼に褒められるのが嬉しい。けれどもやはりまだそれを素直に表情に出すことは出来ないでいた。

「本当？ でもこれからどうしたらもっと上手くなるか解んないんだよね。ラウドは魔封じ以外の魔力を見せてくれないし」

心とは裏腹に拗ねた顔を見せるルキウスにラウドは首を横に振った。

「『魔封じ』は自分の能力について語るべきではないのだ。手の内を知られたら魔術師の取り締まりが出来なくなるだろう？」

「まあ、そうだけどさ」

実際『魔封じ』は謎に満ちており、物語に出てくる『魔封じ』達が使う魔術は作者の想像で書かれたものばかりだ。

「ねえ、魔法で地獄の番犬を呼び出して相手をかみ殺したりとか本当にできるの？」

ルキウスは物語で読んだ魔封じの話の一つをぶつけてみたが、ラウドはただ笑うばかりで答えなかった。

「そんなに魔法が上手になりたいのなら、やはり正式な魔術師から習った方がいい。今度もう一度ヴェルマに頼んでやるよ」

その言葉にルキウスは即顔を顰めた。

「やだよ、どうせ俺をからかって面白がるだけだろ。頼むにしても別の人にして」

ラウドの口からヴェルマの名前を聞くのが嫌だ。自然と声色も冷たくなる。

野宿のいいところは、魔法の練習が出来るだけでなく、ラウドが必ず隣にいてくれる事だ。町で泊まると最近ルキウスをおいてどこかへ出て行ってしまう。一度後をこっそりつけてみたが、その時は酒場の片隅で一人、飲んでいただけだった。

信頼してくれるようになったのか、気を使って一人にしてくれているのか、魔封じのあるルキウスは逃げないと思っっているのかは判らない。しかしルキウスには寂しい時間に感じられる。ベッドで寝たふりはするものの、ラウドが帰ってくるまでは眠れない。町に泊まると返って寝不足になるのだ。

「今日は町で泊まり？ それとも野宿？」

ラウドが涙をぬぐってくれた頬を押さえながらルキウスは聞いた。触られた所が熱い。

「今日はググールの町で泊まりだな。夕刻前には着くと思う」

「そう」

そっけなく答えたが、心の中でルキウスはがっかりしていた。

ラウドの言う通り、陽が傾く前に町へ行くことが出来た。ググー

ルの町は中程度の規模だが、人々や多くの馬車が行きかい、活気に満ちている。南と北を結ぶ交通の要所ということではいろいろな民族衣装を身に付けた商人の姿も数多くみられた。

「やっとみつけたわ」

ラウドとルキウスは適当な宿を探し、ひと段落ついた頃、声の主はノックもなしに入ってきた。ルキウスの顔が自然と軽く険しくなる。

「相変わらずシケた宿を選ぶわね」

「よくここの宿が分かったな、ヴェルマ」

ラウドの口ぶりからすると、自分達が今日この町に来ることはヴェルマに事前に知らせていたらしい。

（まめに連絡を取り合っているんだな）

心が硬くなっていくのがわかる。これ以上この場にいたくはなかった。二人が話す姿など見たくない。ルキウスは腰かけていたベッドから立ち上がった。

「ちょっと外へ出てくる。当分帰ってこないから、ご・ゆ・っ・く・り」

できる限りの笑みをを見せて、ルキウスは思いつきりドアをしめて出て行った。

第13話

「なによ、もう垂らしこんだの？」

ヴェルマは口の端をきゅっとあげた。面白がっているのがありありと分かる。彼の淡い赤色の瞳が少し濃くなっているのもその証拠の一つだ。ラウドはやれやれと言わんばかりに首を振った。

「人聞きの悪い事を言うな」

「あんたも見たでしょう？ 出て行くときのルキウスの顔。顔に『嫉妬しています』って書いてあったわよ。愛されているわね」

「彼が機嫌悪く部屋から出て行ったとしても、それはヴェルマが考えているような事じゃない。今まで一人でいた環境から、ルキウスにしてみれば無理やり俺と一緒にいなければならなくなったんだ。魔封じもされている事だし、頼る相手は彼にとって俺しかない。嫌でもね」

ラウドは努めなければ冷静さを保てない自分を持て余し始めた。自分の言葉で自分が寂しくなるのは初めての経験だ。

ヴェルマはルキウスが思いきりしめた古びたドアを眺め、肩を竦める。

「だから、ラウドもルキウスだけを見てろって考えているの？ 独占欲ってヤツかしら。やっぱリオコサマね」

ヴェルマは鼻で軽く笑うと、今度は微笑をラウドへ向けた。

「あんたもそうやって並べた御託を自分に言い聞かせていればいいわ。でもね、今回は私の勘の方が合っているわよ、絶対。あの子はあんたの事が好きだわ」

ラウド自身ではわからないが、第三者がそう言うなら、そうなのかもしれない。

（本当にヴェルマの言う通りなら俺は…）

そう思いかけ、ラウドは途中で思考を止めた。その先を考えてどうなるというのだ。確かに今は出会った直後程ルキウスに嫌われていないと思う。だが、無理やり魔封じをし、更に『六つ星』持ちの自分に普通好意までは持たないだろう。

硬くなっていくラウドの表情を眺め、ヴェルマは仰々しく天を仰ぎ、祈るように手を組んだ。

「父なる神よ、哀れな子羊は重症のようです。…自分の気持ちに気づいていない分、よけいに性質たちが悪いわね」。ま、あんたたちの問題だから私は関係ないけど」

煽るだけ煽っておいて後は放っておくヴェルマが一番性質の悪い事に彼自身気づいていない。ただ彼の良いところは物事に執着心がないことだ。ヴェルマはラウドとは体を重ねる間柄だが、ラウドを独占しようとは少しも考えていない。ヴェルマがしたい時にしたい事をする。彼の決まりごとはそれだけだ。ただ相手の都合など少しも考えないという最大の難点も同時に抱えるが。

「そんなことより、聞いて。ルキウスを初めて見た時、どこかで会

った事があるような気がしたんだけど、それが分かったわ」

悩める気持ちを『そんなこと』扱いされたのは心外だが、心内を暴かれ続けるのはどうも落ち着かない。話の流れが変わったことにラウドは正直ほっとし、その話に乗った。

「それは何処だ？」

「彼自身に会ったわけじゃないの。瞳の色が違うから初め気づかなかったんだけど、前の首都の都長だったクレル・クリスハルドの妻、サラ・クリスハルドにそっくりよ」

「俺は会ったことがないが、たしかエルクサンドラの黒真珠と呼ばれるほどの美貌の持ち主だったと聞いている。自宅の火災で亡くなったという話だが」

ルキウスは確かに人目を引く美人だ。それに火を極度に怖がる。ニダの家の火災では尋常ではない怖がり方をしていたルキウスをラウドは思い出した。あまりにおびえるので思わず抱きしめてなだめた。髪の柔らかな感触は今でもこの手が覚えている。

「そうなのよね。気になって調べてみたんだけど、記録には親子三人、全員亡くなっていたわ。私、彼らに会ったことあるのよ。都長就任の宴の時だったかしら？ とにかく確かに家族三人だった。息子もどちらかといえば父親似で、あんな顔じゃなかったと思う。でもあんなにルキウスが都長夫人に似ているのはおかしいわ、絶対何かある。噂ではあの火災にフォゴル・リルツェンが関わっているらしいし、謎だらけよ」

当時、都長であるクリスハルド家の火災にクワントの中でナンバ

「ワンの地位を持つフォゴルが関わっているため事件はもみ消された、という噂が庶民の間でまことしやかに、又面白おかしく流れていた。フォゴルの息のかかった魔術師が都長になれなかった腹いせにクリスハルドの一家を殺した、と。しかし実際の所の真相は分からないまま迷宮入りで終わっている。」

「例えルキウスがサラという都長夫人に似ていても、二人の間に関係があるかどうかは推測に過ぎないのだろう？　そういうことは下手にルキウスに言わない方がいいと思う」

直接問いかねないヴェルマにラウドは釘をさした。

（知りたい気持ちはもちろんあるが、ルキウスが身の上を自分から話さない以上、こちらからは聞かない方がいい）

ルキウスに無理やりさせるのは『魔封じ』だけでいいとラウドは考えている。ヴェルマは器用に片眉をあげて見せた。

「あら、私よりルキウスの味方なのね」

「俺は誰の味方でもない。今日はこんな話をしに来たのではないのだろう？　今の時期はクワントと委員達の評議会があるんじゃないのか？」

ラウドには自分をからかって楽しんでいるヴェルマが少し憎らしい。多少棘のある言い方になったが、そんなことを気にするヴェルマではなかった。

「そんなの抜け出てきてやったわ。それより、僧侶長から伝令を貰ってきたの。あんたに会う方がつまらない会議に出るより数百倍

楽しいからね。えーっと、ガロン・マクバークを魔封じせよ、ですって。簡単に言ってくれるわよね」

来年一年の方針を決める大切な評議會を抜け出すクワントなど聞いたことがない。いつか好き勝手しているヴェルマに魔封じを施す命令が下る日が来るのではないか、とラウドは密かに思った。

「彼はまだ牢獄にいるはずでは？」

ガロンは三年程前、魔術で人を殺害した罪で投獄されたと聞いた。彼が出てきたのなら少しやっかいなことになる。

「脱獄したのよ。それにとどまらず、また魔力で人を殺しちゃったのよね、三人」

三本ぴつと細い指を立てるヴェルマにラウドは了解の意味を込めて頷いた。

（やっと『六つ星』の手がかりに近づいてきたのに、ここで足止めをくらうとは）

しかし、そう思っても仕事をこなさなければラウドが罰せられる。六つ星の謎を解くためにもしっかり仕事はしなくてはならない。

頭ではそう分かっていても、ため息一つを吐きだすのは止めることが出来なかった。

第14話

グゲールは商業の町だけあり、商売でもうけた商家が多く建ち並ぶ。道沿いに伸びる塀には財力に物を言わせて作られた商売の神への感謝を表す細密な装飾が施されており、職人の技の巧みさに足を止めて眺める価値は十分ある。しかし、怒りにまかせて歩いているルキウスの眼には全く入ってこなかった。

「なんだよ、バカバカバカ」

ルキウスは陽が傾き赤色の輝きに染まる川辺に座ると近くにある石を軒並み川へ投げては悪態をついていた。

「バカバカバカ」

もうラウドに馬鹿といつているのか、ヴェルマに言っているのか、自分に対してなのか分からない。周りの石がなくなると、手持無沙汰になったルキウスは膝を抱え、顔をうずめた。

（本当にバカなのは俺だ）

もう自分をごまかすことが出来ない所まできている。もう一度ルキウスは心の中で許可なく無断で湧きあがる想いを否定する理由を挙げ始めた。

（無理やり俺に魔封じした相手だぞ。それに世の中に災いをもたらすと言われる六つ星だし、それに、それに…）

そう言いながらも思い出すのは、火事の中、ニダの子供より優先

して自分を助けに来てくれた事。炎で動揺したルキウスが落ち着くまで抱きしめてくれていた事。寝ていればケープをかけてくれる事。うなされていれば優しくおこしてくれる事。一人にされると寂しいと思ってしまう事…。

挙げればきりが無い。ルキウスは更にきつく腕をかかえた。

（ラウドの事、好き…なんだ）

うすうすは気づいていたが、こんなにはっきり認めるのは初めてだ。鼓動が急に早くなった気がした。ルキウスはそっと胸を押さえ、そのままゆっくり手を腹まで下ろす。手の下にある魔封じでさえ、今ではルキウスがラウドの隣に堂々といられる免罪符のようで愛おしささえ感じられる。

しかし同時に、ルキウスからは絶対好きだとは告げない事も心に決めた。魔封じをされてただでさえラウドより弱い立場にいるのに、それでも好きになったなんて知られたら完全にラウドに負けた気がするのだ。

「絶対言うもんか」

つぶやきが口からもれた。

「何をだ？」

突然上から降ってきた声に、ルキウスは目を見開いた。

ラウドだ。彼が隣にいる。

（ちょうどラウドの事を考えているときに来るなんて、反則だよ）

しかし驚いた事を知られないよう、ルキウスは呼吸を素早く整えてから顔を上げた。

「あんたに気を利かせてせっかく部屋から出てやったのに。ヴェルマはどうした？」

「ヴェルマはまだ宿にいるが、彼も忙しいからな、もし会いたいなら今から急いで宿に戻った方がいいぞ」

「別に会いたくなんかないよ」

ヴェルマは泊まらず帰るらしい。また前の様に二人の声を隣の部屋で聞かされたら、今のルキウスではもう耳をふさぐだけでは一晩やり過ごすことは出来そうもない。

（ヴェルマは夜、ここにはいないんだ）

そう思っただけでルキウスは心が軽くなるのを感じる。それに乗じてもう少しだけ突っ込んだ質問がしたくなった。

「じゃあ、その、俺を…迎えに来てくれたわけ？」

「ああ」

さらりと言ったラウドの短い答えだが、ルキウスにとっては大事な答えだ。ラウドはヴェルマを宿においてルキウスを探しに来てくれたのだから。

ラウドは隣に座ると、顔にかかった髪を掻き揚げた。首筋がしっかり隠れる服は着ているものの、珍しく頭にドミノは被っていない。髪が手から零れ落ちる度、夕日をつけて一本一本が輝きを放つ。ルキウスは横目でそれを眺めた。髪的美しさとは相いれず、ラウドの横顔は曇っている。

「なんかあったの？」

思わず口を出た問いにラウドは軽く目を見開いたが、すぐに苦笑に変えた。

「いや、たいした事じゃない。リガルドの町へ行く前にシーナへ行く。仕事だ。ヴェルマはそれを伝えに来たのだ」

ルキウスは小さく声をあげるとラウドのケープの端を掴み、軽く揺らした。

「仕事って魔封じするんだよね？　じゃあ俺もその時、立ち合わせだよ。俺の魔力の実力を試すいいチャンスだと思わない？」

今やルキウスは自分の魔力に対して自信を持ち始めている。ただ、実践で使ったことがないのでその自信を確信に変えたい。それに、なによりラウドの役に立ちたいのだ。

しかし当のラウドは首を縦にふらなかつた。

「今回はだめだ」

「なんでだよ。ラウドに六つ星の呪印を施した魔術師と戦う為の戦

力が欲しいんだろ？　だったら練習の場を与えてくれてもいいじゃん」

「そう、ルキウスには実践を経験してもらいたいとは思っている。しかし初めての相手として今回程最悪な人物はいない」

「…どんな相手なの？」

ルキウスから先程の勢いがなくなっていく。

「ガロン・マクバーク。リジャー級級の魔術師だ」

「リジャー級ってクワントより一つ格下の魔力の持ち主ってことだよね。じゃあ…」

「登録上はリジャー級だ。しかし実力は特殊能力こそ持たないものの、他はクワント並だ」

「どうして彼はクワントじゃないのさ？　能力に応じて階級を決めているんじゃないの？」

「ルキウスは創世神話を知っているか？」

唐突な問いにルキウスは眉をひそめた。

「は？　知ってるけど。神が七日七晩かけて七人の魔術師と共に悪魔を倒した、ってやつだろ」

「そうだ。その七人の魔術師の末裔しかクワントと認められていないんだ。だから彼はクワントの実力があるってクワントにはなれな

い」

「なんか、保守的だね」

「実際そうだ。一度、神話の七人の魔術師以外でも実力次第でクワントになれるようにしようという議題があがった時も、六つ星の子を殺すという根拠のない慣習をやめようという話が出た時も最後は結局今まで通り、何も変わらなかった」

「なんか、ガロンなんかかっていう人が犯罪に走る気持ちがかつてきたよ。実力が認められないんじゃないや、やりきれないよね」

「俺もその点では彼に同情する。しかしそれと人を殺すことは別だ。とにかく、今回ルキウスは宿で留守番だ。いいな」

真面目なラウドの鋼色の瞳には有無を言わせない力強さがあり、ルキウスは不本意ながらも頷く以外できなかった。ラウドもその様子に頷き返し、ネックレスを首から外すとルキウスに手渡した。それは中心に紫の石を配置し、周りは精巧な花の細工が施された金細工で縁取られている。ルキウスはいぶかしげに、いろいろな角度からそのネックレスを眺めた。

「なにこれ？ ラウドがいつも持っているやつだよね」

「もし俺に何かあった時はこれを持って首都にいる俺の父、モイア・ダニングを尋ねろ。良いように計らってくれる」

「何かって何だよ？ ラウドがガロンにやられちゃうって事？」

ルキウスはラウドに詰め寄るとラウドは軽く肩を竦めた。

「俺だって不死身じゃない。そういう事もあるかもしれない、ただそれだけだ」

「じゃあ、この魔封じ、解いてから行ってよ。あんたが死んじゃったら俺は一生このままになるだろ」

ルキウスは自分の言葉にラウドの瞳が揺らいだのを見逃さなかった。急に心に不安感が襲う。なぜいつもの飄々とした表情で断ってくれないのだろう。

「冗談だよ。ラウドは負けないよ。そうだろ？ 魔封じは全魔術師の天敵なんだから」

ラウドが何か言う前にルキウスは口を開いていた。魔封じを解かれてしまえばラウドの隣に座る理由がなくなってしまう。しかし、ルキウスはまだラウドの側にいたいという素直な気持ちを口に出せそうにない。冗談めかせて言ったのが唯一のプライド、というヤツかもしれないが、不自然だっただろうか？

「ああ、そうだな。俺が勝てばなんら問題はない話だな」

ラウドは軽く笑った。その笑顔にルキウスは安心したが、やはり素直に表情には出せない。また軽く顔をしかめてしまう。

「俺のためにも勝ってよね。一生魔封じされたままはイヤだから。とつと早く終わらせてリグ・ガレットのところに行かなくちゃ」

「ああ」

ルキウスのぶっきらぼうな言い方にラウドは再び苦笑する。そして立ち上がると手をルキウスに差し出した。

「そういう言い方がおまえなりの励ましたと受け取ることにするよ」

「とても前向きな発想だね」

そっけなく言いながらもルキウスは高鳴る胸を押さえていた。さし出された手を取るだけなのにドキドキしてしまう。そっと手を重ねるとラウドは力強く掴み、引っ張ってルキウスを立ち上がらせた。

「もうそろそろ帰るか」

ルキウスからしてみればあっさり手を放し、ラウドは先に踵を返す。

（触れられた手の温もりが消えることがどれ程寂しいか素直に伝えられたらこの心は楽になるのだろうか）

ルキウスは先に歩きだしたラウドの広い背中を寂しげに眺めた。

第15話

「ついてくるな、って言われたけどさ…」

ルキウスはこっそりとラウドの後を付けていた。

ラウドに魔封じの命令が下った相手、ガロン・マクバークがいるシーナの町へ着くなりラウドはルキウスを宿に残し出かけて行った。もちろんルキウスに絶対宿から出ないようきつく言うのも忘れなかった。だが、相手は身分こそ二番目のリジャーだが、実力的には最上級魔術師のクワント並なのだ。いくら全ての魔術師の天敵といわれる魔封じのラウドでも、やはり強い魔力をもつガロンと戦うとなると大変だろう。

（だから俺にも宿にいろ、っていったんだろうし…）

ルキウスは胸から下げているネックレスをにぎった。そしてそのネックレスをもらった時の様子も同時に思い出した。

（あの時、ラウドは魔封じを解きそうだった。今まではどんなに頼んでも…）

そこまで思い、ルキウスは苦笑する。きっと魔封じを外して欲しいと思っていたのは最初の頃だけで、途中からは本気でその言葉を言っただけじゃなかった。

（でも、今回はどうして解いてくれる気になったのだろうか。もしかしてもう俺は必要ないのかな。実力が足りないとか…）

考えれば考えるほど不安になってくる。

そうこう考えているうちに先に行くラウドは街角で若い男性を見つけると彼を追いかけるため足を速めた。

ルキウスもあわてて追いかける。相手は犯罪者の割に堂々と昼間から陽の照る街中を歩いていった。何者にも勝つ自信があるのか、犯罪者はコソコソしているものだという思い込みがあったのか、ルキウスは少し驚いた。

ラウドがうまく立ち回ったのだろう、程無く若い男を人気のない裏通りの袋小路へ追い込むことに成功した。

（あれが、ガロン・マクバーク）

ルキウスは隠れながらも急ぎ足でようやく追いつき、乱れる息をなだめつつ物陰から二人のにらみ合いをながめた。

クワント並の魔力があるだけあってガロンも青年の外見だ。細いながらも筋肉質で、よくは見えないが、聡明で神経質そうな顔立ちのようだ。

ガロンは手から眩しい光を放った。しかしすぐ彼の口から舌打ちが漏れる。光に乗じて逃げようとしたが失敗したようだ。

「悪いが、俺から逃げることは不可能だ。一度狙いを定めた相手は何処にいるのか分かる能力があるのだから」

ルキウスの目はガロンの出した光で眩み、視界を失ったが、ラウドの声からするとラウド自身にはなんらダメージはなさそうだ。軽

くルキウスはため息を吐き出した。

「魔封じが自分の能力を語るのとは命とりじゃなかったのか？」

顔立ちと同じように、ガロンの声は男にしては高く神経質そうだ。

「今のは別に知られてもかまわない能力なのでね」

ルキウスにもようやく視力が戻る。ガロンは軽く開いていた両足に力を込めた。

「確かに。それでは体をはって『魔封じ』の謎をといっていくか。どの文献にもお前の弱点は書かれていなかったからな」

「それはそれは。無駄な努力をさせて悪かった」

ラウドの優雅な頭の下げ方が却ってガロンの癪に触ったようだ。

「お前をこの世で最後の魔封じにしてやろう。弱点を暴かれた間抜けな魔封じとして歴史に刻まれるがいいわ」

そう言い放ち、ガロンは彼の手から大量の水の塊を出すとラウドに向けて投げつける。しかしラウドは避けようとはせず、どちらかと言うと自らその水の塊の中へ入っていった様にも見えた。

水の塊は激しく回転しており、中がどうなっているのかが分からない。早く出てこないと窒息してしまう。見ているだけのルキウスもなんだか息苦しくなってきた。

（ちよっ…大丈夫…だよな？）

心がざらりとし、ルキウスは首からかけているネックレスを知らないうちに汗ばんだ手で握り締めた。

本当にラウドに何かあったら、ここで自分に何ができるだろう？

「やっぱり魔封じを解いてもらえば良かった。そうしたら一緒に戦えるのにな」

しかし『何か』あったときはこのままでも飛び込んでいくつもりだ。

（そうだ、ガロンの気を逸らせば魔法が緩むかもしれない）

そう考えてルキウスは何かないと二人から目を離した。その途端、激しく弾ける音が鳴り、共に大量の水しぶきが飛んできた。

「これくらいの魔力では俺は倒せない。次はもっと強い魔法でやってくれ。これではすぐに終わってしまうぞ」

ラウドは不敵な笑みを浮かべながらガロンへ近づいていく。あの水の中にいたのに全くぬれていない。ラウドの右手が淡く緑に光はじめた。魔封じの光だ。

（余計なこと言ってないで、早く魔封じしちやえ）

自分がびしょ濡れになっていることもルキウスは忘れてラウドに見入る。

「くそっ、化け物め」

ガロンは尖った手のひら大の氷の塊を無数に投げつけた。それには稲妻がまわりついており、水と雷の両方の属性を供えた高度な魔法である。しかしその塊はラウドを避けるように飛び、ラウドの足を全く止めることが出来なかった。

ラウドはもはやガロンの目前にいた。ガロンは音が聞こえるほどの齒軋りをする。

「僧侶長ドルガ・サイレーンの命により魔封じを施す」

ラウドはさらに間合いを詰めた。

（やった、もう終わりだ）

ラウドの手は眩しいほどの緑の光で包まれている。最後のあがきかガロンは暴れ、ふいに彼の指輪がラウドの頬を掠めた。

「！」

ガロンは驚いたように目を見開いた。ルキウスも目を見開く。あれだけ魔法攻撃に動じなかったラウドの頬から一筋の血が流れた。

ガロンと同時にルキウスも悟った。ラウドは魔法攻撃には完全無敵なのだが、物理的攻撃に弱いということ。

魔力で戦わせるため、ラウドはわざとガロンを煽るような事を言った。ガロンはラウドの弱点を知らなかった為、魔力で最後まで戦った。魔力が強ければ強いほど陥りやすい罠で、ある意味ラウドの作戦勝ちだ。

ルキウスは初めてラウドに会った時、その日の二度目の魔封じを受ける前に小石を投げつけた事を思い出した。たしか彼は『正しい攻撃だ』と言った。それはこの事だったのだ。たぶんリドの町の火事でも魔力を帯びている火であれば火傷などしなかったに違いない。攻撃魔法が効かないのであれば、ルキウスの幻影にもだまされなくて当然だ。

それでは、今までの旅の途中でラウドが一回も魔法を見せてくれないのは、『魔封じ』の能力を知られない為だったのだろうか？

（確かに謎であればあるほど相手は恐れるけどさ）

でも…と考えるルキウスは、はたと気づいた。

（魔法の防御は完璧だけれど、もしかしたら攻撃魔法が一切使えないのかもしれない。今の戦いでも一度も攻撃魔法を出さなかった。そうでない限り彼は無敵であり、『六つ星』の事だって俺なんかいなくても出来るはずだ）

何かがすんなり落ち着いた気がした。この戦いでいろいろなことが分かった気がする。

「冥土の土産ができてよかったな」

その言葉と共にラウドはガロンに魔封じを施した。

「よかった…」

ルキウスは自分の体が安堵から力が抜け、崩れ落ちるのが分かった。思った以上に体が緊張していたようだ。もしラウドが負けていたらと思うと全身が縮む思いがする。

（ラウドがいなくなったらって考えるだけで俺、どうしたらいいか分からなくなる。ラウドが隣にいない生活はもう想像できないし、したくない）

でもこれで本当に終わったのだ。あとはこっそり宿に戻ってラウドの頬の傷を治すのだ。『魔封じ』に傷を負わす方法があるということが知れるとラウドも戦いにくくなってしまっただろう。

（頬の傷って、あれはあれでワイルドでいいんだけど、余計な敵を増やさないようにする為にも、見えるところの怪我は治すに限るね）

そう決めて顔を上げると同時に、ガロンの体が砂のように崩れ、跡形もなくなってしまうのが目に入った。

「えっ、なんで？」

思わずルキウスは声を立てていた。しまったと思ったときにはもう遅く、ラウドにしっかり見つかってしまった。

第16話

「宿屋に居るといったらう。こんなに濡れて、風邪ひくぞ」

バツが悪そうに立ち尽くすルキウスを見つけたラウドは共に宿へ戻るなりガロンの魔術で出された水で濡れた服を着替えさせた。

乾いた服に着替えたがまだ髪は濡れており、頬に張り付いた黒髪をラウドは長い指で整えた。その手を嫌がることなく髪を直されるままにルキウスは尋ねてきた。

「ねえ、なんでガロンは消えちゃったの？ 俺にはただ魔封じをしただけに見えたんだけど」

当然の疑問だろう。ラウドは軽く頷いた。

「あいつはもう百は軽く生きています。魔封じをされると、受けた者は魔の属性から離れて魔力のない普通の人となる。奴の身体は魔力で保っていたが、普通の人間に戻され、百年という歳月が急に身体に流れ込み、それに耐えられなくなり消滅した」

「そう…」

二人の距離が近い分、ルキウスの顔が軽く曇るのをラウドは見逃さなかった。ガロンの最後でも思い出したのだろうか。

確かに初めて見る人にとっては衝撃的だろう。今まで生きていた人が急に砂と化し、跡形もなくこの世から消え去るのだから。ましてやルキウスは同じ魔術師だから、思うところがあるのかもしれない

い。

「そんな顔をするな」

ラウドの言葉にルキウスは何かを思い出し、弾けるようにこちらを見上げた。

「顔！ そうだ、頬のケガ、治そう。魔封じ外してよ、それくらいならすぐ済むから」

ルキウスは突然そう言うと、傷のあるラウドの頬に手をのばす。

「別に必要ない。すぐ治るさ」

ラウドは首を振り一歩下がったが、ルキウスはその分一歩近づきラウドの頬に手を当てる。

「悪いことは言わない。すぐ治した方がいいよ！」

力説するルキウスをラウドは複雑な表情で見つめた。そして、頬にあてられたルキウスの手に自分の手を重ねあわせた。

「…お前は察しがいいからな」

驚いてルキウスは手を引こうとしたが、ラウドはそれを許さなかった。

（きつとさっきの戦いを見て、『魔封じ』の大体の能力を知ったのだろう）

ラウドを始め『魔封じ』は自身に害を及ぼすいかなる攻撃魔法を一つとして受け付けない。その変わり攻撃魔法を使う能力はなく、物理的な攻撃でのみ倒せることができる。だからルキウスはその弱点を他の人に知られない様すぐに目に付く頬の傷を治すと言ったのだ。確かにそれは正しい判断だろう。

（ルキウスは素直ではないが、いつも自分の事を気遣ってくれている）

初めて六つ星持ちだと告げた時不思議と彼なら大丈夫だと思えたことを思い出した。

急に抑えていたルキウスへの愛おしさが堰を切り、止められなくなった。

（では、ついでに俺の気持ちも察してくれ）

ラウドは掴んだルキウスの手を唇にあてた。

「ちよっ…ラウド、何？」

お構いなしにルキウスの指一本一本に丁寧な口づけを施し、時に指の股を舐め上げた。

ルキウスの体がぴくりと反応したのがわかる。ルキウスは思いがけない感覚に戸惑っているようだ。いつもと違うしおらしいルキウスは新鮮で、ラウドは押さえがきかなくなっていた。

ほの暗い喜びが全身を支配する。掴んだ腕を引き寄せ、ルキウスの華奢な腰を掴むとそのままベッドへ組み敷いた。

「やだ、なにするんだよ！ 離せって！」

ルキウスは空いている片手で抵抗を試みているが、それは唇をルキウスのそれに重なる妨げとはならなかった。

「んっ……」

柔らかい唇の感触を楽しんでから、下唇を舐め上げる。程なくしてルキウスはかみ締めていた口をほころばせた。その隙を逃さず奥へと侵入する。吐息も何もかも奪いたい、その一心で口内を舌でまさぐっているうちに奥でかくれていたルキウスの舌に会う。誘うようにそそのかすと、ルキウスもおずおずとそれに答え始めた。

それが嬉しくてラウドはさらに深くルキウスを求める。今ではもう手を押さえる必要もなく、ルキウスの艶やかな黒髪も同時に楽しむことが出来た。

（ヴェルマの勘は当たっていたのかもな）

こういう日が来るのを否定しつつも思い描いていた。ルキウスの笑顔、ふとした動作全てがラウドの心に響く。最近ではそれがつらくて逃げ出すように外へ飲みに出ることもしばしばだった。一度はルキウスを手放そうとも思った。最近ラウドはルキウスを『六つ星』に関わらせたことを後悔し始めていたのだ。

誰とであれルキウスを戦いに巻き込ませたくない。彼が傷つくのを想像しただけで心が驚づかみにされたような感覚を覚えるのだ。その一方、同時に離したくないという気持ちがあることも事実であり、そのせめぎあいがラウドを翻弄し続けていた。

だが今はそんな懸念は脳裏になかった。ルキウスの抵抗はもはや全くない。口付けを首筋に移し、思いのまま吸い上げ、髪を楽しんでいた手をゆっくりと下へ下ろしていく。

「あつ」

薄いチュニツクの上から胸の突起を擦りあげると同時に、ルキウスの掠れる声があがる。かわいい声をもっと聞きたくて、ラウドは二本の指でゆっくりと、時には激しく擦り上げ揉みしだく。

「や…だつてば」

口から漏れる声とは逆に、服の下の突起は固くしこっていく。

（じかに触れたらどうなるだろう？ いや、そこだけではなく、全て余すところなくルキウスに触れたい）

心の声の命ずるままに、ラウドは服を脱がしにかかる。しかし目に飛び込んできたのは想像したルキウスの滑らかな肌、ではなく、自分の施した呪印だった。

はっとして、ルキウスを見た。彼は両腕で顔を隠し、表情は読み取れない。しかし、泣いていた。

（魔封じを受けている身だから、俺に強く逆らえなかったのかもかもしれない）

急に後悔の念が湧き上がってきた。抵抗しないのはルキウスもラウドのことを憎からず思ってくれているからとばかり考えていた。

（とんだ思い上がりだ）

ラウドはルキウスから体をはがすと、ルキウスの服を元に戻し背を向けた。

「すまない、先程の戦いの後で、気が高ぶっていたのかもしれない」
それだけ言うのが精一杯だった。一番傷つけない相手だったのに、このような結果に終わらせた自分が許せない。

ラウドはルキウスを一人部屋に残し廊下へ出た。夕飯時で、階下からはにぎやかな声と食器のぶつかる金属音が聞こえる。暫く壁にもたれかかり、目の前のドアの向こう側にいるルキウスと過ごした時間を思い返していた。

（やはり、ここでルキウスとは別れた方がいい。そうすればルキウスは再びあの雑踏に紛れ、平凡だが安全な生活ができるだろう。それに…もう俺とは一緒にいたくないだろうからな）

魔封じを外すことを決めた。ルキウスはもう十分魔術師としてやっていける。彼なら魔力を正しく使うだろう。魔封じの弱点は黙って知っているとありがたいが、言われても仕方がないだろう。自分で蒔いた種だから、自分で刈り取らねばならない。

ラウドは軽く息を吸うと、ルキウスの罵倒をあびるのを覚悟の上で、再び部屋に戻るべく扉に手を伸ばした。

第17話

稀代の占い師マリー・ジヨコフに教えられた人物、リグ・ガレットの住む町リガルドは農業を主とした町で、他の都市よりのどかな時間がゆつくりと進んでいるようだ。風に乗って土の温かい香りがする。首都エルクスンドラの農作物はほぼこの町から来ており、裕福な家も数多く見受けられた。

（なんかこの景色、見覚えがあるんだよね、でもちよつと違うような…）

ルキウスは記憶の糸をたどりつつ、行きかう人々や周りの様子を眺めた。町は全体的に新しい建物が多い。やはり見覚えは気のせいだったのかと結論付けたものの、心の引っかかりが取れぬままだった。

町の中心にある大きな石に彫刻された何かの記念碑の隣でラウドは馬車を止めた。

「ガレットの家がどこか聞いてくる」

「ついでにいい宿屋も聞いてきて」

ああ、とラウドは軽やかに馬車から降りて行った。その後ろ姿をルキウスは頼杖をつきながら眺めた。ガロンと戦ったシーナの町からリガルドの町に着くまでの半月の間、何事もなくここまでやって来た。

（っっていうか、本当に何もなし！）

あの扉の閉まる音は今でも忘れられない。ルキウスの記憶は勝手にシーナの町の宿屋の一室へ逆戻りしていった。

両腕で顔を覆っていたが、ラウドが出て行った、とルキウスは気づいた。

（どうして…？）

どうして途中で止めたのだろう。分かっているのは魔封じの呪印を見て止めた事だ。

（魔封じを身に持つ者は抱きたくない？ それとも俺の気持ちに気づいてからかっただけとか？ いや違う、ラウドは最後に謝った、『すまない』って）

悪いと思っているのだ。そうでなければ謝ることを彼はしないだろう。

（魔封じをされているから俺が抵抗できないと思った…？）

ラウドならそう考えそうだ。ルキウスは魔封じがあるから仕方なくラウドについていくという立場を今までとってきたので、そう思われても不思議ではない。

（でも、そんな俺に実際手を出した。いくら戦いの後で気分が高揚していたとしても、下手をすれば協力者の俺を失いかねない。と、いうことは）

ラウドはそれでもルキウスに触れずにはいらなかったのだ。

ラウドの唇で辿られた跡が熱い。

ルキウスは自らを抱き締めるとベッドの上できゅっと丸まった。

（都合よく考えすぎだろうか？）

でも他に考えられない。そして、それが本当ならばこんな成り行きではなく、まずラウドからはつきり言葉で聞きたかった。

（絶対ラウドから俺のこと『好きだ』って言わせてみせる。だからラウドから離れない。でも俺からは言わない）

ラウドが去った時、静かに閉められた音がルキウスにはとても大きな音に聞こえた。その扉が二度と彼の手で開けられることなく自分の前からそのまま姿を消し、二度と会えなくなったら…。

自分の作り出した想像に怯えたルキウスは慌てて身を起こした。あの状況の後ではラウドもこの部屋に戻りづらいと思う。だからこちらから探しに行くことにした。彼と離れたくないのならばそれくらいはしなければならぬだろう。それにルキウスはこれを機にラウドに魔封じを解かせようと考えた。ラウドが違法魔術師と戦うのをただ不安げに見るだけなのはもう嫌なのだ。自分だってもう十分役に立てる…はずだ。

（でも、上手く話せるかなあ…）

不安が心をしめつける。道すがら話す筋立てを考えるつもりであったが、ルキウスは思った以上に早くラウドを見つけた。ドアを開

けた目の前に彼が立っていた。

ラウドは驚いて目を見開いたが、すぐ伏せると掠れた声で再び謝った。

「ルキウス…すまなかった」

「悪いと思うなら、魔封じ外してよ」

いつもより怒った口調で言わなければならない。例え怒っていても。

「ああ、そのつもりだ」

ラウドの返答は思惑通りなのだが、ルキウスは複雑な気持ちで奥歯をかみ締めた。

（ラウドは俺を手放すつもりだ。あんたはそれでいいの？ 俺はやだよ）

心の声は聞こえるはずもなく、言葉通りラウドは淡々と片手を伸ばし、緑の光を発した。

ルキウスは自由の身となる。

「ルキ…」

「そこに座って」

ラウドが何か言う前に、ルキウスはラウドをベッドの端へ座らせ

た。ルキウスが手を上げるのを見て取ると、ラウドは鋼色の瞳を閉じた。殴られると思っっている様だ。

ルキウスはラウドの頬に手をあてると治療を始めた。これからはラウドの許可がなくても彼の傷を治すことができる。それが一番嬉しかった。

「魔法でもヒーリングは大丈夫なんだよね。俺の一番得意な魔法が攻撃魔法でなくてよかった」

「ルキウス…」

ラウドは信じられないといった表情で鋼色の目を開き、ルキウスを見上げた。

「六つ星の呪印を絶対解くって約束したんだ、マリーと。だから俺はあんと一緒にいる」

言い方は本心とは程遠いが、とにかく今は、ラウドに魔封じがなくてもルキウスと一緒にいるということを知って欲しかった。

「だから、もう二度と俺に魔封じはしないで。それと、また急に押し倒したら今度は許さないから」

（その前に『好きだ』って言うてくれないとだめだって事だけどね）

ルキウスはこっそり心の中でつけたした。

ラウドは軽く苦笑めいた笑みを浮かべてから、分かった、と真顔で答えた。

途端にルキウスはラウドに受けたキスや手の軌跡、思いがけない事態に泣いてしまった事を思い出し、平静を装うのにかんりの努力を必要としなければならなくなった。本音を言えば、「好きだ」と言われる前に再び求められれば拒み通せる自信も、ない。

（こんなん俺、やっていけるかな…）

心の不安をルキウスは正直に認めた。

あれから半月、ラウドはルキウスの言葉を完璧に守るようだ。魔封じはもちろん施さないし、押し倒すどころかルキウスに指一本として触れようとはしない。物の受け渡しの際に偶然触れるぐらいだ。

（少しはそういう素振りくらいみせてもいいのに。それとも…やっぱり俺の事、好きじゃないのかな）

冷静に考えてみれば、ラウドにはヴェルマがいるのだ。彼に比べればルキウスは子供であり、素直さもかわいげもなく見えるかもしれない。

（ヴェルマより俺の方が勝っていることってなんだろう？ 魔術は断然ヴェルマが上だ。だって他の人には内緒にしているみたいけど空間の移動が出来るくらいだから、彼自身も言う通り、本当にクワントの中のクワントと呼ばれるのにふさわしいよな…能力だけは）

ルキウスが考え抜いてむりやり引き出した答えも一つしか見つからなかった。

「…若さくらい？」

しかしルキウスはガロン・マクバーグの事件以来、気になっていた事柄をラウドに聞いた時の事を思い出した。

「ラウドはもう歳はとらない？」

「歳はとるが、容姿は三年前くらいから変わらなくなったみたいだな」

「じゃあ、ヴェルマは今いくつ？」

「俺に聞くなよ。少なくとも俺が十二で初めて会った時にはすでにあの姿だったな」

でも、と笑いながらラウドは続ける。

「間違ってもヴェルマ本人には聞くなよ。殺されるぞ」

「気にしているってことは結構歳かもね。じゃあ俺はどうかな？」

「さあな、お前は一般人から生まれたのにも関わらず魔力を持つ突然変異だから、どうなるか分からないな」

ラウドの言葉にルキウスは落ち込んだ。若いまいつまでもラウドと一緒にいたいのに、もしかしたら普通の人の様に歳をとって死んでしまうのかもしれない。

「これじゃ、ヴェルマに勝てるものなんて一つもないじゃん」

回想から帰ってきたルキウスはため息とともに呟いた。

ふと視線を上げると、ラウドが中年の女性を連れてくるのが見えた。彼女はガレット家に仕えている一人だそうだ。これから屋敷へ働きに行くので一緒に馬車に乗って案内してくれるらしい。

「あの人はね、なかなか気難しい人よ。気に入らないとすぐ機嫌を損ねるし。そうそう、このあいだなんか彼の趣味で集めている膨大な書物のほこりを掃った時に、もとに戻す場所がちよつとだけ、ほんのちよつとだけよ、違っていただけでもう機嫌損ねて大変だったんだから。あの人、細かいことよく覚えているのよ。それからね…」

クワントの職務を息子に任せた後は自宅に引きこもり、さらに偏屈になったという。

ルキウスとラウドはガレットの家へつくまで延々と愚痴をきかされた。話だけから想像すると、リグ・ガレットはあまりとっつきやすい性格ではないらしい。次々と出でくる話にルキウスは気が滅入ってきた。

「あつ、あそこにとめてね」

町外れにあるその屋敷は、角の整った石が整然と積み上げられてできている。彼女の話したリグ・ガレット像と一致する様に、人を寄せ付けない雰囲気醸し出していた。

「送ってくれてありがとう。これから旦那さんに聞いてきてあげる。でも多分会わないわよ、人嫌いだから」

屋敷に入り程なく戻ってきた彼女は、門の前で待っていた二人に

やはり駄目だったわ、と言い、すまなそうにそそくさと屋敷へ入っていった。

ルキウスは腰に手をあてる。

「ちゃんと聞いてきてくれたと思う？ 戻ってくるの、早すぎるよね？」

「まあな」

「じゃあ、ちょっと入ってみようかな」

ルキウスは辺りを見回すと壁に手をかけた。

「ルキウス！」

ラウドはルキウスの腕を掴んだ。が、熱いものを触ったかの様にすぐに離れた。

「すまない」

（なんで謝るんだよ、バカ）

あからさまに手を離されると傷つく。しかしその気持ちを出すわけにもいかない。

「ここしか六つ星の手がかりがないのだから『はい、そうですか』ってあきらめる訳にはいかないだろ？」

気持ちさがさくれている分、少し強い口調になってしまい、ルキ

ウスは軽く後悔した。

「そうだが、勝手に入るのはまずい。何か他に方法を考えよう」

「中がどうなっているか見てくるだけだから。それを元にこれからどうするか決めよう。大丈夫だって、絶対見つからないようにするから。結構得意なんだ、こういうの」

気まずい雰囲気振り切るように明るく言うと、ルキウスはラウドの制止をふりきり、壁の向こう側へ軽々と飛び越えていった。

第18話

リグ・ガレットの屋敷は大まかに母屋と離れに分かれている。塀を越えたルキウスは木陰伝いにそつと母屋へ近づいた。

覗いた部屋は厨房で食事の支度の真つ最中だった。皆忙しく動き回っており、誰もルキウスには気づいていない様だ。

（こんなところには主人のリグはいないよね。…って言ってもリグ・ガレットがどんな顔か分からないんだよな。クワントだからラウドくらいの若い男の人なんだろうけど）

ルキウスは次々に母屋の中を見ていった。若い男の人も何人かいたが、『気難しい』所は全く見られなかったので違うと判断した。

（じゃあ、あっちか）

庭の奥に小さな建物が見える。細心の注意を払いつつ、その離れを目指して一気に駆け抜けた。

窓から中を覗くと、書籍が所狭しと無造作に積まれてある。ルキウスが手をかけると窓は簡単に開いた。

（お邪魔します）

一応心の中でそう呟いて窓からそつと中へ入る。一番初めに感じたのは古い紙の香りだった。厚い本、薄い本と様々あるが、皆こむずかしい本ばかりだ。一通り眺めた後、部屋の奥に扉があることに気づいた。

（一応見ておくか）

中から物音はしない。鍵も掛かっていない。少しだけ扉を開くと、壁一面に何かが貼つてある。中に誰も居ないのを確かめると、ルキウスは静かに小部屋の中へ忍び込んだ。

（なんだこれは？『愛するリグ、あなたの細やかな愛情は…』って手紙？ 何通あるんだろう、壁いっぱい貼つてある）

元の壁の柄が見えない程だった。何通か読んでみたが、全てが相手を思いやる愛情の言葉で占められている。手紙以外は部屋の真ん中に椅子が一つ置かれているだけだ。

（手紙のためだけの部屋なんだ）

ルキウスはなぜか神殿の中にいるような神聖さを感じた。急にここにいてはいけないような気がして、小部屋を抜け出し、元来た窓から外へ出た。

「そこで何をしている」

突然声を浴びせられ、地面に着地したままの姿でルキウスは固まった。

（うわ、みつかった）

ゆっくり顔を上げると、若い男の淡いグリーンの瞳がこちらを睨んでいる。やわらかな細い茶色の髪は広い額の上でくるくると縮れて渦巻いており、口角はこれ以上ない程下がっていた。

「リグ・ガレットさん…ですよね？」

きつと間違いないだろう。ルキウスの想像以上に気難しそうな風貌だった。

「私はお前など一度も見たことがない。ここで何をしている」

威圧的な態度に気おされそうになるのをルキウスは必死に堪えた。

（いつかは会わなければならない人だったんだ。でも、今出会っちゃったんだから仕方がないよね）

ルキウスは正直に言うしかない、と開き直り腹をくくった。

「勝手に入ったのは謝ります。でも、あなたにどうしても聞きたいことがあるんです。マリー・ジョコフがあなたなら分かったと言っていたから…」

「マリーは目覚めたのか。余計なことをいつてくれるわ。早くここから去れ、何を聞きたいか知らんが、私には関係ない」

「お願いします、あなたしかもう頼る人がいないんです！」

ルキウスは必死になって頼んだ。リグの冷たい言い様に心が折れそうになるが、ここで引き下がるわけにはいかない。ニダのためにもマリーのためにも、そしてラウドのためにも。

リグはルキウスの切羽詰った様子に軽く目を見開き、下げていた口端を初めて上げた。

「では、交換条件としよう。おまえは私の好きなものをもってこい。そうしたらお前の望み通りにしよう」

ルキウスはリグの表情の変化に期待したのだが、彼の言葉にすぐ顔を曇らせた。

「…好きなものって？」

「それはお前の考えることだ。教えたらゲームにならんだろう？」

ゲーム！ こちらは真剣に頼んでいるのに。ルキウスは腹が立った。しかしここで怒っている暇はない。

（ラウドはリグが何を好きか知っているだろうか？ 面識がないのだから知らないだろう。またマリーに占って貰おうか？ それだと再びリガルドの町まで戻らなくてはならない）

そこまで考えてルキウスはひらめいた。

（そうだ、一か八かやってみよう）

ルキウスは立ち上がるとリグの前に立った。

「あなたの好きなもの、でしたよね」

そして深呼吸をする。腹の底に懐かしい力が湧いてきた。

「俺…いや、私を良く見てください」

いぶかしむリグの淡い瞳をルキウスはじっと見つめ返す。そのまま時間が暫く流れた。

（駄目かな…）

そう思いはじめた頃、リグの瞳からみるみるうちに涙が溢れだした。

「マイラ…」

そう呟くなり、リグは口を押さえ黙ってしまった。彼の見た『幻影』は多分、部屋の中で見た手紙の差出人だろう。

（昔はこの魔法しかつかえなかったのに）

相手の心の思い出の人を見せる能力。ちからそれがここで役立つとは思わなかった。

リグは暫く泣いた後、ルキウスをそっと抱きしめ、につこり笑った。今までの彼からは想像できないような、子供のように無邪気な笑みだった。きっと元々はこういう人だったのだろう。

「会いたかった、亡くなった私の妻とは。負けだ、お前の望みをきこう」

「ありがとうございます」

望み通りになった事以上にその笑顔にルキウスは心が満たされた気がした。

外で待っていたラウドはリグの使用人に連れられて部屋へ入ってきた。自分の姿を見つけると心配そうな顔に安堵が広がるのが分かり、それでもルキウスは嬉しくなる。

ルキウスはラウドをリグに紹介しつつ何気に見た傍らの使用人の女性に目が留まった。

「もしかして、ナラ？」

ルキウスは驚きを隠せず叫んだ。昔ルキウスの世話をしてくれていた女性で六年前に別れたきりだが、彼女は全く変わっていない。

「ルキウス坊ちゃん？」

ナラも驚いて、持っていた銀のトレーを床へ落とす。石の床に金属音が派手に鳴り響いたがその音さえ耳に入らない様で、ただただルキウスを見つめ続ける。

「そうだよ。よかった元気そうで」

「坊ちゃんこそ！」

ルキウスはリグへと顔を向けた。抱き合わんばかりの二人の喜びようにリグもラウドも驚いた顔を見せている。

「リグさん、ちょっとナラと話したいんだけど、いいですか？ 昔の知り合いなんです」

「ああ。ナラ、今日はもう帰っていい。彼をもてなしてあげなさい。ルキウス、例の話はラウドにしておくから、今日はゆっくり昔話で

もしなさい」

リグは快く許してくれた。ラウドも同様に頷き、ナラは一つ頭をさげるとルキウスを彼女の家へいざなつた。

第19話

「ナラは昔とちつとも変わらないね」

ルキウスは隣で歩くナラの横顔を見て苦笑した。もう子どもの頃のルキウスではないのに昔の様に手を取って歩くのだ。しかし、彼女にしてみれば急にいなくなったルキウスを再び見失わないように、思っているのかもしれない。悪い気は全くしないのでルキウスも久しぶりの感覚を楽しむことにした。

「坊ちゃんは今本当に大きくなりましたね。昔はあんなにお小さかったのに」

感慨深げにナラは言う。確かに、見上げていたはずのナラより少し背が高くなった。

ナラの住まいは町の中心部にほど近いところにあるらしい。町はずれにあるリグの家から徒歩で向かう途中、ルキウスはゆつくりと町並みを眺めた。

「なんか、町の様子変わっちゃったね。ナラに会うまで思い出せなかったよ」

少しだけ見覚えがあると思ったが、やはりルキウスの屋敷が火事で焼けた後にナラに連れられ少しの間暮らした町だった。町にいたばかりの時も思ったが、新しい家が建ち並び、雰囲気は六年前の当時とはだいぶ変わってしまったている。

「ルキウス坊ちゃんが居なくなっってからすぐにこの町は火事にあっ

たんです。町の大半が燃え、私の家も焼けてしまつて。今ではここまでもどりましたけど、町の中心に作られた慰霊碑を見るたびにあの時を思い出します」

「火事？」

ルキウスは体が強張つた。まさか自宅の放火に続いて自分がこの町に来たばかりに被害が及んだのかと思つたからだ。それに気づいたナラはゆっくりと首をふつた。

「落雷です。町中に一本、大きな木があつたのを思えていらつしやらないかしら？　そこに落ちて、あつという間に町に広まつていったのです。成す術がないとはまさにあの事でした」

「大変だつたんだね」

ナラは寂しげに微笑むとルキウスを町の中心の記念碑に連れて行った。石には多くの名前が彫られている

「みな火事でなくなつた人たちなんです」

「え、こんなに？」

驚くルキウスの声に頷き、彫られた名前の一つをナラはそつとなぞつた。

「父です」

「おじさんも？」

彼の大柄で無口だったが優しい笑顔を思い出して、ルキウスは胸を痛めた。

「ごめんね、ナラ」

よかれと思ってこの町を出たが、その為にナラを心配させ、そして一人にってしまった。

「火事は天災ですもの、坊ちゃんが謝ることじゃないじゃないですか。きつと父も坊ちゃんが帰ってきてくれて喜んでいますよ。…なんか話を湿っぽくさせちゃいましたね」

表情を笑みに変え、お腹がすいたでしょう？ とまたルキウスを子供扱いしながらナラは自宅へ向かった。前の住んでいた所とは違い、小奇麗で小ぢんまりした部屋だった。

「ナラは今、ひとりなの？」

「ええ。でも今日は坊ちゃんがいいますから、料理も作りがいがありますね」

そう言っただけで待つこと暫し、出された料理はすべて旨く、懐かしい味だった。

ルキウスが食べるのをにこにこ微笑みながら眺めていたナラはルキウスが食べ終わるのを見届けると、今まで我慢していたのだろう、さっそく矢継ぎ早に質問を始めた。

「坊ちゃん、今までどうなされていたのですか？ ご飯はちゃんと食べてましたよね？ 病気とか、怪我とかなさらなかったですか？

急にいなくなつて、すごく心配したんですからね！ 探しても見つからないし…」

話すうちに感情が抑えきれず目から溢れる涙をナラは袖口でおさえた。

ナラの話口調も少しも変わっていない。昔のように保護者として接する。

「ごめん、ナラ、泣かないで。ご飯もちちゃんと食べてたし、元気だよ」

「坊ちゃんは…」

鼻をすすりながらもまだ何か言いたそうなナラを見てルキウスは苦笑する。

「心配しなくても大丈夫だよ。だって今年で俺は十六だし。もう『坊ちゃん』って呼ばれる年でもなくなっちゃったよ。もちろんそれなりにいろいろあったけど、今ではね…」

ルキウスは一呼吸おく。誰かに告げるのは初めてだが、ナラには聞いて欲しい。

「俺にはすごく大切な人がいる。側にいるだけで満たされる人ができた。だから全然大丈夫だよ」

「坊ちゃん…」

力強く言い切るルキウスの横顔にナラは微笑んだ。しかしそこに

一抹の寂しさが浮かんでいる事にルキウスは気づかなかった。

「だから、もう坊ちゃんはやめてよ。それにね、俺、魔術師だったんだ。まだ正式じゃないけど」

魔術師は地位が高い。ナラが喜ぶと思って言ったのだが、途端に彼女の顔が曇った。

「それは、冗談：ですよ？　一緒に暮らしていた時にはそんな様子はなかったじゃありませんか」

「なんで冗談なんか言わなきゃいけないのさ。本当だよ、魔力のない普通の夫婦から魔術師が生まれる事は前例があつたんだ。それで

……」

ナラはルキウスの話を遮るように腕を掴んだ。顔は苦痛にゆがんでいる。

「坊ちゃん、いえルキウス様。奥様には秘密にしておくようにと言われたのですが」

「奥様って、母さんが？　何を？」

「魔力をお持ちなら、もう間違いありません。あなたの父親はクレル様ではなく、フォゴル・リルツェンです」

ルキウスにはナラの言っている意味がよく分からなかった。フォゴル・リルツェンといえば硬貨に彫られている大魔術師の末裔で、政治への影響力では一、二を争う名家の出身者だ。

なんか、耳鳴りがする。

「フオゴルは奥様の事が好きだったようですわ。それはもうすごい言い寄りようで。でも奥様はクレル様を伴侶としてお選びになった。しかし諦め切れなかったフオゴルはクレル様が留守の間に無理やり奥様を…」

さすがにナラもこれ以上は言葉にすることを憚った。彼女はスカートを握り締めて俯いてしまう。

ルキウスは自然に両手で自分の両腕を抱きしめていた。勝手に体が震えてしまうのだ。

（だから、俺だけ離れで隠れるように暮らさなければならなかったし、父さんもあまり会いにきてくれなかったんだ。それを母さんはいつも謝っていた）

子供の頃の謎が一気に解けた気がした。そしてなぜ自分が魔力を持っていたのかも。

（心のどこかで、無理があると思っていたんだ。普通の人間から生まれた魔道士っていう珍しい例に自分が当てはまるなんて）

一気に体から力が抜けて、ルキウスは床へ座り込んでしまった。ナラも同じように屈み、ルキウスの手をとった。

「魔力がなければ、クレル様の子だ。私はそう信じてお仕えしました。その方が奥様の心の重荷がどんなにか軽くなるでしょう。ルキウス様の容姿は奥様そっくりですし。でも、それは違った」

ナラは少し迷った様子を見せてから続けた。

「フオゴルは多分六年前のあの日、あなたを探しに屋敷へ来たのだと思います。彼は魔力を持った子供が生まれないことに焦りを感じていましたから、もしやと思って来たのでしょう。しかしサラ様はクレル様を父と尊敬している何も知らないルキウス様を体をはって守ったのですわ。火災の原因にフオゴルが関わっているかどうかは分かりませんが、彼を見たという同僚がいるのでほぼ間違いないでしょう」

（夢のなかの男はフオゴルだったんだ）

母は二度の屈辱を受けるなら死んだほうが良いと胸に自らナイフを突き刺した。一度目の屈辱はフオゴルにむりやり犯された事。二度目は…ルキウスが母サラとフオゴルの子と世の中に知られる事かもしれない。

（母さんはそれでも俺を生んで、愛情こめて育ててくれた。あまり一緒にいらなくてごめんね、って謝りながら）

母は本当に優しくかった。微笑めば微笑み返してくれる。手を差し伸べれば優しく抱きしめてくれた。特別ではない些細なことが一番心に残っている。思い出の温かさにルキウスは涙が止まらなくなつた。

（母さんは全然悪くない。それより俺の存在で母さんがどれだけ苦しんでいたのだろう？ 全く気づかなかつた…いや、気づかせないようにしてくれていたのだろう。謝らなければいけないのは俺の方だったのに）

ふと見せていた母の悲しげな表情も理解できた。

「でも…ルキウス様が望むなら、フォゴルの子として名乗りを上げることもできます。そうすれば当代一のクワントの息子として暮らすことができますわ」

ナラは言葉尻を震わせながら言った。口に出したものの、それは彼女の意に沿わない事なのだ。

「俺は、母さんや父さんを殺したフォゴルの世話になんかならない。俺はルキウス・クリスハルド以外の誰でもないし、他の誰にもなりたくないよ」

「坊ちゃん…」

ルキウスが迷わずそう言った事にナラはほっとしたように息を吐いた。ナラは母をあくまでも庇いたいのだ。

ルキウスはナラにひとつ力強く頷いて見せた。

（俺も同じ気持ちだよ。今度は俺が母さんとナラを守る番だ）

そう固く心に決めた。

第20話

リグ・ガレットと一晩話したラウドは翌朝、ナラの家ヘルキウスを迎えに行った。

家から出てきたルキウスにいつもの元気はなかった。ナラという女性はルキウスの昔の知り合いらしいので、夜通し話して寝不足なのかもしれない。

（思えばルキウスの過去は知らない事の方が多いな）

それを寂しいと思った時もあった。しかしリグ・ガレットから『六つ星』の話を聞いた今ではそれで良かったとも思う。今、本音を言えばどうしたらいいのか分からないのだ。ただ一つ言えることはルキウスを巻き込みたくない、それだけだった。

ラウドがリグと共に首都エルクサンドラへ行くことになった事を告げると、ルキウスは一瞬びくりと体を震わせた。

（やはり様子が変だ。…大丈夫か？）

ラウドはルキウスに尋ねる様に首をかしげたが、彼はそれに気づかないかのように馬車に乗り込みリグに挨拶をする。ナラもリグの世話係として一緒に首都へ行くこととなった。

ナラは気の利く女性らしく、馬車の中でリグやルキウスだけでなくラウドにまで細やかな気遣いをみせる。しかも卒がない。

（彼女はリグ同様ルキウスを主人として扱う。昔どこかの屋敷でル

キウスに仕えていた侍女といったところか……)

ルキウスに尋ねるつもりはないのでその推測が正解かどうかは分からないが、ルキウスには良家の気品がある。きっと間違っていないだろう。

ラウドはルキウスに目を移す。『六つ星』について何も知らないナラがいる手前、リグとの話がどうなったのか聞かないのかもしれないが、総じてルキウスは何かを思いつめているように寡黙であった。

首都エルクサンドラまで馬車で急げば一日でつける。夜遅くなっただがその日のうちに到着することができ、リグとナラはリグの息子の家へ、ルキウスはラウドと共に宿屋へ入った。

「何かあったのか？」

やっと二人きりになった頃を見計らってラウドはルキウスに尋ねた。ルキウスは瞳を彷徨わせたが、彼の答えは、別に、であった。

「別に、と答える割には……」

ルキウスはラウドの言葉を遮って話し出す。

「俺のことより、そっちはどうなったのさ？ リグさんも一緒に来たし、なんか『六つ星』について分かった事はあった？」

こういつ時のルキウスは何を聞いても答えないのだ。ラウドは軽く息を吐き頷いた。

「ああ、リグは一度見たものは忘れないという能力の持ち主だ。彼は昔、エルクサンドラの文献保管所で『六つ星』についての文献を読んだ。後にその文章は何者かに持ち去られて行方不明らしいが、リグが見たというのはその文献があることと等しい。必要ならば証言してくれるそうだし」

ルキウスは瞳を輝かせた。

「じゃあ『六つ星』の呪印の解き方がわかったんだね！」

「おそらく分かった。…しかし実行すれば大騒ぎになる。だから迷っている」

「大騒ぎ？ 何するの？」

輝きに好奇心を加えたルキウスの瞳からラウドはそっと視線を外した。

「すまない、まだ今は言えない。もう少しはつきりしたらちゃんと話す」

「そう…ラウドが決めたことに俺は従うよ。だって、俺はあんたの協力者だもん」

ラウドは優しく微笑むルキウスを見つめた。深いグリーンの瞳は光と優しさが溢れている。

（ルキウスも何かを思いつめているようなのにそれを感じさせないようにに振舞って、こちらの心配までしてくれる。できれば今すぐ引き寄せてキスしたいところなのだが）

湧き上がった本能を理性で押さえ込むと、ラウドはルキウスに微笑み返し、先に寝てると告げて宿屋から出て行った。

ラウドはノックをし、厚いオークのドアを開ける。

「お久しぶりです。お元気ですか、父さん」

ラウドの実家、モイア・ダニングの書斎を訪ねたラウドにモイアは椅子を勧めた。

磨きあげられている飴色のテーブルには二つ、飲み干されたティーカップが置かれている。

「先ほどまでリグ・ガレットがここへ来ていてな、リグから大よそ話は聞いた。…大変な事になったな」

リグの記憶する文献には、リルツェン家の存続を図るため、リルツェンの何代か前の先祖が持てる魔術を駆使し、リルツェン家をおびやかす可能性のある魔力の強い子供に『六つ星』の印が浮き上がるようにしたという事が書かれていたとリグは言った。そしてさらに彼は付け加える。

「それをあからさまに殺すのは外聞が悪いからな、『六つ星』を世の中に災いをもたらす者、という噂を流し、今ではその子供を殺すのが慣習にまでなってしまったのではないか」

リグが言ったのは文献の内容と憶測で、『六つ星』を解く完全な方法を語ったわけではない。

モイアは沈黙したままの息子の傍に立った。

「リグの話からすればフォゴルを魔封じすれば六つ星は無くなるはずだ。だが、世間は騒ぎたてるであろう」

ラウドもリグから話を聞かされた時そう考えた。

リルツェン家の存続を図るための呪印ならば、その家の魔術師が絶えることで呪印の意味もなくなるはずだ。今、リルツェン家の魔術師はフォゴルしかない。彼に魔力をもつ子供はいないのだから、リルツェン家はフォゴルを魔封じすれば途絶える。

しかしそれも全て憶測の域は出ない。

ラウドは歯をかみ締めた。

「お前がそのままでも良いというのであれば、私は喜んでお前の父親でいるつもりだ」

モイアの優しい声色にラウドはゆっくりと義父を見上げた。その顔はうそ偽りがなく穏やかであった。

ラウドはクワントの一つ、ステイーヴェル家の出身であったが、六つ星のために殺される運命となった。ラウドを取り上げにきたのがモイアであり、ラウドに魔封じの能力があることに気づいたのもまた彼であった。

まだ赤子だったラウドに不用意に近づいたモイアの部下の魔術師がラウドから魔封じを受けたのがキツカケだった。もちろんラウド

は覚えていないが、悪気があつて魔封じしたわけではない。生まれただけの赤子がいきなり魔力を発動するのも珍しいのだ。

結果ラウドの命を助ける形となったその魔術師はラウドが物心付くまで魔封じされたままの生活を余儀なくされた。魔封じを解いた時の彼の安堵の表情は幼心にも印象的だった。

『六つ星』よりも久しぶりに生まれた貴重な『魔封じ』を重んじて殺す事をやめ、密かに引き取って自分の子供として育ててくれたモイアは政界に重きをなしているので幼少のラウドは一人で過ごすことが多かった。しかし会える時は血の繋がりが無いにも関わらず愛情を持って接してくれていた。

（そう、俺がいる限り、父さんの血を受け継いだ魔術師がいなくなってしまう）

魔術師に生まれる魔力を持った子供は一人だけだ。魔力をもつ子供が二人になればどちらかが実の子供でないことが分かってしまう。顔には出さないが、自分の魔術師の血が絶えることを悲しんでいるかもしれない。

（俺の首筋から六つ星を消せば俺はステイヴェル家に戻れ、父も魔力あるわが子が持てる。フォゴルに魔封じを……しかし、失敗したら、俺は死ぬだけだが、父さんに後々迷惑がかかってしまう）

ラウドはどうしたらいいか、何がしたいのか分からなくなってきた。

（俺がいなくなれば実家のステイヴェル家にもダニング家にも迷惑がかかることはない。魔封じだってヴェルマの能力があればいな

くてもいい。世の中、現状のまま何事もなく回っていくのだろう。それでは、…俺は何なのだ？」

力なく首を振る息子を見かねたのか、モイアは側に寄り、ラウドの肩に手を置いた。

「お前がいなくなれば悲しむ人は多い。私もそうだし、友達の実白な変わり者も悲しむだろう。…神が仰る通り、最後に残るのは真実だけだ。お前の信じる道をいきなさい。後悔しないように。それが私の願いであり、ただ言えることだ」

モイアはさらに手に力を込めた。短めの指だが、力強く温かい。

（ありがとう、父さん）

ラウドは心に決めた。自分の考えが正しいかどうかやってみようと。迷いが無いといえば嘘になるが、それが今の自分の正直な気持ちだ。そしてそれは一人で実行する。その考えはリグの話を聞いた時からあったのだろう、実家であるモイアの屋敷ではなく宿屋にルキウスを泊まらせたのは、これから起こるだろう一連の出来事に巻き込みたくなかったからだ。

「まずフォゴルに六つ星の解き方を尋ねてみます。それで、お願いがあるのです。立会人になっていただけませんか？」

話の流れ上、六つ星持ちであるということは明かさねばならないだろう。フォゴルは政界の重鎮で、ラウドは魔封じであると同時に六つ星持ちだ。どう話し合いが進むかはわからないが不測の事態が起きた時、ラウドに明らかに分が悪い。

ラウドの思惑を読み取ったモイアは頷くと、はたと動きを止めた。

「もう、六つ星持ちだということは明かすつもりなのだろう？」

「はい」

「ではクワントで評議会を開こう。ラウドが生を受けて二十数年、何も世を滅ぼすような事柄は起こらなかった。もうそろそろ六つ星の呪縛から皆を解いてやらねばならぬ。七日後ならクワントも全て集まれるだろう。それで、いいかな？」

モイアは頷くラウドの肩をひとつ叩くと指示を出しに部屋を出て行った。

（七日後……。評議会の結果はどう転がるか分からない。もしかしたら俺は生きて帰れないかもしれない。だから七日間だけ、ルキウスと心安らかな時間が過ごしたい。その後はルキウスを自由の身によろ。だから七日間は俺にくれ）

身勝手だとは思うが、身勝手ついでにルキウスには評議会の事は内緒にしておこう。知りたがりのルキウスは怒るかもしれないが、先の見えない結末にもうルキウスは巻き込みたくない。

ラウドはモイアの屋敷を出て一人、先の不安と目前の楽しみの綯い交ぜになった気持ちを抱えルキウスの待つ宿屋へと歩いて行った。

第21話

首都のエルクサンドラに来て五日間。ルキウスはラウドと毎日のように出歩いていた。

（有名な時計台でしょ、噴水が綺麗な広い公園に高台の丘の展望台、彫刻の素晴らしい神殿…）

子供の頃、エルクサンドラに住んでいたが、ルキウスは全く表に出してもらえなかったので、見るものすべてが新鮮で楽しかった。人々がこぞって行く所には訳があるのも分かった。

（それに、隣にラウドもいるしね）

楽しいと思うのはそれが一番の理由だと思う。ラウドはエルクサンドラの街を知り尽くしているようで、高級な所から雑多な場所まで迷いなく道案内をしてくれる。しかし流石に六日目ともなるとルキウスも心配になってくる。毎日こんなに遊び歩いていいのだろうか？

「ねえ、六つ星の話ってどうなったの？」

ルキウスの問いに振り返ったラウドはただそつとほほ笑んだ。

「まだ、いいんだ。それよりせっかく文化の中心地エルクサンドラに来たんだから楽しもう。それとも連日出歩いて疲れたか？」

ラウドがいいというのなら、大丈夫なのだろう。

「疲れてないよ。今日はどこにつれていってくれるの？」

「行けばわかるさ」

出かける時、ラウドが行き先を言わないのはルキウスを驚かせた
いかららしい。見た目飄々として大人びた印象の彼だが、時折みせ
る子供っぽい面もルキウスは好きだった。

大分地理も分かってきたつもりルキウスだったが、さすがは広
い首都、今日は今まで歩いてきた道ではないらしい。たわいのない
話をしつつ見知らぬ石畳みの路地をいくつも曲がる。

「ここだ」

ラウドが指さした先にルキウスは驚きの表情を隠せなかった。

「テーラ ロキシス…」

「ルキウスが前、服の生地を首都から取り寄せていたって話してた
だろ？ 全国的に有名で腕がいい仕立て屋はここだから、ここで生
地を取り寄せていたんじゃないかと思って」

「…うん、そうだよ」

この建物はルキウスも知っていた。それはルキウスの昔住んでい
た屋敷から見えたからだ。身なりのいい人々が入っては出ていく様
を窓から見ていたルキウスはナラにロキシスは有名な仕立て屋だと
教えてもらったのだ。

「坊ちゃんの着ている服の生地もあそこからきているのですよ」

そう言われて外とのつながりを初めて強く感じたのを覚えている。だから地方にいた時もここで生地を取り寄せたのだが、逆を言えばここ以外の仕立て屋は知らない。

（ということは、俺の住んでいた屋敷がどこら辺にあるか分かるってことだ…）

高台から見降ろしてこの店が見えたのだ。

おもわず駆け出したい衝動に駆られたが、思いとどまった。ラウドは自分が都長クレル・クリスハルド家で育ったことを知らないのに変に思われるだろう。

ラウドに過去を聞いて欲しい。その思いが急に心を占めた。だが、話せは自分がクレル・クリスハルドの子ではなく、フォゴル・リルツェンの子だということを話さなくてはならない。

（母さんの名誉の為にそれは話せない）

ルキウスは知らぬ間に握りしめていたこぶしを緩めた。一人の時に見に行こう。どうせ行くのなら母の好きなバラを買っていくのもいいかもしれない。

気づけばラウドが心配そうにこちらを眺めている。

「ここで、ルキウスに服をプレゼントしようと言ったが、他の所がいいか？」

ラウドの言葉を全く聞いていなかったルキウスは苦笑を浮かべた。

「ありがと。買ってくれるなら、ここがいい」

さすがに有名な仕立て屋だけあり、生地の種類は豊富で心惹かれる柄が多々あった。店の主任はラウドがどういう人物か知っており、金銭的に問題はないことが分かつているのだろ、ルキウスに付いてまわってどんな質問も笑顔で親切に答える。

ようやく選んだ生地を見てラウドはまた黒か、と笑ったが、好きな色なのだから仕方がない。少し緑がかった滑らかな黒色はルキウスに一番よく合う色なのだ。

服の形は店のカタログから選んだ。

「ボルドーの生地をアクセントに先ほど選んだ黒色の下から覗かせたらいかがでしょう？」

主任が持ってきた赤い生地を添えることで先ほどの黒い生地がさらに美しさを増した。ルキウスはその配色に心奪われてしまったのだが、実際支払うのはラウドなのだ。

「ラウド、いい？」

いつにないおねだり口調にラウドも苦笑は見せたもののすぐ頷いてくれた。

「ようございましたね。それでは採寸いたしましょうか」

主任の言葉を合図に専門の採寸師が静々と奥から出てきた。三人ほどがルキウスの周りに立つと手早く体の到る所を図って行く。ル

キウスはされるがままだったが、嫌悪感は全くなく、むしろ店での一連の流れは優雅で上品で心地よかった。

楽しい時間はあっという間に流れ、店を出るころには昼も少しすぎていた。

「何か腹にいれるか」

そう言って歩き出した二人に駆け寄る一人の少年がいた。

「ラウド様。宿にいらっしゃらなかったたので宿の主人に聞いてきました」

ラウドの父モイアの元で仕えているこの少年は年相応の小奇麗な身なりをしている。

「何があった？」

ラウドの問いに少年は急いで息を整えた。

「旦那さまが明日の事についてお話があるそうです。急いでお屋敷までお越しく下さい」

明日の事とはなんだろう。ルキウスはラウドの顔を見上げたが、その横顔は少し硬さを持っているように見えた。

「わかった。すぐ行くと伝えてくれ」

承知しました、と少年は頭をさげ、隣にいたルキウスにも気づくと頭を下げた。なかなか躰が行き届いている。彼はまた再び走り去

っていった。

「すまない」

「別にいいよ、仕事でしょ？」

「そつだ。だが、宿までは送ろう」

返事があるまでの少しの間が気になったが、先に歩き出したラウドをルキウスは慌てて止めた。

「たぶん一人で帰れると思うから、もうすこし街を見て帰るよ。ラウドの仕事が終わって宿に帰ってきた時、俺がいなかったら迎えに来て。ラウドの能力なら簡単でしょ？ 二度も逃げる俺を見つけたんだから」

その言葉にラウドは苦笑する。

「そつだな。では気をつけて行けよ」

「ラウドもね」

足早に歩き出すラウドの背中を見えなくなるまで見送ったルキウスは再び先ほどまでいたテラーロキシスの店内へ入る。店主は先程と変わらぬ営業的な笑顔でルキウスを迎えてくれた。

「あの、聞きたい事があるんですけど。このあたりに……クリスマスハルド家ってありましたよね」

店主は少し小首を傾げた。

「昔、首都長をされていた方ですか？ ええ、ございましたよ。うちもそのお屋敷に出入りしてありましたからよく存じております」

「そこに行きたいんですけど…」

ルキウスの言葉に店主は少し困惑の色を見せた。

「ご存じかどうか知りませんが、クリスハルド家は火災にあったのです」

よく知っているよ、とルキウスは心の中で呟いた。

「火災の後、瓦礫は奇麗に取り除かれましたがその後まだ何も建物がたっていないのです。最近では減りましたが首長を慕ってまだ献花に来る方もいらっしゃいます」

父がそれほど慕われていたかと思うとルキウスは嬉しくなる。と同時に本当の父親であつたらどれだけよかったかとも思った。

「その場所教えてもらってもいいですか？ それと花屋の場所も教えて下さい」

このあたりに住んでいたはずなのに全く何があるか知らないのだけれど、しかし店主は快く二つの場所を紙に書いて渡してくれた。更に場所がわからないのなら人をつけましようか、とまで言ってくれた。それは丁寧に辞退したが、この辺りの気配りが人気になる仕立て屋の秘訣かもしれない、とルキウスは思った。

紙に書かれた通りの道順をたどり、花屋で真つ赤なバラの花束を

見繕ってもらった。それを抱え向かったクリスハルド邸の外壁はまだ残っており、一見普通の邸宅と変わらないようだ。だが、いったん敷地内に入るとテーラーの店主が言うとおり建物と言えるものは殆どない。入口付近に残っている炎の熱で曲がった門の鉄柱の元には新旧あるものの、いくつかの花束が置かれていた。

「本当に、全く変わっちゃったんだ…」

ルキウスはゆっくりと中へ進んでいく。

「確かここが玄関だから、あっちが広間か」

初めてヴェルマをみた広間。就任祝いの時はあんなに人が多く華やかだったのに、今では全く見る影がない。

幼いころ過ごした離れの屋敷も延焼で燃えたのか建物はなかった。昔は母屋とともに離れていると思ったが、今再び歩いてみるとそれでもない事に気づいた。

離れの隣には母が大切にしていたバラ園があった。いつも手入れが行き届き良い香りを漂わせていたが、今では誰も顧みるものがなく雑草が生え放題で、その中に昔の名残でバラの花が所々顔をだしている。

母との思い出深いこの庭にルキウスは花屋で買ったバラを母や家族の為に手向けた。

思い出とのあまりの変わり様に急に虚しさを覚えたルキウスは一人しやがみ込むと嗚咽をかみ殺して一人泣いた。自分の所為で賑やかだったこの場所が廃墟になってしまったのだ。母が自ら命を絶つ

た場所。父や兄もルキウスと関わったせいで亡くなった。もしかしたら自分の事を恨んでいるかもしれない。

「…ごめん、なさい…」

何度も何度も声に出して謝った。

「坊ちゃんが謝ることは一つありません」

背後からそう声がしたが、ルキウスは顔をあげなかった。声からナラだとすぐ分かったからだ。

「そんな風にメソメソされていたら、天国の奥様が心配なさいですよ」

ナラは口調とは裏腹に優しくルキウスを立たせた。ハンカチを取り出すと頬を伝う涙をぬぐってくれた。昔はナラだけに泣き顔をみせていたが、今ではもう一人見せてもいい相手ができた。ラウドだ。二人の存在はルキウスの中ではとても大きい。そう考えるとルキウスは悲しい気持ちが治まってきた。

「よくここにるのが分かったね」

やはり、少しは気恥ずかしさがこみあげてきて、照れ隠しに尋ねた。

「坊ちゃんちからの宿に向かおうとしたら、丁度ラウド様に会いましてね、彼の能力で坊ちゃんちからの居場所を探していただいたのです。どうしてもお伝えしたいことがありましたから。それで花屋付近にいると教えられたのですが、場所が場所だけにこちらにみえているのではな

いかと思ひまして」

やはりいらっしやいましたね、とナラは微笑んだ。

「伝えたいことつて、何？」

わざわざ探してまで来たのだ。きっと大切な事に違いない。ルキウスは少し緊張した。

「明日の事です」

明日、何があるのだろう。ラウドも『明日』の事でモイアに呼ばれて出かけて行った。

「明日、何かあるの？」

「ご存じないのですね。旦那さまもそうではないかと仰っておいででした」

「リグさんが？」

「ええ。明日全てのクワントを招集して評議会がおこなわれるそうです。議題は…」

ラウドとモイアとリグ。この三人がそろえばあの話題しかないだろう。

「六つ星の事？」

「そうです。明日の朝、旦那さまの屋敷にきていただければ旦那さ

まが坊ちゃんをその評議會の内容が聞けるように取り計らってもよいとおっしゃっているのです」

クワントの評議會で『六つ星』について話し合われるのだ。もしかしたら明日、ラウドの首筋から六つ星の呪印が消えるのかもしれない。

（でも、どうしてその事をラウドは俺に知らせてくれないのだろう）

クワントではないからルキウスは参加できないとしても、評議會の事は教えてくれてもよさそうなものだ。

「リグさんは俺を評議會へ参加させてくれるの？」

「参加は難しいですが、他のクワントには内密に隣室で話が聞けるくらいはできるそうです。…それよりどうして評議會への参加を坊ちゃんにお許しになるのでしょうか。もしかして、旦那さまは坊ちゃんがあの方ゴルの子だと知って…」

ルキウスは強い視線でナラの話を遮ぎった。ここは母の最後の地、フォゴルの話など聞きたくないだろう。

「それは知らないと思う。六つ星の評議會に参加させてもらえるのは、俺とラウドが協力して六つ星の謎を解くために動いているからなんだ。六つ星の手掛かりを求めていたらリグさんにたどり着いたからね、俺にも六つ星について知る権利があると思ったんじゃないかな」

そう、六つ星について知る権利はあると思う。そのためにラウドはルキウスに魔封じまでして仲間に引き入れたのだ。それに、自分

でもラウドの協力者という自負がある。

（俺の事、まだ信用してないのかよ）

ルキウスは腹を立てたがすぐ冷静さを取り戻した。もしかしたら、今日、これから話してくれるかもしれない。明日までにはまだ時間があるのだ。

（きっと、言ってくれるよね）

ルキウスはラウドの言葉を待つことにした。

第22話

ナラに宿屋まで送ってもらったルキウスは一人ラウドの帰りを待っていた。

夕食の時間が過ぎてもラウドは戻らず、仕方なく一人で食べて再び部屋で待った。ベッドに腰掛け、心もとなげになかなか開かないドアを見つめ続ける。

（明日の評議会で六つ星に決着がつくのかな）

よく考えればルキウスはリグ・ガレットの証言内容を知らない。ここ数日間、ラウドは六つ星の話を避けているように見えたのでルキウスもあえて触れなかった。

リグの証言だけで大丈夫なのだろうか？ 評議会に参加するクワント達の前で、ラウドは自分が六つ星持ちだということを話すのだろうか？

思いに耽っている中、廊下で物音がした。慌ててルキウスはドアへ駆け寄り、思い切りよく扉を開けた。

「遅いじゃん、ラ…」

ルキウスの言葉は尻すぼみになる。ドアの向こうにはラウドではなく、昼間見たモイアに仕えている少年が目を見開いてこちらを見ていたのだ。

「…ごめん、驚かせちゃったね」

少年はルキウスの謝罪に軽く首を振り、笑顔をみせる。その屈託のない笑みにルキウスも自然とほほ笑み返してしまう。

「ラウド様からの伝言をお伝えに参りました」

「な、何て？」

先ほど浮かべた笑みはどこかへ吹っ飛んでしまった。必要としてくれるなら何所へでも行くし、何でもする。しかし、伝言はルキウスをただガツカリさせるものだった。

「今日は帰るのが遅くなるから先に休んでいて欲しい、との事です」

「…それだけ？」

「はい」

落胆が顔に出ていたのだろう、少年の顔にもルキウスの感情が伝播してしまい悲しそうだ。ルキウスは慌てて笑顔を作りなおした。

「えっと…君は」

「ユーリ、と申します」

「伝えてくれてありがとう、ユーリ」

濃いブラウンの髪に同じ色の瞳。その瞳は興味深げにルキウスを見つめている。少しくすぐったくなってきた。

「俺がそんなに珍しい？」

冗談めかしていったが、ユーリは慌てて首を大きく横にふった。

「すみません。そう言うわけでは決してありません！ でも…ラウド様から聞きました。ルキウス様は一般人の両親から生まれた珍しい魔術師なんですってね」

ここ最近忘れていたが、ラウドにはそういう身の上話をしていたのだった。いや、ラウドに会ったばかりの頃は本当の父親がフオゴルとは知らなかったのだ。

どちらにしても本当のことは話せないのです、自分の嘘に最後まで責任を持って付き合わなければならぬ。

「やっぱり珍しがっていたんだ」

「ごめんなさい、いえ、あのっ」

ユーリは焦って何を言っているのか分からなくなっていた。ルキウスはユーリが憎めず声を立てて笑った。

「別にいいよ。でも魔力があるって気づいたのはごく最近だから、まだ手の甲に魔術師たる太陽の紋章もないんだけどね」

ルキウスの話にユーリは目を輝かせる。

「いいなあ、私も遅咲きでいいから魔力に目覚めたりしないかなあ」
やはり魔術師はあこがれのようだ。ラウドを助けられるのは強い

魔力を持っているからだ、その強い魔力はクワントであり、母のかたきでもあるフォゴル・リルツェンの血を引くからで、ルキウスはその葛藤に日々悩まされ続けている。

ユーリと別れ、ルキウスはまた一人部屋に戻った。もうドアを見ているもラウドは帰ってこない、ルキウスはすることもなくベッドに横になった。

「とうとう話してくれなかったな…」

自分以外誰もいない広い部屋にその言葉は寂しく響いた。

ルキウスはコッドを手繰り寄せるときゅっと抱き締めた。六つ星を解くための協力者のつもりでいたが、何一つとしてラウドの役に立った気がしない。だが、自分はラウドに出会って大きくかわった。まず、いろいろな魔法が使えるようになった。

それより一番大きな変化はラウドを好きになった事だ。

相手のために真剣に考え、自分を顧みず身体が勝手に動いてしまう。そんなことは今までなかった、ルキウスは戸惑い、素直に自分が出せなかった。

ラウドが今回、評議会について何も言わない理由はもう分かっている。実力がないからではない。信頼されていないからでもない。ラウドはルキウスを六つ星という試練から切り離そうとしてくれているのだ。

ラウドはいつも優しかった。それをルキウスは誰よりも欲していたのに、自分の作った枷^{かせ}で遮ってきた。

ラウドの事を愛しているのなら、彼を信じて何も聞かず、何も言わずに『明日』という日を過ごすべきなのかもしれない。

（ラウドがそう望むのなら、そうしよう）

自分にそう言い聞かせ、ラウドの伝言通りルキウスはベッドに横たわると目つぶった。

あまり深くは眠れない。短い夢を見ては目覚める、その繰り返しだ。そしてその夢は全て意味が分からないものばかりだった。

何度か目の夢から醒めた時、ドアが静かに開く音が聞こえた。ベッドの中にいたが、ルキウスにはすぐに分かった。

（ラウドが帰ってきた）

ルキウスはすぐには起き上がらなかった。ラウドには何も聞かない事にしたのだ。もう少したってから目覚めたふりをしようと思う。ルキウスは明日の評議会について何も知らない事になっているのだから。

ラウドの近づいてくる足音が聞こえ、傍らに座る振動を感じた。

「ルキウス……」

暫くしてからラウドはそう呟くと、ルキウスの髪をなでた。何度も、何度も。

優しい手つきにルキウスの鼓動が嬉しさで早くなるのがわかった。

（一言いつてくれたら…）

『好きだ』でも『愛している』でもいい。わかりやすい言葉で欲しかった。

しかし、その願いは叶わず、ラウドは立ち上がると再び外へ出て行った。

戸が閉まり、ルキウスは胸騒ぎに襲われた。今までこんなことはなかったのに、どうして急に触れてきたのだろう。どうして再び出て行ってしまふのだろう。

（やっぱり明日、何かあるんだ）

思い至った答えに、ルキウスは跳ね起きた。

重大な何か。ラウドは今までルキウスに触れないという約束を頑なに守って来た。それなのに、禁を破ってまで急にルキウスに触れてきたのだ。

（俺はラウドの役に立ちたいと思っているのに、どうしていつも置いていくんだよ）

ルキウスの心中にもどかしさが湧きあがる。

（もう何もせずに明日という日を過ごすのはやめた）

すっかり目が冴えてしまったルキウスだったが、ベッドからは出なかった。明日、いや、もう時間的に今日だが、何があるか分から

ないので体力を温存しておきたかった。

まんじりと夜明けを過ごし、ルキウスは服を着替えると宿をでた。ひんやりとした空気の中、ルキウスは黙々と石畳を歩く。いくつかの路地を抜け、首都エルクサンドラの中でも広大な屋敷の鐘を鳴らした。

「おはようございます、ルキウス様。旦那様がお待ちです」

応対に出たナラに連れられ、ルキウスはリグ・ガレットの屋敷へ入って行った。

第23話

思ったより広い部屋だった。

リグ・ガレッドがルキウスのために用意してくれた部屋はちょうどクワントの評議会が行われる部屋の真隣にあり、しかもご丁寧に覗き穴まで作られている。

（怖っ。いつも誰が覗いているんだろう）

しかし今回ばかりは有り難かった。さっそく穴を覗いてみるとまだ部屋には誰もおらず、重厚そうなツヤツヤのテーブルと等間隔に並べられた椅子が見えるだけだった。

始まるなら早く始まってほしい。始まらないなら永遠に始まらないでほしい。

何が起こるか分からないこの待っている時間が苦痛で仕方がない。

（もしかしたら簡単に六つ星の原因が分かるかもしれないじゃん）

一生懸命楽天的に考えてみるが心の胸騒ぎは収まらない。不安と闘っていると、隣から数多くの足音が聞こえてきた。クワント達が部屋に入ってきたらしい。

ヴェルマは髪を掻き上げつつ入口に近い椅子にすわった。リグは部屋の奥にすわり、こちらに顔を向けると軽くだが頷いて見せた。ルキウスがここにいることを知っているので、彼なりに励ましてくれたのだろっ。後は知らない人だが、みな魔力の高いクワントばかり

りなので、見た目に若い青年や少女ばかりだ。

次々に席が埋まり、最後に背の低い優しそうな顔立ちの男性に連れられたラウドが神妙な面持ちで部屋に入ってくる。ルキウスは不安げに彼の姿を追った。ラウドの姿にヴェルマも珍しく驚いた表情を見せ、ラウドの背中を見ている。

「それではクワントの臨時議会を始める」

ラウドの前を歩いていた青年が仕切り役のようだ。すぐにクワントの一人から声が上がった。

「何故クワントの評議会に参加できない者がここにいるのだ、モイア？」

ルキウスは自分の事かと思わず覗き穴から顔を引いた。しかし、ルキウスの事ではなく、ラウドの事を言っただけらしい。

「彼にはここに居てもらわねばならない」

進行役の青年はモイアというらしい。モイアは静かにそう言うのと、辺りを見回した。

「今日の議題は『六つ星』についてだ」

モイアの言葉にまたクワントの一人が机を叩いた。

「そんなことでわざわざ我々を呼んだのか？ もう六つ星については何度も議論し尽くしたのではないか」

「確かに何度も話し合い、何も変わらなかった。だが、今回は違う。そのためにわざわざリグ・ガレットにお越しいただいたのだ」

「ほう、何か新しいことでもわかったのかな？」

ルキウスに背を向けて座っているクワントがリグの方を眺める。静かな声だが威圧的な感じがした。モイアは室内が静かになったのをかわきりに話を続けた。

「貴賤問わず六つの痣をもつ『六つ星』と呼ばれる子供は殺されてきた。六つ星は世の中に不幸をもたらす者として考えられていたからだ。だがそれは間違いであった」

「間違いとはどういうことだ？」

モイアはラウドに一步前へ進むように促す。ラウドは少し顔をこわばらせながらもその通りにした。

（ラウドの首の呪印をみんなに見せるんだ）

ルキウスもラウドと同じように顔をこわばらせる。

「私の息子、ラウドだ。彼は魔封じとしての能力を持って生まれたが、同時に六つ星の痣を持って生まれた」

モイアはラウドの首筋を隠す襟を少し下げ、綺麗に並んだ六つの円の呪印をクワント達に見せた。もちろん部屋内のクワントからは驚きとどよめきが起きる。

「彼が生まれてすでに二十数年。世の中を滅ぼすような災害は何も

起きなかった。立派な証明になると考えられる」

「これから起きるかもしれないじゃない」

女性のクワントがおびえた声でいう。やはり、長年にわたって信じられてきた『六つ星』の呪縛は簡単に解けそうにない。

「起きないのだ。詳しくはリグ・ガレットに聞いて欲しい」

静かに立ち上がったリグに皆の視線が集まる。ルキウスも何を言うのか固唾をのんで見守った。

「語ってもいいかな？ フォゴル・リルツェン」

ルキウスはリグの出した名前に心臓が止まりそうになった。

（そっか、クワントの集まりだからあいつもいたんだ！）

ラシルの六つ星の事ばかり気にかかって全く思い至らなかった。どれがフォゴル・リルツェンだろう。止まるかと思つた心臓が、今度は早く打ち出した。

「何故私に許可を取るのかな？」

ルキウスに背を向けて座っていた男が答えた。彼がフォゴル・リルツェンらしい。

（あいつが母さんを苦しめた男）

しかも、ラシルの『六つ星』にも関わっているようだ。ルキウス

は思い切り拳を握りしめた。そうしなければ自分がどう動くか分からない。

「ラウド君。『六つ星』持ちで、今までよく生きてこられたな」

フォゴルの声は低音で深みがある。

「周囲の人々に恵まれましたから」

初めてラウドは口を開いた。そしてかすかに微笑んでいた。

「そのようだな。それで、お前がただ私に『六つ星』を見せにきたわけではなからう。ここに来たということは、私を魔封じするのかな？」

「できればたくありません。六つ星の解き方を教えていただきたい。六つ星について調べているうちにあなたにたどり着いた。たぶんあなたにしかこの呪印は解けない」

「何を根拠に…知らんな」

しらばくれるフォゴル・リルツェンの乾いた声に、ルキウスの中の何かが切れた。

激しい轟音と共にルキウスと会議室を隔てていた壁に穴があく。抑えきれない気持ちが勝手に魔法となり、壁を破壊していた。

「ふざけんな、フォゴル・リルツェン！」

突然の破壊音と見知らぬ乱入者に時が止まったかのように周りの

人々は止まり、ルキウスだけがフォゴルへ猛然と向かっていく。

ルキウスをはじめは驚きの表情で見ていたフォゴルだったが、口端を挙げて笑った。

「とりあえずラウド君とは二人きりで話す必要があるようだ」

そう言うときフォゴル・リルツェンはラウドのケーブルの端を掴み、何かを小声で唱えた。途端にフォゴルとラウドの体が光り出し、体がゆがんだかと思うと透け始めた。ルキウスの乱入に乗じてどこかへ場所を移すようだ。

（フォゴルも空間移動ができるのか。でも行かせない！）

ルキウスは慌てて手を伸ばし、フォゴルの服の端をつかんだ。

同時にルキウスの体も透け、しゅっという音を耳元で聞いた次の瞬間には見知らぬ広場に飛ばされていた。

第24話

フォゴル・リルツェンの瞬間移動の魔法で飛ばされたルキウスは地面に転がっていた。着地した時に軽く頭を打ったようで少しくらくらする。

「大丈夫か？」

声に反応して瞳を開いてみるとラウドが心配そうにこちらを見下ろしている。

「うん。ヘーキだよ」

「無茶をするな！」

ラウドは驚きと怒りを隠せないようだ。

ルキウスは口を開こうとしたが、ラウドは素早くルキウスを立たせると自分の後ろにかばう姿勢をとった。いつも守られてばかりな気がする。

「…ごめん。でも俺は『六つ星』の協力者のつもりだったんだ」

背中ごしにルキウスは呟いた。ラウドは知らないから仕方がないが、『六つ星』以外にもルキウスはこの戦いに参加する理由は十分にあるのだ。ラウドは少し離れた所に立つフォゴルから目を離さないままだが、ルキウスの手をきゅっと握った。

「すまない。ないがしろ蔑にしたわけではないんだ」

「知ってるよ」

わかっている。しかし、ここまで来てしまった以上もう引くことはできない。ラウドはもう一度ぎゅっとルキウスの手を握った。

「なんだ、その乱入者はラウド君の知り合いなのか。なかなか手荒な子のようなが」

余裕ある言いようだったが、フォゴルも警戒は解いていない。

「手荒な事は望みません。ただ、六つ星の解き方を教えていただきたいだけなのです」

「先程と答えは変わらん。知らん、だ」

「それでは仕方ありません。これ以上罪のない子供が死ぬのを見てられない。あなたに魔封じを施します」

ラウドの言をフォゴルは鼻で笑う。

「綺麗事だな。もう『六つ星』持ちという非難の視線に曝されるのが怖くて嫌だ、と言えはまだまだかわいいものを。予定外な者も一人いるが…受けて立とう、来なさい」

きっとラウドと二人で戦うために場所を移したのだろう。いつまでもラウドの背に隠れてはいられない。ルキウスはラウドの隣へと並んだ。

（母さんの仇、ラウドの敵。そして俺の本当の…）

はじめて間近でみる実の父親。整った顔立ちで、品のよさの中にも男らしさを失っていない。しかしこんなに早く彼に対峙する日が来るとは思わなかった。

（瞳は…父親ゆずりだったんだ）

ルキウスと同じ深いグリーン。この瞳をルキウスは愛していたが、母はこの瞳を見るたび苦しんでいたに違いない。

母を死に追いやった男。それに、ラウドの敵は自分の敵だ。それはかなり前から心に決めてきた事だ。それが自分と血を分けた者になるとは思わなかったが。

ルキウスは手のひらに気を集中させると、すばやく回転する風の塊を投げつけた。ラウドに何かいわれる前に強制的に戦闘へ自ら入っていた。

（復讐…？）

ふとその言葉がルキウスの心によぎった。ヴェルマから昔聞いた話によると、フォゴルは随分いい歳のようだ。ラウドの魔封じを受けるとガロンの様に消えてしまうのだろうか。

（母さんを殺し、ラウドを苦しめ続けた男だ）

気持ちを奮い立たそうと何度もそう思うのだが『復讐』という言葉の重さに急に身がすくんだ。母への愛し方を間違えたかわいそうな男。その男とこれから命のやり取りをするのだ。母はそれを望むだろうか？ その現実には気づかず、自ら勢いで戦いに入ってしまった

たことをルキウスはようやく認識した。

「随分威勢がいいな」

ルキウスの心内を知らないフォゴルはそう言うのと、ひらりと攻撃を避け、二人から距離を取ったところに着地した。

「では、こちらからもいかせてもらおうか」

差し出して広げた手から炎が飛び出る。まるで狙いを定めた蛇のように音を立てながらこちらへ向かってくる。ラウドは動けないルキウスを抱えると横へ飛んだ。背中に炎がかすったが、いかなる魔法攻撃もラウドには効き目がないので怪我ひとつ負わない。我に返ったルキウスは、転がった態勢から魔術で水を出し、フォゴルの炎で燃える木々の火を消した。

（火を消さないとな俺が足手まといになってしまう。でも、今なら消せるし、大丈夫）

ルキウスは震える自分に言い聞かせた。

「俺から離れるな、間合いに入る。お前の援護が必要だ」

そう囁き、ラウドはルキウス立たせると、隣に立ちフォゴルを睨んだ。ルキウスが見上げると、ラウドは力強く頷いた。

ラウドの様子に、今までの憂いが綺麗に晴れた気がした。自分がフォゴルの息子であることを認めた上でラウドについていくことを決めたからだ。

（もう、迷わない）

そして認めてくれたからには絶対役に立つ。ルキウスは改めて気を引き締めた。

自然と体の震えも止まっていくな。

「いくぞ」

ラウドはルキウスをフォゴルの魔術から庇いながらも彼へと近づいていく。ルキウスはフォゴルが逃げないよう、行く手を阻むように魔術を繰り出した。

（追い詰めた。でもあっけなさすぎる）

逃げ場のない一角にフォゴルを誘い込むことに成功した。しかし彼の表情は変わらず冷静である。ルキウスにはそれが不気味だった。

ラウドの右手が緑色の閃光を放ち始める。同時にフォゴルは左の手のひらを差し向けた。そこから勢いよく飛び出したのは今まで出していた魔術ではなく、単なる砂であった。

ラウドは砂をよけるように少し顔を背ける。

そのために隙が生まれた。

「先祖の苦勞を無駄にするわけにはいかないのですね」

フォゴルの顔に不敵な笑みが浮かぶ。

（あぶない！）

咄嗟にルキウスはラウドを突き飛ばした。フォゴルの右手に光るものが見えたからだ。

「っっ…」

ルキウスのわき腹に熱いものが走った。ナイフがかすったらしい。しかしそれに構わずルキウスはフォゴルの腕を掴む。

（今まで魔力しか使わず、わざと追い詰められた様に見せたのはこの時を狙っていたからだ。フォゴルはラウドの弱点を初めから知っていたんだ）

腕を掴まれたフォゴルは、空いている左手を振りかざし、指先に光を集め始めた。

魔術はラウドと違い、ルキウスには十分効果がある。しかし、フォゴルの腕は振り上げたまま降りてこない。ルキウスが必死に腕を掴みながら見上げたその顔には驚愕が浮かんでいた。

「お前の相手は俺だ」

ルキウスに氣をとられたばかりに、今度はフォゴルに隙が出来た。ラウドはそれを逃さず、フォゴルに魔封じを施した。緑の光がフォゴルを包む。

「…ラ…」

ガロン・マクバークと同じようにフォゴル・リルツェンはさらさ

らとした砂と化し、風と共に消えていった。その時、ルキウスは確かに聞いた。フォゴルは最後に母の名前、『サラ』といって消えたのだ。

（俺が母に生き写しと言うことに気づいたのか、夢中で知らない間に出た『幻術』でフォゴルが母の姿をみいだしたのか、今となっては分からない）

ここでもまた母に助けられた気がした。

今までつかまっていたフォゴルの体がなくなったので、ルキウスは地面に座り込んでしまう。

実の父親がなくなった事よりも、ラウドが生きていてくれた事を喜んでいる自分を客観的に複雑な思いで見ているもう一人の自分を心の中に見出した。そしてそのもう一人の自分の存在に嫌悪と安堵を感じた。

「大丈夫か？」

ラウドも同じようにしゃがみ、ルキウスがさされた傷を見る。

「かすっただけだからヘーキだよ。これくらいならあっという間に治せるし」

ラウドが心配しないように微笑むと、ルキウスはすぐに傷を治して見せた。安心して気が抜けたのか、ラウドも隣に座り込んだ。

「それよりさ、六つ星消えた？」

詳しい説明も聞かずフォゴルの魔封じに手を貸したが、だぶんフォゴルがいなくなれば六つ星の呪印が消えるのだろう。

ラウドは首筋をルキウスに見せた。

（消えてない！ そんな…）

ルキウスは顔がこわばっていくのが自分でも分かった。期待に反し、相変わらず六つ星はしっかりそこにあったのだ。

ルキウスの表情でラウドも悟ったらしい。突然笑ったかと思うと、激しく地面に拳骨をたたきつけた。

「なぜだ！ リルツェンの魔術師の血筋を絶てば消えるのではないのか！」

（え…）

ラウドの言葉にルキウスは耳を疑った。

（リルツェンの血を引くもの…？ まだその血を断ち切れてはいない。だって、ここに俺がいるから）

ルキウスの心は不思議なくらい冷静で、穏やかであった。

「ラウド…大丈夫だよ」

ルキウスはラウドをなだめるようにいい、フォゴルとサラの顛末をすべて話した。母の為に黙っておこうと思っていたが、話さなければ分かって貰えないだろうし、ラウドになら話しても母は許して

くれるだろう。

ラウドは驚きを隠せぬままルキウスの話を聞いていた。話終わると口を開いたが、何も言えない様だ。一方ルキウスはラウドを苦しめてきた『六つ星』から彼を解き放つことができるのであれば自分は魔封じされて魔力を失っても構わないと心の底からそう思っていた。

「だから、俺を魔封じすれば終わるんだ」

しかしそのルキウスの申し出に、ラウドは首を横にふった。

「約束しただろう？ お前には二度と魔封じはしないって」

「そんな約束もういいよ」

いまさら何を言っているのだろう。あの時と今とでは状況が違う。ルキウスはラウドににじり寄った。

「早く！」

「魔封じをしたらお前はお前でなくなってしまう。魔術の練習をしていたルキウスは生き生きとしていて、俺はその姿を見るのが好きだった。それにお前には今まで沢山助けてもらった。最後まで迷惑はかけられない」

「迷惑だなんて思っていないよ」

ラウドは力なく微笑むと、ルキウスを引き寄せた。

（えっ？）

そのままルキウスの唇にラウドのそれを重ねる。しかしそれはルキウスの深みを探ることもなく離れていった。

「ありがとう、感謝する」

そうルキウスの耳元で囁くと、ラウドはすばやくその場を立ち去った。

「ラウド！」

ルキウスは街中探したが、ラウドの姿を見つけることは出来なかった。

第25話

ルキウスは所々苔むして趣のある石垣に囲まれた屋敷の前に立つた。すぐさま門から警護兵が三人出てくる。

「俺、いや私はルキウス・クリスハルドと申します。モイア・ダニングにお目通りを」

「旦那様と約束はあるのか？」

「ありません、でも」

ルキウスは前にラウドからもらったネックレスを取り出した。

前に「何か」あったときにモイア・ダニングにネックレスを見せれば良い様に計らってくれるといった。今がその「何か」の時だ。

紫石の嵌ったネックレスをみた途端、門番達は態度を変え、中へと通してくれた。

（すごいな、これ）

驚きを隠せぬままルキウスは彼らの後ろに従った。

ルキウスはモイアの姿を『六つ星』会議の時に隣室からこっそりと覗いていたので知っているが、モイアはルキウスの事は知らない。いや、突然の乱入者として顔は見られたとは思う。だが彼はルキウスを旧知の友の様に暖かく迎えてくれた。

小柄な体、柔和な顔立ち。はつきり言ってラウドとは全てにおいてまったく似ていない。

「ラウドの行方を知りませんか？　どうしても会わなくてはならないのです」

勧められた椅子に座るなり、ルキウスはモイアに言ったが、残念ながらモイアはラウドが何処にいるか知らなかった。

「あなたのお役に立てなかった事は残念です。しかしあなたをラウドがどれくらい大切に思っていたか、そのネクレスを託した事で分かります。他に私が出来ることがあれば喜んで力を貸しましょう」

モイアの言葉にルキウスはネクレスを見つめた。そして一息ついてから、ルキウスはモイアにフォゴルとの全ての出来事を話した。モイアなら話しても大丈夫と思ったからだ。

「俺に魔封じをすれば終わりなのにそうしなかった。六つ星が消えなければ、ラウドはただの人殺しになってしまう」

必死な口調で語るルキウスの話を最後まで聞き、モイアは静かに口を開いた。

「あなたに魔封じをしなかったのは、彼がそう望んだからでしょう」

「でも…」

「私も呪印からあの子を解き放ってあげたい。しかし彼が選んだ道だから、こればかりは私にはどうすることもできない。ただ、彼が助けを求めてきたら、私は全力を尽くします。今はあの子を信じる、

それだけです」

ルキウスとモイア、ラウドに対する思いは同じでも考え方は違う。これ以上話しても平行線を辿るばかりだ。そう思ったルキウスは礼をいってモイアの屋敷を後にした。

（俺は絶対呪印からラウドを救う。ラウドが望まなくても、俺が望むことだから）

暫く考え抜いた末、ルキウスはラウドに頼らなくてもいい方法を見つけ出した。

* * *

「あんだ、本気？」

ヴェルマはルキウスの申し出にあからさまに眉を寄せた。ヴェルマに頼むため、仕方なく彼にもフォゴルとの顛末を話さざるを得なかった。

「冗談で言うわけないだろ」

「本当に、あんだってラウドにいかれちゃったのね」

「そうかも」

「素直に認めるんじゃないわよ、つまらないわねー」

ルキウスの額を指ではじくと、髪を掻き揚げつつルキウスの前に座って足を組んだ。

「ラウドの魔封じと違って、私の『記憶の消去』は元に戻せないの。もう何もかも思い出せなくなるのよ、いいの？ あんたの大好きなラウドの事だつて全く忘れちゃうわよ。それにあんたがリルツェン家の『縁』から外れたとしても『六つ星』が消えるとは限らないんでしょ？」

「消えるかどうか、やってみなくちゃ分からないじゃん。…俺は全てを忘れても別にかまわないよ」

母の事、父の事、ラウドの事…下手に記憶がある方がつらい気がする。

（でも、同じくらい楽しい思い出もいっぱいある。忘れたくないけど…仕方がないよね）

軽く息を一つ吐くと、ルキウスはヴェルマに深々と頭を下げた。

「頼むよ、ヴェルマしかもう頼る人がいないんだ」

自分で命を絶つことも考えた。しかし、そんなことをすれば、ラウドはきつと己を責めるだろう。彼はそういう人なのだ。だから、形だけでも生きていなくてはならない。

「本当にいいの？」

ルキウスは頷いたきり口を閉ざした。心は決まっているのでもう他に言うことはない。そんな彼を見ていたヴェルマは立ち上がると、乱雑に真っ白な髪を掻き毟った。

「もう、面倒ごと持ち込んで！ わかった、あんたがそう言うならやってあげるわ」

「ありがとう、ヴェルマ」

「じゃあ、こっちにきなさいよ」

ヴェルマはルキウスをベッドへ横たえた。

「次に目を開けるときは、何もかも忘れているわよ。はじめに見る顔は私だから、あまりの美しさにびっくりしないでね」

「覚えておくよ、忘れちゃうんだろうけど」

ルキウスは微笑んで瞳を閉じた。

「やめるなら今よ」

ヴェルマは躊躇しているようだ。

「最後にさ、ヴェルマがいい人だってわかってよかった。 ……それ
も忘れちゃうんだったね」

ルキウスは瞳をとじたまま告げた。

「本当、気づくのが遅いわよ。じゃあね」

ヴェルマがそう言った直後、ルキウスは体が温かくなるのを感じた。

（お願いします。絶対ラウドの呪印が解けますように。絶対…）

薄れゆく意識の中、ルキウスの心に浮かぶのはただそれだけだった。

* * *

眠りから覚め、ゆっくりと瞳を開けた。眩しい光が人影に遮られる。

「やっとお目覚め？」

逆光で分らないがヴェルマの声みたいだ。

ヴェルマ？

（…って、忘れてないじゃん）

驚いてルキウスは上半身を起こし、ヴェルマの腕を掴んだ。

「失敗してるよ！　だって俺、ヴェルマの事覚えて…ってっ！」

ヴェルマはルキウスの額を手のひらで叩いた。

「失礼ねー。失敗もなにもまだ何にもしてないんだから。あんたがうるさいからちょっと眠らせてただけよ」

「やってくれるって言ったじゃん」

「私は別にやっても構わないんだけど、どうしてもやめてくれって

いう人がいるのよね」

ヴェルマは体をずらす。奥の椅子から立ち上がる人影、それは紛れもなく…

「ラウド」

掠れた声で、ルキウスは呟いた。

「ラウドにあんたが来ても記憶は絶対消すなって言われていたの。でもあんたは消せ消せってうるさいし。二人でちゃんと話し合っどどちらにするか決めてよね。私、人を振り回すのは好きだけど、振り回されるのは大っ嫌いなものよ」

そういい残し、ヴェルマは部屋から出て行く。二人きりで残されたルキウスとラウドは見つめあったまましばらく過ごした。

「どこにいったんだよ？　すごく心配したんだから…」

口を開いたのはルキウスの方だった。言葉と共に涙も溢れそうになる。ラウドはゆっくり近づいてルキウスの側に跪いた。泣きそうな顔を見られない様にルキウスは下を向いた。

「すまない。お前がここまでするとは、いや、ルキウスなら必ずヴェルマの所へ行くと思った。だから彼に頼んでおいてよかった。ルキウスには俺の事を忘れて欲しくないんだ」

ラウドはルキウスの手に自分の手を重ねた。

その手に力がこもる。

「俺はルキウスが好きだ」

突然の告白にルキウスは顔を上げた。その勢いで今まで瞳に溜まっていた涙が落ち、ラウドとルキウスの手を濡らした。今まで待ちわびていた一言。とても嬉しい、けれど…

（言葉になるとなんて短くあつけないんだろう。この言葉が聞きたいために意地になって、大切な時間を無駄にしていた気がする）

居ても立ってもいられず、ルキウスは両手でラウドを抱きしめた。今はただラウドに触れたかった。

「ルキウス」

ラウドもぎゅっと抱きしめてくれる。そう、求めていたのはこのぬくもり、この逞しさ、この香り、このやさしさ…。

彼の鋼色の瞳は熱を帯び、ルキウスを優しく見下ろしている。

「ラウド」

ため息まじりのルキウスの呟きが合図となり、ラウドはルキウスをベッドへとゆっくり押し倒した。

* * *

まどろみから覚め、けだるい満足感の中、ルキウスは体をラウドの胸へ預けた。ラウドは瞳を閉じているが、口元だけ綻ばせると、ルキウスの髪を撫ぜた。やさしく撫でられながらルキウスはぼんや

りと部屋を眺めた。

「ねえ、そーいえば、ここってヴェルマの屋敷だよね」

ルキウスの言葉にラウドは声を立てて笑う。

「俺の実家だ。流石の俺でもヴェルマの屋敷でルキウスを抱こうとは思わないよ」

ルキウスは頬を上気させた。目覚めた後はラウドが見つかった事に、その後はラウドを感じることに夢中で、場所が移動していた事に今の今まで気付かなかったのだ。ラウドは上半身を起こすと一緒に起きあがったルキウスに口づける。

（ラウドの呪印、やっぱり解けてない）

首筋には赤い六つ星が相変わらずそこにあった。

ルキウスは体を少しずらし、ラウドの首筋の呪印に口付ける。

ラウドもそれに気づき、ルキウスを抱きしめた。

（俺たち、どうすればいいんだろう）

二人の気持ちがあつきり通じた後では、ヴェルマに記憶を消されるのが惜しい。

（やっぱり、魔封じしてもらえない）

そう心に決めて、ルキウスは体をはがした。

（ん…えっ？）

ルキウスは目を疑い、何度か瞬かせた。

（まだ夢の中？ でも、ない！）

「ちょっと、ラウド、鏡！」

ルキウスはあわててベッドから飛び降りた。足の奥が重い痛みにうずいたが、そんなことは構ってられない。

「大丈夫か？」

ルキウスの慌てようにラウドも後に続く。

「見て！ ないよね？ それとも俺の見間違いかな？」

興奮したルキウスがようやく見つけ出し差し出す手鏡にラウドも驚いた。

「どうして…？」

「さあ？」

まったく分らない。ラウドの首筋から綺麗さっぱりあの『六つ星』がなくなっていた。

「ルキウス、何かしたか？」

「何かした…って…」

どちらかといえばされた方だ。そう思い、先ほどの行為を思い出してルキウスは顔を赤くした。

「わからない。でも恥ずかしがらずにあえて言うならば」

ルキウスは前置いた。

「愛の力かな？」

その答えにラウドは笑い出す。

「ひどいな、笑うことないだろ」

ルキウスの顔は完全に真っ赤に染まった。

「すまない。でも、お前がいてくれたから俺は救われた。それは真実だ。だから俺も恥ずかしがらずにあえて言おう」

ラウドはルキウスへ真摯な瞳をむけた。

「俺もあなたを愛しています」

「ラウド…」

お互いの顔に幸福の笑みが広がる。そして二人は再び、嵐のような倒錯の世界へ入る始まりのキスを交わし始めた。

第26話・終章

クワントの評議会は大騒ぎだったという。

フォゴル・リルツェンを魔封じし、結果的にこの世から大魔術師の一人を消し去ってしまったということで一部の評議会委員から非難をあびたラウドだったが、『六つ星』が彼の首筋から綺麗に消えたという事実と、リグ・ガレット、モイア・ダニング、ヴェルマ・サレイド、そしてエスカトの町からわざわざ出てきたマリー・ジョコフの口ぞえもあり、彼の罪は問われることはなかった。

しかも、程無くラウドの望みどおり『六つ星』は迷信であり、痣のある子供は殺さないようにとの法ができた。

慣習として染み付いているのですぐになくなることはないかもしれないが、救われる子供は確実に増えるだろう。

評議会に『六つ星』の報告をするにあたり、ラウドは自分の出生を明かし、ラウド・ダニングから実家のラウド・スティーヴェルと名前を変えた。そして二十六年ぶりの親子の対面にルキウスも立ち会った。

（モイアとは全然似てないと思ったけど、血がつながっていないなら当然だね。やっぱり本当のお父さんの方が容姿も雰囲気もなんとなく似ているな）

当のルキウスといえば、クワントの一人に列せられることになった。ルキウス・リルツェンではなく、ルキウス・クリスハルドとしてだ。神話の七魔道士以外からクワントに任命された初めての例と

なる。

当初この話を聞いた時、母の名誉を守るために断った。リルツエンの息子としての名誉などいらなかった。しかし、モイアはルキウスの魔力の高さを認め、事実を伏せたままルキウス・クリスハルドとしてクワントになれるよう掛け合ってくれた。

「あんたが誰から生まれようと、私には興味の無いことだわ」

ルキウスの出生を知るもう一人、ヴェルマはそっけなくそう言ったが、彼なりに黙っていてくれるという事らしい。ルキウスは苦笑しつつもヴェルマに感謝した。

そのためルキウスは歴史上二人目の一般人から産まれた魔術師として、又人気のあった首長のクレル・クリスハルド家の生き残りの息子として広く知れ渡るようになった。それにはナラも喜び、リグ・ガレッドの計らいもあって、首都エルクサンドラで彼女と再び一緒に住むようになった。

同時にルキウスはヴェルマの下で本格的に魔術の勉強をしはじめた。魔力は強くても一般的に魔術師の卵たちがやるように、ルキウスも魔術師の元で基礎からしっかり学びたかったのだ。ルキウスはヴェルマの屋敷に毎日通い、七日目によろやく弟子にしてもらえた。

「私の弟子になったからには絶対恥ずかしい魔術は使わないでよね」

口は悪いし厳しいが、結構丁寧に教えてくれるのだ。ただヴェルマの性格上、彼に振り回され、修行というより試練と思われるような目にもあわざるを得なかった。しかも、

「六つ星って、リルツェンの血筋に仇をなす者を見つけ出すためにかけた魔法なんでしょ？ ってことは、ラウドが心変わりしたら、またラウドの首筋に六つ星が浮かび上がるってことよね。せいぜいラウドの首筋をこまめにチェックすることね。彼、結構モテるから」

とか、

「ラウドの体、結構良かったでしょう？ 仕込んだのは私だから、あんたが気持ちいい思いをしたら私に感謝しなさいね」

等々、わざとルキウスを嫉妬させることも平気でいたりするのだ。

「ヴェルマほど優雅に魔術を使いこなす人はいないと思って頼んだけど、ちよっと人選間違ったかな、俺」

ルキウスは神殿の中庭を巡る回路の柱に背をもたせかけながら座った。

今やルキウスの右手の甲に彫られた魔術師の印である太陽の紋章を眺めつつ、ため息をついた。

「元気がないな、何かあったのか？」

突然上から降ってくる声に、ルキウスは自然と微笑が浮かんだ。ここ二月ほど仕事で首都を離れていたラウドが帰ってきたのだ。

「お帰り……」

立ち上がったルキウスはラウドを眩しそうに見つめる。もう首筋

を隠す必要もないので長かった髪を短く切っていた。それはそれがかっこいいとルキウスは思う。

「少し背が伸びたか？ それに髪も伸びた」

ラウドはルキウスの髪のをいとおしそうに指に絡めた。

「ヴェルマがさ、髪を伸ばすように命令したんだよ。俺としては鬱陶しいんだけど」

ヴェルマは真っ白な自分と真っ黒なルキウスのコントラストを重視したいらしい。

「並んだときに、白が際立つでしょう？ それに髪を伸ばした方があんたの童顔が隠せていいじゃない。切ったら許さないわよ」

それだけの、たぶんその場の思いつきの理由でその日から伸ばすこととなったのだ。そのうち思いつきでまた切れとか言うに違いない。

「おまえの髪は綺麗だから、伸ばしたら見事だろうな」

久しぶりに会ったということもあり、髪をまさぐるラウドの手にルキウスはたまらず瞳を閉じた。

「そんな顔、するな。この青空の下で押し倒したくなる」

そう笑って、ラウドの唇は素早くルキウスの唇を掠め取った。

「しばらくはここにいられるの？」

少し照れながらルキウスは囁いた。二月程放っておかれて寂しかったのは事実だが、そんなにも欲しそうな顔だったのだろうか？

「ああ、神殿へ報告したら今回の仕事は終わりだ。それから一緒に一緒にいられる。そうだな、まず晩飯と一緒に食おう」

「じゃあ、その席にヴェルマを招待しなくちゃね」

「それは重要だ」

ヴェルマは誘わないと無理やり付いてくるくせに、誘うところないのだ。二人きりの時間を確保するための、ヴェルマの性格を熟知した二人の知恵であった。

ルキウスとラウドは並んで歩き出す。自然と二人の手の甲がふれ、そして繋がれる。雲間から漏れた陽の光はヴェールのように回廊に差し込み、二人の行く末を照らし出すかのように辺りを輝かせた。

第26話・終章（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。
また次回作でお会いできることを楽しみにしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5260c/>

出会いは六つの星の下で

2010年10月30日18時24分発行